
魔王と輪舞曲を

ひらみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と輪舞曲を

【Nコード】

N2273BA

【作者名】

ひらみ

【あらすじ】

4月、初春。

「4月——わたしは魔王と出逢った」

心に傷を抱えた少女『鹿島 恵』は

少女達の園『エリシオン女学院』に入学することとなる。

そこで様々な出会い、そして悲劇——飲びが一瞬の内に内包されていた。

なにより一人の不思議な『ヒト』——悠木杏里との邂逅を口切りに巻き起こる怪奇事件。

傷付き、嘆き、笑う——果て無き花園。

歪な心、歪んだ願い。少女たちの意志を飲み込んで混沌は静かに囁く。

恵を中心に回る失踪事件の結末は!?

「——これ、合理的でもなんでもありませんけど杏里……一人にしてください」

——世界はゆるやかに収束を始める。

少女の門出とその冒険に

やわらかな日差しを受け止めながら、わたしは歩いている。

足取りは軽く、淀みを感じさせない。

下ろし立ての制服の所為だろうか、身体に羽が生えたみたいに軽快だ。

白のブラウス、その上に着込んだ紺色のブレザー、首もとにワンポイントの赤い柄のリボンが風に煽られて小さく揺れる。

緑を基調とした白と深緑のチェック柄があしらわれたプリッツスカートが、スラリと伸びた足の動きに合わせ小躍りし、まるで新たな門出を祝福しているようだ。

見慣れた景色すらも今日はどこか輝いて見える。世界中の息吹を感じ取れる。

まるで花が咲いたように、わたしの心にも一点の光がある。

親しみ深い商店街を抜けていくと、馴染みの薄い駅前通りへ。

そもそも駅に入るような用事なんて限られている。

精々となり町に服や小物を買いにいく程度だ。

田舎町はなにかと物揃えが悪い、なのでとなり町までいつも出向いていたりするわけなのだが。

それはさておき――、

小さな駅に入ると、二度、三度と見慣れぬ時刻表を眺めて逡巡する。

なぜなら今日の電車はいつも乗る電車とは違うのだ。

少しでもドキドキしてるかも。

鼓動がとまらない。

なぜなら今日は高校の入学式。

この春、わたしこと、鹿島恵はエリシオン女学院に入学することになったのだ。かしまめぐみ

やってきた電車に乗り込むと、ドア近くに待機する。

車内を見渡してみるが、それほど人気はない。

少しだけ早めに登校したのが幸を期したのだろうか、それとも元々こっち側に通勤するような人間が居ないだけなのかもしれない。

わたしは再び、振り返って景色を眺める。

眼下には見慣れた街、それらが段々と遠ざかっていくのが見える。幾分、寂しさも感じるがそれよりも緊張のほうに優っているかも。なんとってあの名門と謳われるお嬢様学校である『エリシオン女学院』に入学するのだ。

初等部から中等部、高等部、そして大学まですべて、敷地内に収まっている超巨大学院。一貫した教育を施すことで真の人間に足る人格育成を目指すという方針らしい。

そこらへんの事情はまるでわたしには分からないが、古い『しきたり』というか伝統などが未だに息づいている現代では希な学校らしい。

なぜ自分が入学する学校を『らしい』なんて言葉で片付けてしまっているのかというと、話すとこれは長くなってしまふから要約させてもらうと『たまたま』なのだ。

本来ならば、今まで自分が住んでいた街になる高校に通うべきなんだろう、と思う。

でもわたしは嫌だった。

今までの生活も、今までの街も、今までの友人も、今までのすべてが――嫌になってしまった。

環境に罪はない、すべてはわたしの粗暴な行いの結果。

軽拳妄動、
自業自得。

中学をやり直せるというのなら、わたしは間違いなくあの日、あの時をセレクトするだろう。

思い出すだけで胸の奥がチクリと痛む。

あれは帰らぬ黄金の日々で、

はちみつみたいな甘い記憶をコールドタールのような真っ黒の珈琲が塗り潰すように、

わたしの心の瑕は未だ癒えきっていない。

だからあの日々の思い出を遠ざけたくて、思い出してしまう要因から逃れたい一心で、なんとなくエリシオン女学院を志望した。

正直に言えば、受かる気などなかったのだ。

わたしは中学三年半ば辺りの間、部屋に籠もりきって忸怩の淵で彷徨していた。

生きてることが嫌になって、自暴自棄に陥り、この世界のすべてを恨んだりしていた。

そんな中、ただ親を納得させる動機が欲しかったというだけの理由で受けた無謀な志望。

あの時のことを思い出すことは恥ずかしい——完全に一人、闇の中で自傷行為をしていたわたしは、親身になってくれた友達の力もあって、完全に喪失していた社会性を取り戻すことが出来たのだ。

——これはまた別の話。

しかし神様は意外なところで天恵をくださるのだ。

無謀だと思われた志望校の合格通知。

晴れてわたしはエリシオン女学院に合格し、今日その一員になるべく登校している。

そんなことを考えている内に隣町の駅、久里砂市に到着したらしい。

わたしは出勤するサラリーマンの間を潜って、階段を早足で駆け

下りていく。

改札口に切符を押し込むと軽快な音と共に私と出口を隔てるためのドアが開いた。

ここからは自分の未知の世界、想像するだけで胸が張り裂けそうになるほど鼓動が早まる。

1歩。

2歩。

3歩。

鼓動に合わせて踏み出す足——改札口を通り抜けて駅前まで駆け出す。

ステップを踏んでトンつと両足で踏みしめた。

ここが久里砂市。

ここからわたしの新しい生活が始まるんだ。

／

先に行っておくと

——わたしは方向音痴である、それもかなり重度のくらいにあると言っても誇張じゃないくらい。

見知った街でも、すこし回り道や知らない曲がり角を行くと、方

角を見失う。異次元に迷い込む。

方向音痴の人間にしか、これは分からない感覚だろうけど、地図なんて無意味なのだ。あれは方角や現在位置を正確に把握してこそ初めて意味を成すものであって、踏み出した瞬間に異空間に迷い込んでしまう異邦人にはなんの意味もなさないのだ、

結論から言うと、わたしは大いに迷った、大通り道沿いに歩けばいいと妹に言われて、地図まで渡された。事前に細かくチェックを入れて迷わないように最前準備をした、というのに結果としてはその努力はムダだったと言うしかない。

わたしは遠くに聳える学院のシンボルとも云う『時計塔』を諦観の目で見つめながら、思わず溜息をついた。

同じところをグルグルと回っているだけにしか見えず、もうこれは駄目だと思っていた時、

「あれ、メグじゃん。なにしてんの？」

背後から見知った声が聞こえてきて、わたしは背後に振り返る。

「ああああ——倉子っ、良かったあ……わたしこのままミイラになっちゃうかと思ったよ……」

「そりゃ大げさな。んー、いつも通り、道に迷ったワケか。いまメグってば学院とは逆方向に行ってるよ、そっちだと私の砂白高校に行くことになっちゃうよ」

「ああ……やっぱりこっちじゃないんだ……なんとなくそんな気もしてたんだけど」

ここで補足しておくと、方向音痴の人間には方角的な正しさは皆無である。つまりどっちにいくがどちらを選択しようが自己の行

動を疑ってかかる習性があるから。

「しっかたないなー、私がちよつくら校門前まで付いて云ってあげるから、ついて来なさい」

「え——でもいいの？」

「幼馴染みのメグをここに放置して、登校出来るほど倉子お姉ちゃん是人非人じゃありません、ほら、置いてくよー」

自転車を降りると、そのまま旋回してわたしが先ほど来た方向に向けて歩き出す。そのまま振り返るとさわやかな笑顔を向けて手招きをしてくれた。

彼女は小栗倉子、砂白高校に通う高校二年生。さっき彼女が言ったようにひとつ上の幼馴染み。高い身長、金色のショートカット、流れるように涼やかな瞳。まるで外国人のような容姿だ。

わたしの一つ年上の少女はいつもわたしのことを気にかけてくれていた。

悩んだ時も、落ち込んだ時も楽しい時も、苦しい時でも、共に居てくれた幼馴染み。それだけじゃなくて誰にだって優しくて気遣いが出るスーパーパーお姉ちゃん。

弱点はちよつと面倒臭がり運動嫌いというところ。「私は文学少女なの」というのは本人の談。実際のわたしは彼女が運動をしている場面を見たことがないからおそらく本当に嫌いなんだろうって思ってる。

いつも飄々としていて、一言で表すなら“軽妙洒脱”

その言葉が最も似合う女子高生じゃないかなってわたしは勝手にそう思ってる。

「——で」

大通りに戻ってきたくらいのところを二人で歩いていく。倉子は自転車を押して歩きながら、わたしを見ないままで、

「メグ姫の心境は如何かなー？」

ぼう、と空を見つめながら、そんなことを聞いてきた。

一瞬、何のことだろう？ と悩んでみたがわたしと倉子はあの日以来会ってないことを思い出した。きっとそのことを聞きたいのだろう。

「うん、もう平気かな。」

「そりゃ良かった。私さ、こう見えてメグのこと心配だったから」

こういう気遣いをなんでもないような事のようにサラリと嫌み無く言えるのは、彼女の才能かもしれない。

倉子の言葉はまるで魔法のように、人同士に生じてしまう壁のようなもの、をその涼やかな言葉で解きほぐしてしまう。そんな雰囲気は彼女は、持っているのだ。

「きついと思ったらそう言ってね、じゃないとお姉さんは悲しいから」

「分かってる、なにかあったら倉子に頼るよ。わたしだけじゃ抱えきれないこともやっぱりあるから」

「うん、頼ることは恥じゃない。誰にだって壊れそうになる時は必ずあるから」

「うん、だからこそ、倉子には感謝してるの。あの時倉子が居なかったら、わたしは本当に对人恐怖症になっていたかもしれないし……」

そういう私の顔を倉子は見つめて、一つ苦笑を漏らすとまた正面に向き直ると、

「でもさ、メグ。一度壊れてしまった心は——元通りにはならない、瑕は瑕のまま、勝手に消えたり、どこかへ言ったりはしないから——」

——抱え込めば抱え込むだけ瑕の痛みは激しくなる。彼女は言いながら、遠くの空を見つめている。

わたしはその横顔を見つめている。それはどこかここではないなにかを見つめているようで少しだけ倉子が遠くに感じられた。

「——ま、私が言いたいことはなにかあったら私に頼りなさいってこと。いいね？」

わたしを見ないまま、どこか穏やかな口調で諭すように彼女は言った。

「うん、当然だよ。だってわたしたち友達じゃない」

「まったくだ、私たち幼馴染だもんね」

ふたりでクスクスと笑い合う、幼い頃から続けられている、ふたりの思いは今もそのまま、なにも変わらないただ穏やかな日々、そうこれからもきっとふたりはそう生きていけるってそう感じられた気がした。

彼女はわたしの瑕がまだ癒えてないのを心配してくれている。たしかにわたしの瑕は癒えることはないのかもしれない。でもそんな時、彼女が側に居てくれるということはとても嬉しい。

——ありがとう、倉子

わたしは心の中だけで友人に礼を言おうと、やがて見えてきた桜並木にその足を踏み入れた。

／

「到着、つと……人がまばらだね。もうすぐ始業式始まっちゃうんじゃない？」

桜並木のゆるやかで長い上り坂を上がり終わるとその先に大きな校門がある。歴史と伝統を感じさせるような石造りの門、左右に伸びる巨大な壁はまるで障壁、どこかの監獄を連想させるほどに強固な作りをしていた。

何者をも拒絶する外壁、威圧するように聳え立つ門構へ。どこかの城に迷い込んでしまったんじゃないかと勘違いしてしまうほど幻想的な光景に圧倒されてしまう。

「ホントだ。どうしょっ、このままだと始業式に遅刻した生徒って

ことで目え付けられちゃうよお」

「んーん、いくらスーパー幼馴染みの倉子さんでもそこまでは面倒見られないよ、メグ。ここから先は私の管轄外なもの」

う、意外に冷たい。とはいえ幼馴染みに不法侵入まで犯させて道案内してもらうというのも道徳的なものでどうなんだろう、とも思うしやっぱりここからは自分の足で行かなきゃいけないだろう。

「大丈夫、ゴメンね。倉子を遅刻させちゃうようなことになっちゃって」

「……別に良いんだよ。メグを放っておけないし。それに私の遅刻は日常茶飯事だから。何とでも言い訳が立つんだ」

「……へー」

相変わらずわたしの幼馴染みは、奔放な生活をしているらしい、気が向かないと学校にもいかない。風の向くまま気の向くまま、本人曰く――

「ほら、私って前世がロマだから」

知らないし、前世がジプシーだなんて奇矯な発言を振る舞われると幼馴染みとして色々……その、困る。

そんな異相の人、倉子は気にした様子もなく、こちらの顔をじっと見つめている。

「そうそう、メグ」

「なに？」

「なんか異性関係のトラブルがありそうだよ」

出た。

わたしの脈拍が跳ね上がる。

彼女の不思議な力。

昔から、彼女はなにかに付けて感が鋭く、捜し物や落とし物を見付けるのが上手だった。そしてそれだけではない。彼女の話だと漠然とだが人の未来を観ることが出来るということらしい。

彼女に言わせれば「普通だよ。少しだけ“人と違う目線”で“人を捉えている”だけだから」とのことらしいけど、未だにわたしは視えた事もないし、他の人も視えたという報告もない。つまり彼女だから出来る特性だったこと。

「異性？ 同性じゃなくて異性なの？」

「うーん、なんだか雑駁としていて、正確に“視え”てこないからなんともいえないけど多分、異性じゃないかな」

これから男子禁制の女子校での寮生になるわたしには一番ほど遠い予言のような気がするけど……

「先生とか……そんなろまんす？」

「メグ、年上趣味か、そういえばパパさん好きーって言ってたもんね」

いきなり忘却の底に仕舞い込んで、鍵を何重にも掛けていた戸棚

を空けられた、ガリリとな☆

思わず顔が羞恥で林檎のように赤く染まってしまい、叫びだした
い衝動を押し殺す。

「そっ、そんな太古の昔のこと、今出すかなあ！」

「はははっ、私に取ってみれば昨日みたいなことなんだよ。十年前
だろうと三年前だろうといつでも変わらないよ、いつの瞬間だって
明瞭なんだ」

その言葉の意味はわたしには理解出来ない、その言葉の質量も“
わたしは知らなかった”。倉子はわたしの様子を見て満足したよう
に微笑を浮かべる。

「うんうん、相伴の駄賃くらいにはなった気がするよ。久しぶりに
メグの乙女力を見たね」

「ぐぬぬーっ、すっごく恥ずかしいなあ。こういうからかいは人の
いないところでやってよね、倉子」

「で、年上好みなわけ？」

倉子の奸計に見事に嵌って「うがー」と乙女力ゼロの声を上げつ
つ倉子にじゃれ付く。校門の前で本校生徒と他校の生徒が暴れてま
すって通報が入らないことを祈るばかり。

「とにかくっ、異性とろまんすになるようなシチュが本校にはあり
ません！」

「ふーん……じゃあなんだろうね、私の景観」

倉子が踏み込んできて、わたしの顔を覗き込むようにする。パールアイの瞳が半眼になりわたしの目を凝視している。

——ちょ、つと、顔近い……息が掛かりそう。

傍目からお目文字すると明らかにそっちのお人、背景には百合の花。キマシタワコレと思われそうなほど接近している顔と顔。元々、倉子は美人だし、男性にも告白されるが、女性にはそのバイ、でなく倍くらい告白されているほどだ。たしかにわたしから見ても格好良いと思える同性だ。憧れの対象になりやすい人柄だと思う。だからってこれは拙い……

「んーん、“視”え難いなー、まだメグが未開の所だから意識出来ない所為もあるんだろうけどさ」

「そつ、そうなんだ……ははは」

「んー？ なに焦ってんの。私なにかやっちゃったっけ？」

「何でもない何でもない、大丈夫。気にしないでいいから！」

この至近距離はやばいって。倉子の香りと吸い込まれそうな紫瞳に魅入られて、なにかも捧げてしまいそうな衝動が沸き上がりそうになる。校門の前なのに。

じいっと見詰められる仕打ちに堪えきれなくなって視線をそむけると首を振って煩惱を打ち払う。

「そか。てことで倉子お姉ちゃんからの最後の助言ね。“異性問題に気をつける”ってね」

「異性かぁ、なんだろうね、実際」

まるで見当が付かない、いつも倉子が言うことは中っていた所為もありどうも居心地が悪い。

「分かんない。もしかしたら空から降って来たり、校門くぐったら赤ん坊の男の子を拾ったりするんじゃない？」

「あり得ないけど倉子が言うとなうなりそうだからヤメテ」

きっぱりと否定する様が可笑しいのか笑いを押し殺すように「くく」と低く倉子が笑う。

「大丈夫、その類じゃない。それだけは保証出来るよ」

いつもより胡乱としているためわたしは複雑な表情になりながらもうん、と一つ頷いた。

「さて、あまり他校の制服で此処をうろついてると変な勘ぐり受けちやいそうだからそろそろ私、行くから」

わたしが苦笑を浮かべている様を見てご機嫌の様子で頷きながら倉子は自転車に跨がる。

「ああ、うん。ありがと、倉子。なんだかすごく助かったし、気が楽になったカモ」

「気にしない。友情はプライスレス。大切なものだしね」

ウインクを一つするにとっても美人は絵になる。おまけに同期す

るように桜が倉子の周りを彩るように吹き上げていくと、自然まで美人の味方かつ！　なんて馬鹿なことを考えたり。

「ありがとう、倉子。じゃあわたしもそろそろ行くね」

「うん、じゃあまた――暇が合ったら遊ぼうか、電話するよ」

「分かった、じゃあ行ってきます！」

「いってら。てことで私も行ってきますー」

手を振り合い、わたしは校門の内側へ、彼女は校門から遠ざかっていく。

ふいに立ち止まって、その後ろ姿を見送る。

幼馴染みは振り返ることなく、そのまま地平線の向こうに消えようとしていた。

心細さが沸き上がって、いつもの病魔が這い上がってくる。それを胸の奥で押さえ込むと振り返った。

もう振り向かず――その先へ。

季節は春――

桜舞う季節、

咲き乱れる桜葉の乱舞の中をわたしは行く。

暖かな日差しとキンとした風がわたしを包み込んで、幻想に包まれていた憧憬に誘おうとする。

胸を擦る想いはあれど、

今日は新たな一年の始まり、

忘れ得ぬ瑕は痛むけれど、ただ歩く。

まどろみのような時間は終わったのだ。

そうしてわたしの長いようで短かったあの日々が始まりを告げる。
ちょっぴり甘く、ほろ苦い、
黄金色の日々。

4月――わたしは魔王と出会った。

少女の門出とその冒険に（後書き）

初投稿になります。

稚拙な作品ではありますが読んで頂けたら幸いです。

尚、誤字脱字など見つけれましたら教えて頂けたら嬉しいです。

天使たちの午前

煉瓦造りの門はまるで来るものを威圧するようにそびえ立つ。

今は登校する生徒のために開いてはいるが通常、この門が外部からの訪問で開くことはそう多くない。

ここは天使の住処。外界の異物を不用意に招き入れるわけにはいかないのだ。

意を決し、校門をくぐる。

まず感じたのは外界よりも清涼と感じられる空気。

比喩ではなく外と内の空気の質が変わったのを感じる。

外部の毒のような大気とは違う、この世界だけのために用意させた酸素。

理由はわからないけれど、ここはわたしが今まで過ごしてきた世界とは違うのだ、と唐突に理解した。

閉じた世界、という風聞を思い出した。

そう、ここは外と隔絶され此処だけで終始する世界。

この巨大な円上だけの世界なんだということ。今までの常識は忘れなければいけない、外での常識はこの世界での非常識かもしれない。

わたしは身を引き締めるように襟とりボンを整えて歩き出す。

正門を通過して登校、来客用に整地された通行路を歩るしていく。

ここは外で見た景色の延長、車用に道路があり、左右に歩道がある。内も外も変わらない、まるで街中の延長線上にあるようだ。

見上げればヒラリと舞い散る桜の片。ここの桜木はすこし早咲きらしい。

暫く歩いていくと古風な木造建ての校舎が見えてくる。

幸い、わたしの遅れはそれほどでも無かったのか、校庭の中にはまばらに生徒がいた。

思い思いに誰かと談話をしている姿を見るとどうもわたしは乗り遅れたんじゃないかという阻害感を覚えてしまうけど。

社会性を失いかけていたわたしは他者に話しかけるといいう行為自体がとてつもない高ハードルなのだ。

お父さん、お母さん、妹なら大丈夫、幼なじみである倉子もなんとかOK、でもその他の人間はNG。

話しかけようとすれば言葉がもつれて、息を飲み動悸が乱れる、やがて顔が羞恥で火照り、俯くばかりになってしまふという結果。対人恐怖症とはこういうことなのだ。

結論から言えば、人と接触しないようにすれば解決するという消極的解決に至ったわたしはそれ以来、人との接触行動を可能なかぎり避けるようにしている。

そして今回のことも例外ではないわけで。

そうやって暇を持て余すように、主の像が置かれている庭に立ち尽くしていると急に場が色めき立つ。

なんなのかと、俯いていた顔を上げると鼻腔をくすぐる風。

薔薇の香りだと、気が付いた時、目の前を赤の女性が通り過ぎた。

否、それは腰下近くまで伸びた長い髪、風に揺れて辺りに五弁花の芳醇な香りを満たす。

それを光に溶けそうなほど白く繊細な指先が梳いていく。

ややつり上がり、強気を伺わせる茶色の瞳、すらりとした体軀は豹のを連想させる。

薔薇の姫君――

そんな言葉が脳裏に浮かび上がってくる。

倉子の美しさは野に咲く花。雨風や日差しに見舞われようが力強く咲き誇る市井の花と思う。野生ならではの不揃いな美貌というんだろうか。

対するこの女性は丁寧に温室で育てられ、美しくそしてしなやかに育つことを約束された花、純粹培養された薔薇。足先から爪の先に至るまで無駄な要素などない美の象徴。

観賞に応えるように彼女の髪がムラのない絹のように靡いた。

それだけで周囲の空気が熱を帯びる。

隔絶世界に住まう薔薇姫——そんな言葉がふいに浮かび上がり、通り過ぎる少女の横顔を一瞥した。

少女は全員を見渡せるような場所まで足を運ぶと立ち止まり、姿勢のよいたち振る舞いで生徒たちを順繰りする。

「ごきげんよう、新入生の皆さん。私たちは聖徒会ローゼス役員です。まずは本校に入学おめでとう。聖徒会一同に変わって私が祝辞を言わせてもらいます」

そこまで云い終えらともう一度順繰りをして息を吸い込む。

「申し遅れたわ。私は聖徒会長、剣束珠希。正式な自己紹介はこの後の始業式で行いたいと考えているけれど、まずはこれから同じ庭で過ごす後輩に挨拶をしたいと思ってみんなに会いにきたの」

感覚的に火を発するほど周囲の熱が昂ぶる。

燃え上がる羨望、周囲の熱とは真逆にわたしの熱は引いていく。

——正直言くと、面倒かな。

こういうのを苦手をしている所為もあるからだろうか、剣束と名乗った先輩の行動を煩わしいと感じてしまう。

興奮の坩堝、そんな光景を外側から退屈に眺めながらはやく芝居が片付くのを待っていたのだけど……。

ふと、目が合った。

他者と視線を合わせてしまうと途端に動悸が怪しくなって、即座に目を伏せて逸らすと、彼女は気にした様子もなくまたしゃべり始める。

「ここは神の庭、神に遣える者としての道徳と教養などの修練は当然でしょうけど、皆さんが本校に入学して良かったと思えるような生活をして欲しい。そのための私達、聖徒会は労力を惜しまないということ覚えておいてちょうだい」

そこまで云うと聖徒会長と名乗った剣束珠希先輩はふかぶかと頭を下げ、誰もがうつとりとしそうな笑みを浮かべた。

後光が差して見えるのは気のせいだと思う。

静寂に場が沈む。誰一人声を無くしその女性の完成された所作を見つめていた。

やがて夢から覚めるように拍手の音が疎らに聞こえ、それが喝采に変わるまでにそう時間はかからなかった。

真逆の人間、わたしを陰とすると彼女は陽。

けして交わることもない人間なんだろうなあ、となんとなく自虐的思考で遊んでみた。

「聖徒会か……」と、言葉に乘せてみたが感慨も浮かばない。

わたしにしてみれば吸う空気すら違う異世界人の話も同じだ。接触することもない相手に特別な感情を向けるはずもない。

わたしは俯いたまま、今の憂鬱な時間が過ぎ去るのを待ったため思考の海へと埋没していく。

「ねえ、貴女。少しいいかしら」

「……………」

考えごとをすると周りの景色が完全に消えてしまう癖があるから全く気づいていなかった。

薔薇の香り、目の前に聖徒会長で在らされる剣束珠希先輩が立っていた。

「あ、あ、あ………」

「あああ……?」

キョトン、とした顔でわたしの発言を繰り返す。

「……あ、あの、その」

……言葉が出てこない、顔が急激に熱を帯びて感情がヒヤリと冷え込む。準備の出来てない接触はいつもこうだ。赤面し、身体が緊張状態になって金縛りに囚われる。

挙動不審者。その評価が下るのには僅かな時間で十分。
モノの五秒でも人は人を断じることが出来る。

——薔薇姫、エメラルドグリーンの瞳の涼やかな瞳が細められ、そっと穏やかに相好を崩すとわたしのリボンに触れた。

「——落ち着いて。私は貴女を害さない」

少しだけ風に煽られて乱れていたリボンの位置を正しながら剣束会長はわたしにそう囁いた。

少しだけ鼓動が収まる。硬直状態だった筋肉の緊張が解けていく。

「……あ、ありがとうございます……その」

「珠希ね」

「珠希、先輩」

ようやくわたしは対面した人の名前を呼ぶことができた。

「うん、初めまして。鹿島 恵さん」

名前を知ってる？

「あ……のどうしてわたしの名前を知ってるんですか？」

「それはね、私事前に新入生の名簿に目を通しているからよ」

鳶色の瞳でおどけるような片目のまばたきをする。

それにしても新入生全員の名前を覚えるなんて簡単なことじゃない。

そんな離れ業を平然とやって退ける人だからこそ生徒会長なんてものが出来るんだろう。

「けどそれだけじゃないの」

「どういうことですか？」

「私、鹿島さんのこと知ってるから。正確には鹿島恵さんを知ってるんじゃないって鹿島さんの家を知ってるってことね」

穏やかな笑みを崩さないまま、リボンの位置がようやく決まった

のか「よしっ、と」と言っとうなずいた。

「……魔女でしょ？」

「え？ どうして……」

「うん、私も魔女だから」

誰をも魅了するようなまぶしい笑顔、剣束先輩はわたしを真っ直ぐ見つめたまま、

「鹿島さんの御爺様にはよくしてもらったと私の父がよく話していたから」

そう答えた。

確かに、わたしの家系は元を辿れば魔法使いの家系だ。

けれどそれは昔の話——年々魔法を操る秘業は失われ、わたしの代には普通の家となんの変りないものになってしまっていた。

残った秘業は昔は魔女だったことがあるという歴史だけ。

もう魔法使いとしての鹿島家は形骸化してると言っても過言じゃない。

だから魔女の話は縁のないと思っていた。完全に魔法という言葉忘却していた。そして彼方にあった記憶の言葉が剣束先輩の口からこぼれ出たことに驚いた。

「驚いてるわね。無理もないかな、鹿島家は当代で魔女の職から退任していると訊いていたし」

「いえ、魔女の話は祖父からよく聞いてます。でも剣束先輩の口からそれを聞くとは思わなかったので……」

「そうね、昔話程度に耳にした話を掘り起こされても戸惑うだけかもしれないわね。ちょっとだけ悪戯が過ぎた気がするわ、御免なさい」

そういつて剣柄先輩が頭を下げるからわたしはあわてて肩を掴んで顔を起こさせようとする。

「だ、大丈夫ですっ、大丈夫っ……」

そんなことをされると人の注目を浴びてしまう。そう思うだけで心臓が早鐘を打ってきて、苦しくなる。

でも先輩を心配させるとさらにマズい自体になりそうで、もう涙目になりそう。

とにかく先輩の頭を上げさせて、頷きながら大丈夫と謔言のように繰り返すと先輩のほうも理解してくれみたいで。

「そう？ 他人の事情を考えず発言してしまったし、謝らないとって思っただけど。」

「いえ、わたし自身もそれほど自覚もなくて、なんだか他人ごときみたいな話ですから」

「……そう、それなら良かった」

それを聞いて胸を撫で下ろすように相好を崩す。思わずその笑顔に見惚れてしまった。仕草ひとつとっても洗練されていて嫌みにならない。人の作り出す美の頂点を見ているようだ。

「ねえ鹿島恵さん、恵って呼んでもいいかしら」

「えっ、あっ？」

遠くから見守っていた剣束先輩のファンが取り巻き、それらが一斉に声をあげる。

どういう展開なんのかわからない。作りモノめいた白い指先がわたしの頬にかかる黒髪を撫でている。その行為でわたしは完全に借りてきた猫になった。発火物が近くにあるときと燃えるほど熱量を含んでる気がする。

「恵」

「は、はははっ」

「ははは？」

「——はい、剣束先輩……」

満足そうな笑みを浮かべたまま、わたしの頬にかかる黒髪を撫でる。

「珠希、でね」

「は、はっ、はいっ、珠希、せ、先輩」

訂正、猫じゃなくてネコなのかも……。

先輩はそっと顔を寄せ、頬と頬を重ねるとこういった。

「——恵、これからよろしく」

と。

ゆっくりと身体を起こしおどけたような顔。

ごきげんよう、と化石めいた言葉を言っ
てそのまま背中を向けた。
わたしはというとまた硬直したまま。
それが挨拶だということに
気づくと慌てて頭を下げてごきげんよっ、と返した。

もつれるような挨拶をしてしまうと、
同級生たちの嘲笑が聞こえてきて、

わたしはそれでまた真っ赤に染まった。

天使たちの午前（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。

導入部分ではありますがもう少しお付き合い頂けたら嬉しいです。

毎度の事です。誤字脱字などあればご報告お願い致します。

境界線の少女たち

ちなみに「ごきげんよう」という言葉はこの学院では一般的な挨拶と言える。とにかく一日中「ごきげんよう」という挨拶をする。

朝に正門をくぐる時も、門を向いて「ごきげんよう」朝の挨拶、帰りの挨拶、授業開始も終了の挨拶も「ごきげんよう」学院内でのすれ違うシスターや先生、先輩たちにも「ごきげんよう」登校、下校中、改札口でも「ごきげんよう」

要するに「ごきげんよう」はこの学院における全ての基底になるということ。

——円滑な人間関係は挨拶から始まる。

早いトコ、この挨拶にも慣れなきゃいけないなあ、とそんなことを考えながら、わたしは中庭を歩き回っている。

先ほどの鮮烈すぎるショックから立ち直るのに、どれだけの時間が掛かっただろう。しばらく意識を手放してしまっていた所為で憶えてなかった。

気がつくと周りに人が居なくなっていて、わたし一人だけが残されていた。おそらく時間に近づいたから始業式に向かったのだろう。

それが思った以上に校内は広いらしい。

来客用の大通りを通り抜けて、生徒用の歩道を歩くが一向に目的地が見えない。

わたしはと言うと、もうお約束のようなんだけど、

「…………迷うた」

方言で言っても結果は変わらない。ただ単純に迷った。

さっきまでの絶頂に、ぜんぶ吸い取られたんじゃないかっていうくらいに不幸のどん底。

——それにさっきのはわたしが望んだ幸福ってわけじゃないから！
ぞつと手を見る。ひよつとしてわたしは女心をくすぐるフェロモンでも出ているのだろうか。

それとも高校生になったからなんかすごい力に目覚めちゃったりしちやったりして！

無いよね、ナイナイ……。

そんな別の意味の自信などを沸き上がらせてみるが只の現実逃避でしかない。こんな状況でわたしは、くたりと脱力したまま中庭をひとりで彷徨い歩く。

胃の内容物ごと戻しそうな勢いで深息を漏らす。

こんな時に限って誰ともすれ違わない不思議、思い返せばそれはそうか、と。今は始業式にみんな移動しているんだから通りすがりが居るはずもない。

ハアア、と心底よりもさらに深い溜息がもう一度、わたしもどれだけ歩いたのか考えるのも止めちゃった。

花畑のある石畳の道を通って行くと、その右側に聖母像があった。道はまっすぐと聖母像の正面側へ行く二方向、わたしの来た道を入れたら三方向になるけどこの際は除外しておくとして。

立ち止まりふと、聖母像のその表情を見上げる。

慈愛を湛えた瞳、我が子を見つめる瞳はとても優しく穏やか。

その手に抱きしめた存在は、どれだけの幸せに包まれているのだろう。それだけの愛を受け入れる、受け止めることは苦痛ではないのだろうか。

だから、わたしにはまるで理解出来ない。

——どうしたら、こんな表情が出来るんだろう。

この世界はこんなにも醜く、苦痛に満ち溢れているのに、
こんな顔なんて作り物じゃないか。

人の造形は時折、真実を歪めるもの。だからこれは幻想。紛い物。価値の無い塵芥だ。

そう思うと、わたしの心の中で烈火のような正体不明の感情が沸いて出る。今、この像を壊してしまいたいという感情の積。それに気づいてしまうとわたしは不意に涙が溢れそうになって、走り去るように背中を向けて、

「――ぶっ」

みごとに転けた。

「痛ったああああ！」

振り返った瞬間、大きな壁にぶつかってそのまま地面にお尻を打ち付けることになった。

「イタタタ……なんで、また後ろに壁……？」

そもそも像の正面に壁なんて配置はあり得ない、それにさっきまでそんなモノは無かったはずだから突然かべが現れたってことになる。わたしはお尻と腰を擦りながら地面に座り込んでいると、自分の姿が急に影に包まれた。

「大丈夫、ですか」

わたしはゆっくりと目を開ける。それでようやく気がついた。壁の正体が長身の男性ということに。

ようするにわたしは後ろに人が来ていたのに気づきもしないで振り返って走り出したため、この人と接触してしまったということだ。

「大丈夫、ですか」

もう一度、穏やかな声が聞こえる。

痛みが優先して、他人のことに気遣う余裕の無かったわたしもようやくその声に気づくと、とへたりこんだままその人物の姿をゆっくりと見上げる。

「……………」

まず目に飛び込んできたのは風に靡く銀朱の髪。そしてわたしを射貫くように見つめる青色の瞳。ロシア系の繊細さを頌えた顔作りは美しく、そして凛々しい表情。ただ美しい顔に痛々しい瑕が頬から額にかけてはしっているのが唯一の欠点と言えるかもしれない。

「あっ」

「……………?」

「ごっごめんさい！　ぶつかってしまって」

「いえ、気にしていません。それよりも貴女に怪我などさせていなのが心配です」

黒い服装。スータンと風に揺れる白いストラを纏う青年。その姿から察するにこの人は神父ということなんだろうか。首から架けた金のロザリオが日の光に反射をして何度か輝く。

「えとえと……大丈夫ですっ、大丈夫」

今日だけでわたしは何度大丈夫を言ってるだろうか、カウントしたらきつとすごいことになるな、なんて場違いなことを考えながら目の前の長身の神父を見上げてそう言う。

「そうですか。なら良かった。入学したばかりの天使に怪我をさせてしまったと遭っては主に合わす顔がありませんからね」

優しく手を引かれて立ち上がる。ドキドキした。まるで映画の中のお姫様の気分だ。そしてわたしはノーマルだ、このタイミングなら主張出来る。

「私の名前はマキナ・ベルフラムと云います。よろしく、カワイイ子猫さん」

クラっとした。いい男にはなにをさせても良いというけれど、確かにそうなんだろう。これは狡い。

どことなく憂いを帯びた表情のままマキナ先生は口を笑みの形にして、そんな歯の浮くような台詞を言っただけだ。

「あふっあつ、あの、えと……」

「……？ 顔が赤い。熱ですか、これはいけない。折角の祝いの日が台無しになってしまう」

「ちちっ違いますっ、その……大丈夫なんですっ」

首を傾げる姿は子供みたいでキュンとする。噂には聞いていたけど予想以上の破壊力かも。

——あれえ、メグがエルシオン行くのって美形教諭目当てだったと思ってたよ。

倉子の言葉が脳裏を反芻する。そんな話をしたことを思い出し、

わたしはこれまでになくリンゴみたいに赤く染まる。

「よく分かりませんが、貴女が大丈夫というのならば信じましょう。だがけして無理はなさらないでください」

みんなから心配されてるね、わたし……。

「す、すみません……。マキナ先生」

「なんでしょうか、ええ……」

「あ。鹿島恵と言います」

「ではメグミくん」

「はい。それですね。実は教えてもらいたいことがあるんですが」

「なんでもどうぞ、迷える生徒を導くことも教師としての責務です。私がお答え出来ることであればなんでもお答えしましょう」

小さく手を広げて、受け入れるような仕草をするマキナ先生。なるほど生徒からも聖人君子だと褒め称えられているのもよく分かる気がする。

「そのですね……礼拝堂の場所ってどこ、なんでしょうか？」

「礼拝堂、ですか？　大聖堂ではなく？」

ダイセイドウ？　どこのことだろう、ちょっと意味分かんないですね。

「いいえ、礼拝堂なんですけど……」

「ふむ、礼拝堂ですか。そうですね、この道をまっすぐ行けば辿り着けますが」

「そうなんですか！ 良かった、じゃあ方向は合ってたんだー！」

渡された地図通りに進んでもまったく人の気配が無かったから間違っていたと思い込んでいたけどこの道に間違いなかったんだ。ようやくわたしもこの天性の方向音痴である才能ともおさらばする時が来たのかもしれない。

「ええ、礼拝堂には着きますが。本当にそちらでいいのでしょうか」

「はい！ いろいろご迷惑をお掛けしてすみませんでした、マキナ先生」

「いいえ、私がしたことなどありません。メグミくんが自分で道を見つけられたのだから」

そう言ってわたしを見つめ目を細めて相好を崩すマキナ先生。本当に格好良い……そこらの男性なんかとは別次元にある美人さん。思わずうっとり見つめてしまいつつ、首を振って正気を取り戻す。

「それじゃ……わたし、そろそろ行きますね」

「はい、それでは貴女に神のご加護がありますように」

そう言つて一度目を閉じてわたしに祈りを捧げる。
本当になにをさせても様になるから困る。

「ごきげんよう、恵くん」

「はい、ごきげんよう、マキナ先生」

小さく手を振る長身の青年に何度か振り返りながら大きく手を振って別れを告げた。

／

あの強烈かつ鮮烈だった先輩の洗礼、それと美人神父の優しい語らいから、少し時間が経っていた。

メシア像を真っ直ぐ向かったその先に、確かに礼拝堂があった。

腕に付けた時計を見やり、まだ幾分か時間があるのを確認するとホッと深い息をついた。

——奇跡的。

ふと正面を見るとそこに礼拝堂を見つける。

「あつたっ」

奇跡的。

自分の足で礼拝堂にたどり着くことが出来るなんて夢にも思わな

かったから正直、驚いた。

もしかして、わたしの方向音痴も矯正されてきたのか！　なんてあり得ないようなことを考えながら走って礼拝堂に近づく。

遠くから見ていたらそれほど大きく感じなかったが、近くから見ると大きな礼拝堂。

様々な装飾が壁面を彩り、その頂点に大きなロザリオが添え付けられている。

自分の足で礼拝堂に辿り着くことが出来るなんて思わなかったから正直驚いてしまってる。兎に角、急いで中に入ろう。いろんなことがありすぎて少しでも早く安心したいと考えて、ふとその教会の全景を見上げる。

遠くから見ていたら、それほど大きいと感じなかったけど、近くから見るとそれなりに大きな礼拝堂。

様々な装飾が壁面を彩り、華美に着飾っている。外側から神を感じさせるような、神の住まうような仰々しさを感じさせるような様相になっていて、その頂点には大きなロザリオが添え付けられていた。

如何にも神の住まう家だという豪華な礼拝堂に、心臓を圧迫されているような錯覚を受ける。

「ヤバいなあ、時間的にもうすぐ始まっちゃうよ」

始業式が始まる直前だったのは幸いかもしれない、もしこれが始まったあと入っていくときっと注目の的になってしまうだろう。

ある意味、ギリギリで救われた体だけ……。

わたしの背丈より大きなドアに手をかけてから気がついた。

「？　——人の気配がない……？」

どうということだろう。

本来なら新入生一同が居るであろう礼拝堂。そこにまるで人の気配がないのだ。

どこことなく違和感のようなものを感じたが、気にしてても仕方がない。わたしは重い扉を握りしめると力を込めて思い切り開いた。

重鈍に開かれる扉、長い間開かれていないように建付が擦れて鈍い音が響き渡る。

閉じられた封が開かれることで内側の暗闇を光条が貫いた。

そこには古ぼけた骨董品のような懺悔の間。

そしてわたしの違和感どおり、中には人ひとりいない。

開け放たれたことで密閉されていた空気が中に飛び込んでいく。

目に映るのはステンドグラス、様々な意匠を施されたきらびやかな硝子片の集合体。それら一つ一つが一定の形をなして一つの芸術へと昇華されている。

円形に象られたその模様は昔、本などで見たことがある有名な形状だったはず。

その着色硝子の光を受けてメシア像が神々しい姿を見せる。

生け贄となった聖人、救世主。――彼が命を落とそうともその遺志は時代を越えても形を残す。

そして――その下まで視線を下ろしてようやく、

その人影に気がついた。

少女だ。

ひざまずき、なにかに祈るように頭をたれている少女。

ステンドグラスの反射を受け、腰まで延びた長い金髪がきらびやかに映える。

少女はゆっくりと立ち上がるとわたしのほうに振り返った。

わたしの美的感覚が悲鳴をあげた。

美しいという形容では当てはめられない。

美しいことは当然だというような姿。美しいという言葉すらあまりに陳腐。どんな言葉で形容しようとも凡百の言葉では伝えきれない。

精巧な人形と見紛う美しさ。肌は白磁のように白く透き通り、頬はほんのりと色づく薔薇色。唇はまだ初々しい莓実のような瑞々しさ持っていて。顎と鼻筋はあくまで華奢で制服からすらりと伸びた手足には傷ひとつ見あたらない。

どこことなく幼い顔立ちだが、その生まれついた品性は完成されると言っている。

扉を開いた時に舞い上がった埃がゆっくりと舞い降り、ステンドグラスの日差しを浴びて、幻想的な光の粒子シャワーのように少女を飾り付ける。

——すべてが精巧に作られた神の造型。
神に寵愛されし産物。

声を掛けることすら忘れてしまったわたしを見て深緑の瞳が鋭く吊り上がった。それはこの静謐とした空気を打ち破った、不埒な侵入者に抗議するように細められている。

言うまでもなくその対象はわたしのことだ。
人を殺しかねないほど鋭く冷たい視線にわたしは背筋を凍らせる。だが次の時、その瞳がゆっくりと時間をかけて柔らかさを取り戻していくとそのままその艶めいた唇も笑みの形を型どる。

「ごきげんよう、この礼拝堂チャペルにどのようなご用件ですか？」

おだやかで清楚な声音。それでいて芯の強さを表すようなはっきりとした声でわたしに向かってそう告げた。

「えっと……その、道に迷ってしまって。たしかここで入学式をしているんじゃないんですか？」

神々しい少女はふいに俗めいた仕草で頬に人差し指を当てると宙を仰ぎ見る。

「入学式？　なら大聖堂のほうで行われてるのではないのでしょうか」

「えっ！？　ここじゃないんですか？」

わたしは思わずガクリっ、と肩を落として深い溜息をつく。

「ここは旧館に当たりますので、一般には公開されていません。ですので新館のほうへ行っていただけです？」

「うう、すみません。ご迷惑をおかけしま——っツ……」

突如、軽い痛みがこめかみに走り抜けて、思わず顔をしかめて頭を抑える。

「大丈夫ですか？　なにか——」

少女に礼を言おうとし、半歩ほど礼拝堂に足を踏み入れた瞬間、鈍痛が通り抜けた。

「い、いえっ、なんでもないなんでもないですっ、大丈夫！」

駆け寄った彼女、近づくに余計にその美しさが際だつ。俗世の汚れすべてを拒絶するように新雪のような肌、艶やかな金髪が風に揺れ、絹と紛ってしまいうくらいに見惚れてしまう。

目の前まで来ると、背丈だけはわたしより低いことに気がついた。わたしより頭ひとつ背が低い。　わたしだって背が高いわけじゃ

ないから余計だろう。

彼女はわたしの顔をのぞき込むように心配な視線を向け、

「本当に大丈夫ですか？」

潤んだ瞳、その線の細い体つきは抱きしめたら折れてしまうんじゃないかと思うほど。

少女は口元で手を添えて一考するような仕草をするとわたしに向き直る。

「もしかして———なにか感じ取ったんじゃないですか？」

わたしの心底まで見通そうとするような深い眼差し。

これはわたしが半端な魔女の血を受け継いでいる故の遺伝病みたいなもので。小さなころから魔力に異常がある場所、魔力の波動が異質な場所に踏み込んでしまうと偏頭痛に見舞われるというもの。

初めは正直、遺伝を恨んだこともあったけど、実際そんな場所には滅多に遭遇することはない。

——平凡な生活をしているなら尚のこと。

だからさっきの頭痛は久しぶりの症状、なのでびっくりした程度。

「感じ取ったって……変なことを聞くんですね———ええと」

「くすっ、杏里ゆうきです。悠木あんり、あなたと同じ一年です」

「悠生さん。わたしは鹿島 恵です」

楚々とした仕草の挨拶、にっこりと微笑んだ少女が次の発した言葉は意外なものだった。

「鹿島さんは魔女なんですか？」

——え？

「い、いまなんて……？」

「ですから鹿島さんって魔女なんでしょうか？　だって魔女じゃないきゃ、さっきみたいな感応はあり得ないでしょう」

え？　え？　え？

「つまり、その……」

もしかして……

「悠生さん、も……もしかして」

「くすつ、ええ——私も魔女なんですよ」

「——ええええええ！？」

流石に動揺を隠せない。たった一日で魔女にふたりも遭遇するなんて……ふつうはあり得ない。

「どうして驚かれるの？　なにか驚くようなこと言ってしまったかしら」

「だ、だってわたしさっきも、魔女の……」

「ああ、聖徒会の人たちですね。もしかして鹿島さん、知らないの

ですか？」

「なにをですか……？」

「ここは魔術協会アカデミーの進学校のひとつでもあるんです、表向きには非公開ですけど」

「え？ あ、え？」

「ですから比較的魔法使いに遭遇する傾向が強いです。母体としては少ないですけど」

「じゃあ魔法学科とかあるんですか……？」

「くすくすっ、それはありません。あくまで魔法は秘匿されるべき秘奥の一つです。協会規律にも『市街地での魔法の行使は禁ずる』と記載されています。ですからここで魔法を教えるようなことはありませんよ」

まさかそんな秘密がこの学校にあったなんて初めて知った。だからお父さんはこの学校に入学するのを喜んでいたのか……。

「基礎学を学びたいなら、ここの図書館の秘匿室を借りるといいです。司書さんは高位の魔法律師ですから」

「魔法律師の人までいるんだ……驚いたなあ」

「私の知り合いにひとり。普段は英語教師をしていますね」

魔法律師とは魔法を使えないけれど魔法を使える生徒を導く先生

のこと。初めから使えない人だけではなくある日、突然、魔法を使えなくなったような人が付く職なんだけど。

「それで——鹿島さんは魔女なんでしょう？」

睫毛の長い瞳を丸めて悠生さんが顔を傾げる。その視線にはわたしに対する好奇の念が覗いていた。

「ええと……わたしは魔女じゃないかな。遺失者（無くして）るから——」

血流こそが魔法の根幹である。故にわたし達魔法使いは『原初の血』へ立ち戻ろうと足掻く。方法は無数にあれど道徳として正しいものは多くない。

故に魔法使いは人に非ずと知る者に誹られるのだ。

わたしの家系はそれに堪えきれなかった。今の時代に逆行するような生き方を否定した。だからこそ10代ほど連なってきた血筋を捨てたのだった。

それがわたしの祖父の代。

お爺ちゃんの代でゴタゴタしたみたいだけどわたしが産まれるくらいにはどこにでもある一般家庭になっていた。

「そう、ですか。じゃあ今はもう魔女ではないんですね」

「うん。けど悲しいとか別に無いけどね。わたしが物心ついた頃にはそんな話カケラほども無かったから」

「じゃあ私と同じなんですね」

「え？　でも魔女だってさっき……」

くるり、と踊るように半回転すると髪を揺らしてそう言った。その表情は背中越しからは伺えない。

「本当に魔女だったら良かったかと思います。けど違うんですね」
背中を向けたままそういう彼女は、どことなく寂しそうで。わたしはその言葉の真意を覗うことはできない。

「魔女じゃないけどきつとそこには意味があるんだって私、思ってるんです。命を与えられたからには為すべき意味が」

「為すべき、意味って……？」

「――さあ、どうでしょう。それを探すために生きてるのかもしれないですね」

振り返って花のように笑うとそう言った。
その笑顔と言葉にわたしの感性が萎れる。

――あべこべだ。

生きるための意味を探すために生きるだなんて繕いようもない詭弁。

そんな人間は最後まで答えを獲ずに死んでいく。

その間違いを正さない限り生地獄に沈み続けるだけだ。

私の笑顔は張り付いたように作りものになる。

だからこそ苦しいんだ、と。

眩暈にも似た幻視。

思い出したくない絵図が脳裏から眼球に侵食してきて、慌てて頭を振って振り払う。

「大丈夫ですか、鹿島さん」

「えへ？ あうん、大丈夫っ」

余計な念がわたしをいらぬ幻想へと誘う。

悠木さんが心配そうにわたしを見つめているのに気がつくと思顔を結んで答えた。

その様子を見て、安心したのか周囲を四望してまたわたしに向き直る。

「ねえ、鹿島さん。それであなたがなにかを感知したようですけどその正体わかりませんか？」

「うーん、痛かったのは瞬間的だし、後はこれと言って違和感らしいものは見あたらないけど」

「本当に？ ——見当たらないんじゃないって『見過ごしてるだけ』じゃないですか」

それはどういうことだろう？ どこを見渡しても怪しい部分なんてどこにもない。

きちんと並べられた長椅子、入り口に立つわたしからまっすぐに伸びたビロードの赤絨毯。貼り付けられたメシア像。

その上部を照らすように煌めくステンドグラス群。

——と。——。

「——なにも、ないと思うけど……」

「——」。——。

あれ？ 一瞬だけ、彼女の顔が苛立の色を帯びた気がした。ほんの僅かな揺らめきでしかないがなぜかそう感じてしまったのだ。

「本当になにもありません？ 見てないだけではなくて」

「なにもないよーっ、別に普通の場所だと思うし」

自信はない、自分の感じ取り方が少しだけいつもと違う『不快感』を覚えている。どこかがおかしいと感じている気もするが心の表層がそれを否定している矛盾……。

「……やっぱり、結界」

「ん？ 結界ってあのマンガとかで攻撃を跳ね返すために作ったりするアレ？」

彼女の口から零れ出た聞き慣れない単語を聞き返す。

「あれは結界というより、障壁の類です。結界とは正しく『領域と領域を区切る境界線』のことを指すものですから。元々は教団の機密、戒律を犯さないように制限するために用いられたのが結界なんです」

出会った時のように再び悠木さんが座り込むと地面をゆっくりとなぞる。

「ひと気が無い割には埃の質が新鮮、絨毯の上の土も若々しい」

淡々となにかを探るような口調。先ほどまでの花が咲くような口

調はまるで無い。チロ、と赤い舌を出して新雪のような白い指先を舐めると地面を再びなぞっていく。

「……？　つまりどういうこと？」

「礼拝堂は元々、エリシオンがまだ学校施設ではなかったころの名残です。ここは巨大な魔法施設でした」

「え？　そうなんだ」

仰々しい外壁に人を拒むような隔絶された空気感はその所為だろうか。そう聞くとなんとなく納得がいくような気がする。

「だからかー。ここに結界が張られてる理由は」

「いえ、それは違います。封鎖されて18年経っていますけどその間に結界が張られたという話は訊いていませんし、私の知る限りではそんな真似をする理由也没有です」

「18年より前とか」

「それはもつと有りえません」

「どうして？」

「……………。この結界の若さ、張りから鑑みるにここ数ヶ月の間に用意されたものだと思います」

沈黙の後、まるで話を切り替えるように会話を移行させられる。少しだけ気にはなったけど話したくもないことを詮索するのも無粋だろうと思う。

「じゃあ数ヶ月前にこんな場所に誰かが結界を敷いた、と。でもどうしてだろ、ここってとっくの昔に封鎖されていた場所なんだよね、結界を敷く意味がないような……」

「最前説明しましたけど結界とは『領域調和の法』仏教には摂僧界、摂衣界、摂食界という結界の理が3つ存在します。この結界は許容の法——結界は秩序の維持機構の役割なんです」

すこし話が難しくなってきた……。

「結界を張っている理由としては、なんらかのルール付けを施したいからってことかな」

「卓見です。結界とは境界。砕いた言い方で捉えるなら『ルール付け』をするためのものです。神道で言えば一定範囲の空間に設定された禁則を視覚化したものと触れていますので——鹿島さんの認識で間違いはありません」

「仰々しいんだね、結界とか」

わたしが困ったような顔をしながら、そう呟くと悠生さんはきょとんと、可愛らしい目元をくりんと動かし、

「そうでもありませんよ。日本人は特に結界の造詣に深い土地柄じゃないですか」

当然のことのように言っただけだ。

「——そんなことないよお、結界だらけだったらとんでもないこ

とになるじゃない」

「結界と言っても大小豊かです。襖、障子、暖簾なんかも空間を仕切るという意味合いを持った結界なんですから」

「そんなのも結界なんて言い出したら、世の中って結界だらけになるけど」

「境界線を分けているのが結界ですからそれでおかしく無いと思います。——ただ、ここの結界は少し歪つです」

乖離し始めた話の筋が舞い戻る。

「歪つってどういうこと？」

「設定された禁則がまるで見えないからです」

「わたしには分からないけど、どういう設定にされてるの？」

「それは結界を巡らせた当人しか分かりません。ですので私の知るところではありませんけれど。普通なら他者にも理解しえる程度の禁則に設定されるはずなのに……ここはおかしい」

そういつて辺りを順繰りに見渡していく悠生さん。左右を見渡し地面にもう一度膝を付くと入念に指先で調べていく。

「わからない、なにもルール付けされていないような気がするのに、この違和感はなんなのかしら」

そう言われると、どこかここはおかしい。

ドアを開いているのに空気の出入りする様子がない、澱んでいる空気。袋の中に閉じこめられたように、まるで密閉されているような感覚。春先だということになぜか少しだけ暑さを感じているように思える。

違和感があると、言われなければ見逃してしまうような些細な感触。真綿を握りしめるような頼りない手触りが余計にこの空間の異様さを増大させている。

不意に彼女が真上を見上げて止まった。

なんだろうと、わたしもそれに釣られ見上げてみる。

——。と——。

「なにか見えます、鹿島さん」

「なにも見えないかも」

そういうと、彼女はふう、と一つ溜息をついて視線を戻すと乱れた髪を整えるように手で撫でる。

「それが『解』、ということでしょうね」

「ああ——そうね。うん」

「大体の察しが付きましたね」

わたしの言葉を聞くと顎に手を当て腕組みをしたまま納得したように頷くと先ほどまでのエンジェルスマイルを浮かべる。

「え？　なにかわかったの？」

「鹿島さんが居てくれたおかげですね。一人なら誤認ということで見逃してしまいそうですけれど、二人同時に誤認をする可能性は限りなく低いでしょうし——ようするに——」

「——誰かそこにいるのですか」

わたしが開けはなっただままの扉から延びる影、その根本を手繰るように視線を滑らせると、そこに一人の男が立っていた。

（チツ……予想より早い……）

そんな声が風に乗って聞こえたような気がして振り返ると、悠生さんがにこにここと天使の笑みを浮かべている。

——気のせい、かな。

「ごきげんよう、シャザール先生」

「ごきげんよう、悠生杏里くん」

細身の長身、いや細身というのには細すぎる。聖衣を纏っているためその体つきまでは伺えないが、あのやせ細った指先、脂肪をまるで感じさせない不健康な首筋、そしてギョロリと剥かれた病的な目元。癖のあるソバージュの黒髪がその目元を隠すようにして、この男の病的資質を覆い隠している気がする。

「君ももう高校生か、早いものだな。転入して……」

「三ヶ月ほど」

「そうそう、三ヶ月だ。転校してきたと思ったらいきなり学院トップの成績。あつと言う間にその名前を広めた有名人」

「俗悪な風聞です。噂とは偏見と先入観で誇張されてしまうものですから」

「君の場合はそうではないのは知っているよ。中等部の教諭に聞いているからね。——そのまま君は魔術連盟に席を入れると聞いたのだがどういう心変わりだね？」

「まだまだ若輩者故、至らぬ部分が多々あります。先に見聞を広めてから自分とはどういう存在なのかということをしっかり把握した後に連盟のお世話になろうかというのが私の考えです」

はつきりと、なんの迷いもなく自分の考えを述べる悠生さん。

——本当に完璧人間だ。

成績優秀で容姿端麗、性格もよくて誰にでも分け隔て無く慈愛を差し向ける少女。

天使はここにいた。神に遣わされた天使は地上の穢れなど物とせず、清浄の姿でわたし達の前にいた。

ふと彼女がわたしをみると可愛らしく小首を傾げて笑顔を向けてくれた。

マジ天使。

「連盟は君をはやく欲しがっているだろうがね。仕方がないだろう。——それはそうと君たちはここにいていいのかね？　もう入学式が始まる時間だが……」

シャザール先生がちらりと腕時計を見つつ、そう言ってくる。

わたしも手首にしている時計を見る。時刻は「8…50」分……あと10分くらいしかない……！

「ほ、ほんとだ！　えっと、急がないと」

「少しでも寄り道が過ぎだそうですね、急いだほうがいいかもしれません」

わたしがアタフタとしているのに悠生さんはまるで焦っていない、ゆったりとした仕草で時計を見つめると「困ったわねえ」と頬に手を当てて考え込む。

——もしかしたら意外と場所は近いのかな？

「全力で走ればきつと間に合いますよね」

えええええ……ということは結構な距離があるってことなのか……

「——君は……」

「はい？ ああ、わたしは鹿島恵と申します。ごきげんよう、シャザール先生」

ふたりの会話の次元に取り残されて、すっかり挨拶を忘れてしまっていた。けどそれは先生のほうも同じだしおあいこだよね？

「——ふむ、鹿島くん。君はとても『イイモノ』を持っているようだね。その才、大切にしまえ」

「イイモノですか……？」

生まれて初めてそんな言葉を言われたかもしれない。わたしはなににおいても平均、平凡を地でいく人間だ。

そんな聞き慣れない言葉を聞いてしまえば興味を持ってしまうのは当然のことだと思う。

シャザール先生は、老躯のような枝木のような指先を自身の胸元

を当てる。

「うむ、君という気質。生まれながらにして持ちあわせている才能というヤツだ」

「運動が得意とか、勉強が得意とかそういうのとは違う感じですか？」

「勉強、運動などは研鑽の積み重ねでどうとでもなる。才による優劣など容易に覆せるものだ」

枯枝のような指先が自身の心臓を鷲掴みにするように聖衣を握り締める。

「誰であろうと運動勉強なら一番になれるってことですか？」

「それは暴論だ。個性による伸び代はあれど修練することで多少は補うことが出来るという話だよ、鹿島くん。外部とはそういうもので出来ているものだ——」

そうだろうか、わたしみたいになにをやってもダメな人間はある。誰かが焙れるシステムは間違いなくこの世界に存在しているのだ。だからこそシャザール先生の言葉は鵜呑みにはできない。

「だが内側は違う。人の内側には器がある、人として逸脱できぬ確固とした器があるのだよ。それは形を変えることはない——生まれ落ちた瞬間にその形状は決められている」

「心の器……？」

「左様。君の場合ね、それがとても綺麗だ」

わたしの瞳をのぞき込む、ギョロリとした瞳。正直、気持ち悪くて肌が総毛立った。

「き、綺麗……なんですか？」

「ああ、とても。君の心の器は歪んでいる。それは君が生まれながらに持ち合わせている才と言ってもいい」

なんだかよく分からない。けれど首筋あたりが熱さを訴える。

よく分からないというのに——それはとても危険なことだと思った。

わたしはへらっ、と間抜けな愛想笑いを浮かながら、先生の一礼をして感謝の言葉を述べようとすると——

「——ありがとうございますわ、シャザール先生」

わたしの言葉を遮るように、わたしと先生の間には身体を割入る悠生さん。まるでわたしを庇うように先生に立ちはだかったような構図で、なんとも不思議な気分。

そっと細い指先がわたしの指に絡む。

思わずドキリとしてしまった、指先の感触はとても柔らかく、繊細でささくれ一つ見当たらない。わたしの指とはまるで別物みたい。

「そろそろ時間ですのでわたくし達はこの辺で——ごきげんよう」

急にせわしない様子でここを立ち去ろうとする悠生さん。表面上にはなにも焦りが浮かんでいないけれどどこことなくこの空間から早く脱したいという欲求のようなものを感じる。

——もしかしてわたしのため、だと考えるのは自意識過剰なんだ

ろうか？

シャザール先生の横をくぐるように通り抜けると外に出ていく悠生さん。もちろん手を引かれているわたしも引っ張られるように外へと出ていく。

不明瞭に粘着く感情が尾をひいてわたしは後ろに振り返ってしまう。

シャザール先生に動きはない。ただ1つ微動もせずはこちらを見ている。

「ごきげんよう」

——救世主の十字に刻まれた光を浴びるその姿、

「——心のどこかに迷いがあるのなら、ここへいらっしやい。神の家は迷えるものを拒みません。敬虔心こそ真理の柱」

——その内側には濃闇を湛えている。

ふと、闇が微笑んだ。

——あなたの、心に巢食う闇を救ってあげよう、鹿島恵くん。

心の空虚に流れ込むような圧倒的な言葉。

耳ではなく魂で感じ取った救済のコエ。

悠木さんに手を引かれ去りゆく中でわたしの脳髓に刻みつけられる。

熟柿のようにドロドロで甘ったるい言葉は、暫くわたしの頭の中^{リクエスト}で反響し続けた。

境界線の少女たち（後書き）

いっものながら誤字脱字などありましたら（ry

尚、小説内に登場する設定や団体などは飽くまで私の創作です。

私一個人の考えの元に創作されていますので留意いただけると助かります。

聖堂の銀盤

めでたし せいちょう 聖寵 おんみ みちみちてるマリア
主 しゅ 御身と共にまします。

御身は乙女のうちにて祝せられ

御胎内の御子 おんこ イエスズも祝せられたもう

天主の てんしゅ 御母聖マリア おんはは

罪人なる我らの為に つみびと

今も臨終の時も祈り給え

アーメン

天使祝詞が終わるのが入学式終了合図のように、天使たちは各々の場所へと帰っていく。

大聖堂に響きわたるパイプオルガンの音色。力強く儚く耳を打つ。旋律は聖堂中に反響し、より深く広いメロディへと変化していく。

神の家、神の住まう庭、

光射す聖堂、荘厳な音楽、

それを奏でる神々しい銀色乙女。

「イテ・ミサ・エストですね」

さっきまで別の場所にいたはずの悠生さんがわたしの横にいた。表情には出さないがどこことなく不機嫌そうな声音で壇上の上で銀

盤を奏でる少女を見ている。

「『行け、典礼は終わった』って意味だったっけ？」

「典礼にも規律があります。向こうで話したように典礼という結果が敷かれるということです。その規律の一つ、『司祭の赦し無く、典礼を退出すること赦さず』」

人差し指をふりふり、と揺らしながらそういう悠生さん。

「ようするに結界の効果が破れちゃうからってことだよ」

「はい、けれど典礼にはなんの強制力はありません。本当に規律としての結界だけなのでなんの現象も起こり得ませんけど」

少女達が次々と出ていく中、銀色少女の歌声は高く響きわたる。

どこか物悲しく、冷たいような歌声は胸を鷲掴みにされるような錯覚を覚える。

それは遠い日々の憧憬——忘れようとしている傷を抉り出される、残酷な聖唱。

「——彼女は、織ヶ碕灯子。中等部では私が来るまでずっと学年一位を防衛し続けていた才女です」

織ヶ碕……どこかで耳にしたことがあるような……思い出せない、思い出せない程度のことなら大したことじゃないんだろう。

周りを見ても彼女の演奏を聞いている者など誰一人としていない、彼女たちにとってこの旋律はただ儀式の終わりを告げるという記号程度でしかないのだろう。

それでも彼女は静かに、淡々と——詩と演奏を続ける。

誰にも届かぬ理想郷は続く。

たった一人、

誰ひとりとしていない彼岸で唱い続ける少女。

昼下がりの陽光に照らされ、ふわふわと柔らかそうな銀髪が揺れる。制服より延びた指先は不健康なほどに白い。柄もいわれぬ不安感、目を離してしまおうと溶けて消えてしまおうのではないかというほど、儚げな容姿。

悠生さんのそれとはまた違う『危うい美貌』

命の灯火が消えようとする瞬間、その美しさを増すように。その儚さは内包された時間のみで浪費されていく。

無色だ。わたしにはこの少女の姿が透明色に見えた。

触れることも、はばかれるガラスの乙女。

——織ヶ碕灯子。

わたしがそんな思いに囚われているうちに銀盤を弾く指先が終止符を放った。

——典礼の終了。

賛美曲弾き終えると、その銀のシルエットが立ち上がる。

銀色のまばゆい髪を揺らめかせながらこちらを向くと目を細め凍りつくような視線を向けた。

ひりつくような眼光。

色素の乏しい金色の瞳がわたし達を捉えていた。

壇上の上、目を閉じると今一度わたし達を見据える。

「——ごきげんよう。私の唄を聞いてくださる人が居たなんて驚きです」

そう一言述べるとわたし達に頭を垂れた。

黒の修道衣に身を包んだ少女。今まで普通の女の子ばかりで学院がそういう場所であると正しく認識出来なかったけど、そのブレが

矯正された気がする。

修道衣の少女はどこか神々しくて、わたしは思わず目を背けたくなった。

灯子さんという少女は風を起こさぬような歩みで壇上の階段を下り、わたし達の元へやってくる。

悠木さんが一歩踏み込んで、一つ頭を下げた。

「――ごきげんよう、灯子さん。お加減は如何？」

「御陰様で息災も無く過ごしていますよ、杏里さん」

何気ない挨拶のように思えた。

「先ほどの典礼曲、とても素晴らしいものでしたわ。よほど研鑽を重ねられたのでしょうか。胸を打たれました」

「お耳汚しばかりで恥ずかしいかぎりです。私が杏里さんに勝るものと言ったらこれくらいしかありませんので」

笑顔の悠木さん、そして繕わぬ鉄面皮である灯子さん。

表情を顕にする悠木さんに対して灯子さんは人形のように表情が動かない。

「ご謙遜を。あれだけのモノを持っていて卑下なさるなんて罰当たりじゃありませんこと？　もう少し誇っていただかないと嫌味に聞こえます」

「まだまだ一芸に秀でると言えるようなレベルでは無いので、否定をしているだけです。誇るのですしたら右に及ぶものがいなくなった時にでもそうさせてもらいましょう」

目を閉じたまま灯子さんが淡々と述べる。

不思議なことにそれは目の前の相手を直視したくないという拒絶の色を帯びているように見えた。

「それよりもいつもなら私の姿を見るなりそそくさと居なくなる杏里さんがどういった風の吹き回しでしょうか」

「あら、逃げてるようにお思いだったのですか？ それはお目出度い頭の持ち主ですね。脳髓引っこ抜いて軽いおつむに味噌でも突っ込んでもらってはいかがでしょうか」

「結構です。それよりご自分の頭を調べてもらってはいかがですか？ その浅慮な脳幹に電極突き刺して、捻れ切った性根を正してもらうことをオススメします」

ん？　なんだ……この不穏な空気は……。

けれどわたしの中でどちらも同様の色を帯びていると感じている。笑顔の裏に張り付いた確執、奪われたものと奪ったものなら当然かもしれないけれど、それだけではすまない、この殺気はなんなんだろう。

兎も角、間にいるわたしの配慮もしてほしいところだ。

私はいま冷戦中の国家間の爆心地にいる気分だ。

衛生兵はどこですかーっ？

心のなかで困惑を重ねている内に、銀髪的美少女がわたしのほうに視線を向けた。

「お初にお目にかかりますね、私は織ヶ碕灯子と申します」

「ど、どうも初めまして。わたしは鹿島恵って言いますっ」

一度、灯子さんは視線を落としてわたしのリボンを見つめる。そして視線を戻すと優雅に首を傾げた。

「では恵さん」

「――は、はい……」

涼やか声色で名前を唱えられると、なんだか神経がムズムズする。要するに身体がまた緊張状態になっているという証拠。厭な発汗で肌がじっとりとする。

そんな葛藤を知る由も無い灯子さんは、ゆるりと頭を下げる。ステンドグラスより降り注ぐ七色の日差しを浴びて、白銀にも似たふわふわの髪はまるで天使の輪が差しているように見えた。

「――これからよろしくお願いしますね。仲良く致しましょう」

同級生となるわたしを歓迎するような挨拶をしてくれる。こういう学校ってどちらかというと閉鎖的で新参者を排除する傾向がある。それは内側で完成した文化が異端を受け入れることで破綻するのを防ぐ装置なんだけど……わたしが今、話している限りではそんな偏見を振りかざす人はいない。これは正直、すごいことだって思う。

「……？　どうか致しましたか？」

「あ、ううん。ここの人たちって物怖じしないっていうか、みんな新規の人間に優しいなって思ってる」

「神の前では誰もが平等だからです。なにかを学び、切磋琢磨する人間に上下は付けられません」

透けるように白い両の指先を絡めて祈るようにする灯子さん。いや、祈るようにはなく本当に祈っているんだ、神様に。

「誰かを貶めることで自分の格が上がったと錯覚してしまうのはさもしいことです、故に私たちはそうならぬように努めなくてはなりません」

「は、はい……」

ヤバイ……本当に天使みたいだ。

自分はなにも悪いことなんてしていないけれど、なんだか悪いことをしている気分になる。

一瞬だけ、後ろのステンドグラスに描かれた聖母の姿と重なって眩暈がした。

「ですから、恵さんも遠慮なさらず私達に接してください。変に氣を使われてしまうとこちらが萎縮してしまいますから」

「そう、ですね。頭に入れますっ」

鈴の音色のような声音にわたしの心は解されていく。確かに壁を作っちゃうとまずいかもしれない。

わたしは息を吸い込んで一つ納得するように頷いた。

「よろしくお願いします、灯子さん」

わたしの言葉にゆっくりと頷いてくれると可愛らしく首を傾けた。

「さて、頃合いですから行きましょうか。恵さん」

会話を強引に断絶させるかのように、強めの声音で杏里さんがわたしにそう話しかけてきた。

「え、あ……うん」

これといって断る理由もなかったので曖昧ながら一つ、頷いて、

「それじゃすみません、灯子さん。挨拶もそこそこですけどわたしたちはこれで失礼しますね」

「いえ、構いません。私があなたがたを呼び止めてしまった体でしたから……」

笑顔を崩さずそう優しく言うてくれる。艶やかな銀髪が開かれた扉から吹き抜ける風でふわふわと揺れ動く。

そつといたずら風が彼女の香りを運んできた。

少女の香りは悠木さんのように華やかなものではなく、とても素朴な香り。

そうだ、この古ぼけた教会の匂いに酷似していた。

悠木さんの小さな手がわたしの手を引いていく。なんとなく後ろ髪引かれる思いがあって灯子さんのほうを振り向く。彼女はわたしの姿をじい、と見つめ、

「またどこかでお会いすることもあると思いますけどそのときはよろしく願いますね」

杏里さんと同質の天使の微笑み、きつとだれもを骨抜きにしてしまっただろう。

杏里さんと違うところはとても儚げで笑みを浮かべたまま消えて

しまいそうな印象を受けることだ。

——幽霊みたい。

それがわたしの織ヶ碕灯子への印象だった。

「ごきげんよう」

挨拶。優しく、残酷な響きは三人しかいなかった大聖堂にりんと反響した。

／

「——彼女の服が違うのは、典礼の正装だったからですね」

「けどわたしたちってふつうの制服じゃない、なんで灯子さんだけ修道服だったの？」

始業式が終わり、わたしたちは自分達の教室へと向かう。

大聖堂を出て、高等部の校舎のほうへと歩いていた。

話題は先ほどの儂げな少女の話。なんとなく気になってしまったから杏里さんに訪ねてみたわけ。

「それだけ敬虔なクリスチャンだからです。既に彼女は卒業と共にシトー修道会に行くことが決まっていますから」

「えっ、シトーってたしか。ものすごく厳しいって……」

「厳しいなんてものじゃ。外部との交流を完全に遮断している人たちの集団ですし」

「確か笑ったり喋ったりするのも禁止だとか……わたし死んじやいそうだよ、そんなの」

「昔ほど封建的制度は廃止されてきていますが、あそこだけは別ですからね。そういう生き方を選んだ人間が門を叩く場所です」

九世紀以降から急速に修道会の貴族化が始まったらしい。そんな修道会が富裕化していく時代、それに異議を唱える改革運動があった。

それが十世紀。――元々、女修道会の多くは王族、貴族によって設立されたという背景が多いせいもあってか、権力が集約されるのは当然の成り行きだった時代の話だ。

「お金持ちが宗教を傘に暮らしていたりしてた時代があったんです。修道院は貴族の駆け込み寺のようなもので、避難所として機能してたんです」

「そんな制度に反発したのがシトー修道会だったわけ？」

「クリュニーを中心とした色々な修道院です。それで設立されたのがシトー、そしてプレモントレ修道会です。初期修道院の規律を重んじる聖女主義というんでしょうか」

「聖女主義？」

「ああ、これは私が勝手にそう言ってるだけですけれど……清貧、貞潔、服従、きびしい禁欲。日々の祈りと学習によって魂を完徳に導く閉ざされた聖女の園」

『閉じこめ』られることで、危険と誘惑を『隔離』た静謐の世界――。

「――繭に包み全てを遮断することで、人工的に聖女を生産するための花園――それがシト―修道院です」

外界の欲を切り捨てて、祈りと労働だけを積み重ねていく日々。
――遡行し、暗唱し、研鑽し、恭順し、

――少女たちは彼岸で祈り続ける。

それを厭世とは言わない。少女達は此岸のことなどに興味はない。暗闇にひっそりと咲く花の名をわたしは知らない。

「……………すごいんだね、灯子さんって」

「すごいですね。ある意味、化け物って言っていいくらい」

歩きながら、深いため息「でも」という言葉を置いて

「――私は嫌いですね」

はつきりと、

何者をも拒まず、受け入れる少女がそう言った。

なんとなく、それに驚いてわたしはふと立ち止まってしまった。

理由を聞いたそうと、小走りに杏里さんの歩調似合わせるように小走りになるとズキッと膝に小さな痛みが走った。

「イタタッ」

「……？ どうしたんですか、恵さん」

「んんと……あちゃあ、膝擦りむいちゃってるみたい」

スカートをめくり上げると膝に小さな擦りむき傷がある。

たぶんマキナ先生と衝突した時、転けたからそのときに付いた傷だと思う。

傷口を指で触れるとだいぶ乾いてきてるのカサッとした感触があった。

「どうしよ、このくらいなら放っておいても平気だけど——って杏里さん？」

「——恵さん、はしたないです……」

少しだけ頬を染めて、わたしのほうをみないようにしながら咎めるように言った。

——そんなこと言われてもただスカートを膝上までめくりあげただけなんだけどなあ……。

「コホン……どちらにせよ、そのままにして雑菌などが入ると大変ですから、保健室に行きましょう」

咳払いをして仕切直すように、わたしに近づくと杏里さんはめくりあげたスカートの裾を掴んで直す。

「いきましよう、恵さん」

と言ってわたしの指に指を絡めて再び歩き出した。

わたしとしては、この程度なら大丈夫なのにくらいに思っていたから、杏里さんの行動に少しだけ呆気にとられ、されるままになっていた。

これがお嬢様と庶民の感性の違いだろうか。

先ほどの話を思い出すと、修道院でも貴族と市民の軋轢はあったのかな、なんてことを妄想しながらわたし達は保健室へと行くのだった。

聖堂の銀盤（後書き）

誤字脱字などは報告していただけると助かります。

毎度のことながら

本作品の団体、宗教、主張はすべて架空のもので私個人の創作です。
ですので現実と混同なさないよう留意お願いします。

七不思議のこと、保健室にて

玄関を抜けてげた箱に靴を入れる。スリッパに履き変えて、そのまま保健室へ。

玄関口から左右に分かれていて右に行くと一年の教室へ、左へ行くと職員室側へと続いている。保健室は職員室側らしいので杏里さんと保健室に向かう。

本当ならわたしはこの程度のカスリ傷で保険室に関わりたくないのだけど、杏里さんが思いの外杏里さんが心配しているので逃れられなくなった。

——基本的に苦手なんだけどなあ。

わたしは小中、運動部に所属していたわけじゃないので保健室にお世話になるようなこともなかった。

じゃあ嫌いになる理由がない？

逆ですよ、みなさん。

足を運ぶようなことが無いからこそ苦手意識というものが払拭できないのだ。

あのジメジメした空気と匂い、どうも好きになれないんだよねえ。そう言ってる間に、保健室の前に着くと杏里さんが「失礼します」という静かな声でドアを開いた。

「失礼しまーす……」

恐る恐る入室するとツンとした刺激臭がした。薬のような独特の匂いと消毒水の香り。クリーム色の壁紙に同色のカーテン。

清浄に精緻された空気はどこか遠い世界を妄想させる——相変わ

らず、保健室は異界じみた空間だった。

「あれ、先生がいないみたい」

「ですね」

ふたりで一度顔を見合わせると辺りを巡る。確かに人影も気配もない。ようするに保険医は今留守にしているということ。

「ううん、居ないみたいだしまた出直したほうがいいかもね」

「ましろ先生ったら……仕方ありませんね」

はああ、と深い溜息をつく杏里さん。一度、保健室内を順繰りして戸棚から消毒液や包帯などを勝手に用意し始める

「恵さん、ここに座ってください」

「えっそこに座ってって」

「擦り傷程度の処置なら私も心得ていますから、大丈夫ですよ」

「あ——えと……」

妙な緊張が走る。そもそも人に触れられるという行為に慣れていないわたしには、その行動自体が致死的な行為にあたる。

わたしの心中などいざ知らず、杏里さんは薬瓶が陳列された戸棚を開いて消毒液とガーゼを探し始めた。

「ううん、いやあ……そんなに痛くもないし、もうダイジョウブかななんて、ハハハ……」

断りの言葉を上手に紡げず、絞り出すような小声は杏里さんの耳に届くこともなく大気に霧散してしまった。

「……どうしました？」

当然のことながらわたしの声は届いた様子もなく、不思議そうにわたしを見つめる杏里さん。

その手には包帯と消毒液がしっかり用意されていた。

今更、いやイイです、なんてのも無理なので緊張を隠しつつ椅子に座る。

わたしが座るのを確認すると、杏里さんはわたしのスカートの裾を折り曲げ、楚々とした仕草で膝をついた。

綺麗に流れる金髪を掌で纏めて背中側へと落とした。

めくりあげたスカートの膝を見ながら、消毒液をガーゼに染み込ませて、ちらっとわたしを見た。

「そういえば、恵さんは高等部からの入学ですよね」

「うん、そうだけど……」

「じゃあ学院七不思議とかって知ってます？」

「ななふしぎ……？」

こういう学園によくあるデタラメな噂。

面白おかしく話を膨らませた結果、なんの整合性もないような噂。

「よく聞いたことがあるけど『エリシオン』にも七不思議ってあるんだ？」

ミッション系の学校なのに、ずいぶんと寛容な……。

「ありますよ、七不思議って日本特有のものじゃないですか。『エリシオン』もミッション系スクールですけど、こういうのって住んでる風土に左右されるものなのかもしれませんね」

たしかに海外では七不思議なんて風習はないらしい。そもそも怪異的な現象にすら懐疑的だ。こういう怪奇談は日本の特質なんだろう。

「そっか、日本人が住んでる場所だから多からず日本的な影響を色濃く受けるわけかー」

「はい、エリシオンは創立は昭和と聞きますから日本的な側面を持っていたもなんら不思議じゃないでしょう」

消毒液が少しだけ染みてへんな声をあげてしまう。思わず赤面してしまって杏里さんが笑った。

「それで七不思議はどういうものがあるの？」

「ええと……そうですね。無人の廊下に響く足音や、異世界に続く鏡、段数が変わる階段、トイレの怪奇、動く標本、夜中に鳴り始めるピアノ――」

「定番物ばっか」

定番すぎるくらい定番、どこにいても聞くような内容で中身を聞かなくても内容がはっきりと想像ができる。

「そうですね。最後は——」

「——“失踪する生徒の怪”」

突然、背後から響いてくる声。ビクツとしている間に後ろから抱きすくめられて頭の中が真っ赤に染まった。

「◆△×○——!!」

「うはっいい反応、こりゃ抱きしめ甲斐のある生徒が現れたねェ」

「——ましろ先生、居たのなら声をかけてくださいませんか？」

「悪い悪い、ちょいと野暮用で出かけてたんで——そういえば灯子は始業式で忙しかったもんねェ」

わたしに頬擦りしながらふつうに会話してる。

そしてわたしは大混乱、大狂乱。椅子の上で暴れ回っているのだけれどがっしり抱きしめられ、ホールドされているために逃れられない。

「——恵さん、苦しがってますよ、真白先生」

「こりゃ失礼、恵ちゃん？ ごめんねェ」

「ハア、ハア……いや、別に、いいですけど……」

ようやく拘束状態より解放されたので、あわてて真白先生から離れると振り返る。

真ん中で分けられた膝まである長い黒髪、まるで衛生面に気を付けられないように思えるけれど、その黒髪は鴉濡れ羽というべく綺麗で銀艶を放っている。

わたしの枝毛だらけの黒髪とは大違いだ。

「おどかさうと思って抱きついたんだけど、思った以上の反応だったから嬉しくなって余計にサーヴィスしちゃったよ」

「サービス……しなくてもいいですそもそもされる側が損するサービスってもうサービスって言わないと思うんですけど」

「いあ」

スツと言葉に割り込むように言うと、真白先生は片手を持ち上げて空気を掴むように何度か握ったり開いたりした。

「日々疲れてる私自身に対するサーヴィスだよ、恵ちゃん。地味な娘だから油断していたが、イ《・》イ《・》モ《・》ノ《・》持ってるじゃん」

「~~~~~ツツ!!!?!」

そのジェスチャーと意図に気がついた瞬間、わたしの爪先から頭の天辺まで血が巡る。

全身を朱に染めながら、自分の胸元を覆い隠すように両手でブロックした。

「ん、実に形がいい。柔らかさと張りのバランスも絶妙だ。大きさに関しても同年代平均からすれば上位ランカーだしな。うん、恵ちゃんイイゾ」

「いくないですよー!!」

わたしが力一杯に拒絶するがまるで気にする様子もなく、いまだぬくもりを感じる指先で疑似愛撫を繰り返している。

それだけでわたしの顔が沸騰しそうなほど赤く染まって頭まで真っ白になりそうになる。

「私はおっぱいマニアなんだぞオ。これまで多くの女子のおっぱいを触診してきたんだからな。誇っていいんだからなア」

「あううううつつ……」

あまりの羞恥で声が出なくなってうめき声を漏らすのみになる。

もしこれが漫画だったりすればわたしの頭頂部から湯気やら煙やらがモウモウと立ち上っていたことだろう。

「悪ふざけもそこまでにしてもらえます、ましろ先生。恵さんは先生と違って繊細なんですから」

「呆れた」と言葉を挟んで真白先生を諷める悠木さん。

「そりゃ誤解だよ、杏里。私だってエリシオンの天使のひとりなんだからなア」

「それなら天使に相応しい行動をなさってください。今の行動を見たら“テンブルズ異端審問会”に色欲信奉者アスデモと取られても仕方ありませんよ」

「ハッハッハッ、流石に調子にノリ過ぎたか。スマンスマン」

そういうと色気たっぷりの臍を揺らして笑みを漏らす。突き出し

た凶器は……英語単語四つ目ぐらいかな、と思いながら、早鐘を打つ胸を押さえて、

「しょっ初対面でいきなり……抱きつくなんて……」

「挨拶よ、挨拶。まっ狗に噛まれたと思ってちょうだいね」

ひらり、と片手をあげて人の悪そうな笑みを張り付かせる白衣の先生。

「先生、自己紹介」

「んん？ ああ。そうだったねエ。私の名前は“九部^{くべ} 真白^{ましろ}”っていうんだ、宜しくな恵」

誰が見ても美姫と答えるであろう容姿とは似つかわぬ、野卑な言葉遣い。

「ど、どうも……よろしくです」

わたしはまた悪戯でもされるんじゃないかと怯えながら握手を交わす。

——本当に保険医にしても大丈夫なんだろうか。不安だ。

「杏里。灯子はまだ戻ってないわけ？」

「大聖堂で片付けの手伝いかと。不在なのをわかっていたので訪れたんです」

「あんたらも相変わらずだねエ」

「互いに怨敵と化してますし、修復は難しいと思いますよ」

素知らぬ顔で答える杏里さん。

——やっぱり、ふたりの仲はかなり険悪らしい。

すごく気が合いそうなふたりなのに、異常なほど互いを嫌っているように思える。

灯子さんを見てると成績のことなんて気にするような人柄にも見えないのに、なんでこんなになふたりは剣呑な間柄なのだろうか。

「んで」

「はい」

「……？」

「七つ目の不思議ね」

あれだけブレていた会話が戻ってくる。

真白先生がわたしの足下に膝を付くと、巻き途中で暴れてしまったため、外れかかった包帯を再び直し始める。

杏里さんかというと立ち上がって、その光景をじい、と見つめていた。

「夜な夜な生徒が失踪しているって話だ。夜に外出届けを出した生徒の数人が失踪してるっていうな」

「最近のことですよ。更新、上書きされた七不思議です」

「更新？ 上書き？」

「ようするに七不思議も世代性、時流の影響を受けるということです。今まで淘汰されていない七不思議というのは時代性に左右されないような普遍性を持った怪談ですけど、七番目はそうではなかった」

確かに。たとえば『夜中に受信するファクシミリ』なんて怪談があっても今どきファクシミリが無いのだ。発生せぬ怪奇はもはや怪奇には成り得ない。

「つまりは今の時代に適した怪談じゃないから淘汰されちゃったってことかな」

「だねエ。普遍性を持った怪談だって時代ごとに細部が変質していつてるし、その中で淘汰されるものだって出てくるのは普通だよねエ」

怪談自体が人の口伝から発生したのだから、人の手でまた形を変えるのは当然の理。殊に伝承、口伝なんてものは時代ごとに立ち位置を改められるものなのだから。

「エリシオンだと七番目が世代を越えられず淘汰された、と。そして新たに加えられたのが失踪怪談ですね」

——失踪怪談。

「実際に人は失踪しているんですか？」

「ん？　してるな」

「ただ失踪はエリシオンに関わらぬところで起こっているんです」

「へ？」

「失踪する直前、確かに生徒が外出届けを出してるのは一致しているが、被害のない生徒だって外出はしているんだな」

「そしてある日、居なくなったからと自宅の方へ連絡してみると生徒は自宅に帰っている、と――」

なんの怪異性もない。

ただのホームシック、帰郷願望を刺激された故の暴走にすぎない。事件性は皆無。

「ただ――問題はこの後のことなんだ」

「はい」

包帯を巻き終えた真白先生は立ち上がると一度、杏里さんを見つめ、タバコをくわえる。――ほんとこの人保険医なんだろうか。

「――三日以内に失踪してるんです、その生徒たち」

ゾツとした。背筋に悪寒が走りぬけ、肌が粟立つのを感じる。

「失、踪？」

「煙みたいにな。着てた服もなにも持たずに空気に溶けたみたいに住なくなっちゃもうらしいねェ」

「その場に服も脱ぎ捨てられたまま。飛び出すにしてもお金ぐらいは持つはですけどそれすら持ってないって話です」

「そ、それって学院内で？ それとも自宅なんですか？」

「自宅です。なにかに巻き込まれてるのか今警察も調べているみたいですけど……」

有名女学院での失踪。なんとも胸の高鳴る響きなんだろうか。スキャンダルの香りがする。下世話と思いつつもわたしは高揚する胸の動悸を悟られぬように胸元をそっと抑えた。

「失踪かぁ……」

「恵さんも気をつけて下さいね」

「へ？ として？」

わたしの間の抜けた言葉に真白先生が呆れたように嘆息を漏らす。口端よりモウモウとした煙を吐き出した。

「お前ねエ。緊張感が無いな」

「うええ？」

「もしかして自分だけは大丈夫なぁんて思ってたんだろうオ。そんなヤツに限って失踪しちまうんだよ。だから悠木は気をつけろって言うてんだ」

それは思ってもみない事だったので、その時のわたしの顔は大層

滑稽だっただろうと思う。

想像力の欠如を言い当てられて、胸に棘が突き刺さったみたい。

「お前みたいなヤツが一番危ないだろオ。子犬みたいにキャンキャンはしゃいでるしな」

「うっ……そっそんなコト無いですよ」

言い当てられてしまってる。わたしの好奇心。

それと恐怖心は人一倍に強いクセに脅威に対する意識の働き掛けが弱いのだ。

これは産まれ持った特性や、人格形成によるものなので今のところどうしようもないけど。

「ちょっと抜けてるとこありますけど、そんな簡単にヘコんでどうにかなったりしませんからあ」

「ホントかねエ」

「どうでしょうか」

ふたりの反応も明らかに信用がない。

杏里さんも真白先生もついさっき知り合ったばっかなのになんて辛辣なんだよう。

「まっ、兎に角。まだ慣れてもない内に遊びまわって変なトコに首を突っ込まないように注意しろってことだな」

「そういうことです。判断をするのはもう少し後からでいいと思います」

新入生に余計な荷物を背負わせたくないという配慮もあるのだろう。ふたりはそう言ってくれた。

「辛気くさい話はここまでにしてと——おまえらホームルームに遅れてるが大丈夫なのか？」

膝小僧をばんっと、叩いて処置が終了したという合図をする。地味に痛い。きっと我慢しろって言うんだらうけど。

「あ、そう言われてみればそうですね。——そういえば恵さんって“桜”組？」

「えっ、えと……“桃”みたい」

急にクラスを聞かれて慌てて確認するように自分の紙を確認する。

「“桃”かあ——では違うクラスなんですね。ちょっと残念です」

「う、うん、そうだね。折角——」

……ん？　　そういえば友達になったようなつもりじゃなかったのに、わたしはふつうに悠生さんに心を赦している。

自分で言うのもなんだけど、わたしは非常に面倒な人間だ。警戒するし、壁を作るし失言も多い。なので倉子や親兄弟くらいしか心を許せる人物なんていないのだ。

けれど、いつの間にか悠生さんは自然と、壁の内側に入り込んでいた。それこそわたしすら気付かないような空気で——

そうだ、なんで不自然に思わなかったのか。

わたしのようなコミュニケーション不応人間がこんなに自然に

接せられること自体に無理がある。

けれど、悠生さんとは隔たりを持たずに話せている。

——なんなんだろう？

確かに彼女は、そこらの凡百の人間とは違う風格がある。

けれどそれはわたしが自然に打ち解ける要因にはならない、むしろマイナスの要素でしかない。

当の本人は真白先生となにか話をしている。

今更だけれど、なんだか不可思議で正体の見えない感情が沸き上がってくる。

見上げると天使の微笑。

「……？ さ、行きましょう、恵さん」

呆然と見上げるわたしを見下げ、愛らしく首を傾げると手をそつと引き上げてわたしを立たせてくれる。

じんわりと温いてのひら、それを感じながら、

気にしても仕方がない。考えても答えなんて出るわけがない、と断じて、深い思考の海からはいあがる。

「んじゃ、おまえたち新生活だからってあまりハシャいでハメ外すなよオ」

「先生じゃありませんから、そんなことしませんよ。わたしも恵さんも真面目で品位公正なんです」

先生の発言に苦笑混じりで答える。

予想通りの答えに満足したように背中を向けたままヒラヒラと手を振って、

「おつかれさん。今日は半ドンだしゆっくり休むといいよ」

半ドン、とは授業や仕事が半日で終わる日のことである。
正直、最近では使われない。ていうか完全に死語である。

「ごきげんよう、真白先生」

そう言ってわたしと悠生さんは保健室を後にしたのだった。

「ヤッホー」

始業式、ホームルームを終えて詳しい授業説明と個々の挨拶、最後にエリシオンの生徒としてふさわしい生活態度などを一通り説明する頃には、午前が終わっていた。

つまり、わたしのエリシオン女学院初日が終わった瞬間である。

色々厳しいと話に聞いていたけれど、きついところはきつい、緩めるところは緩める方針らしい。

それはわたしの生活スタイルにとっても合っているからむしろ好ましいと思う。

天使達がそれぞれの場所で語らっている教室を一度見渡す。

初日の放課後というのは大事である。

学校とは社会の縮図であると誰かが言った、それは正しい。大人であろうが子供であろうが、基本はパワーゲーム。つまり人数が多

いほうが勝つのは当然の結果である。

だからこそ初日こそが重要なのだ、如何に自分を売り込み、勢力を拡大させるか、または如何にして大きな派閥に取り入るか、ということが大切となる。

大は小を駆逐する。資本主義の理である。ならばわたしたち生徒もその資本主義に乗っ取った生存競争を――。

「おーい」

「? ……なな、なんですか?」

目の前を横切る手の平。それを眺め、腕のほうに流れるように視線をあげると少女がいた。結いまとめられたポニーテールが揺れる。

「初めましてー。私、横井あすみよこい」

にぱっ、と太陽のような笑顔。天真爛漫といった少女なんだろう。ダークサイドのわたしとはまた真逆の人間。

「……初めまして、わっわたしは鹿島恵」

「じゃ“めぐっぺ”で」

「へ?」

「あすみんでいいよ」

いいよ、と言われても困るというか……

ここの人たちは基本的に社交的すぎるくらいがある。いきなり間合いを詰められるから、社会不適応人間のわたしには辛すぎるのだ。

「あ、あすみさん……」

「あ・す・み！ あすみんだってっ」

眼前に顔が寄ると言葉を区切って強調すた。
小さな頭部の後ろで跳ねるように尻尾が揺れている。

「あ、あっあすみ、ん……」

呼んじやった！ なんか勢いに流されて言っちゃったけど。

「アハハ、これからヨロシクね、めぐっぺ」

そういうと一度「ゴメンネ」と手を合わせて、わたしの前の席（いまは別の場所にいる）不在の椅子に腰掛ける。

「いやあ、わたしね。あんまり派閥とかって嫌いなんだー。色々面倒じゃない、その日の空気を詠んでああじゃないこうじゃない、それじゃないこれじゃないとかさ」

そこまで言って「ああいうのダメなの」と手をヒラヒラとさせながら発言する。

「かといって一匹狼気取るほど私も摺れてないわけなんだなこれが。やっぱり寂しいものは寂しいし、言葉を交わせる人間がいてくれたら安心するわけ」

ああ、なんとなく言いたいことは分かる。彼女もわたしとは別の意味で逸脱者なのだ。わたしたちが知的生命体であり続けるかぎり、

こういうはみ出し者は現れる。そんなに人間が取る選択はふたつしかない。

——逸脱し続けるか。

——繕い続けるか。

ただ遮二無二——傷だらけになり血反吐を吐き散らそうが歩き続ける道しかない。

「ねえ」

「あ、は、はい!？」

いけないいけない、また夢魔に囚われていた。自己に潜る癖をどうにかしないといけないと思いながらも特定の記号に反応してしまっている。

わたしの奇矯な行動をきょとした顔で見るとにへらと笑う。
気にした様子もなくあすみさんはわたしをじい見つめて、

「めぐっぺって百面相だ」

「ひゃくめん？」

「そそ、百面相。暗い顔してるかと思ったら驚いてる、そうかと思えば落ち込んでる、次々に表情が変わるから」

——それ褒められてるの？

「だからさ、すっごく面白いね——てことっで友達にならない？」

「え、どうして？」

即座に聞き返してしまう。いくらなんでもわたしを選ぶというのが分からないからだ、まるで理解出来ない。

利害で言えば害しか発生しない、害虫レベルだと思うんだけど…。

「ああ、その点なら心配ない。交友関係には利と害があるって考えてるみたいだけど。——私もその考えには賛同してる」

にやりと口端を持ち上げて笑う少女、なんだか小悪魔のような笑み。

「さっきも言ったように、私は一匹狼気取るほど摺れてないし、かといって派閥でやってくほど精神太くないんだなあ、これが」

——ああ、なるほど。

納得がいったし、しっくり収まった。

つまり彼女にとって私は寂しさを紛らせるための相方なわけだ。

「それに孤高なんてやってると攻撃されやすいしねー」

そう。外れ者、逸脱者は社会における敵とされる。

相伴がいるというだけでもその確率は大幅に減少するのだから、身を守るという意味ではあすみさんの考えは実に合理的だ。

「だから友達——めぐっぺとおっともだちっ♪」

リズムを刻むように首を振りながら上機嫌な少女、トレードマークであるポニーテールがふりふりとしっぱの揺れる。

取り立てて美人というわけじゃないけれど、たぶんこのさっぱりとした性格とさわやかな容姿は異性に好かれそうだなあなんて思っ

た。少しだけ沈んでた心が浮かび上がりクスリと笑みが溢れ出た。

「うん、そうだね。じゃああすみん。これから仲良くしょっか」

「うん、ヨロシクう、めぐっぺ」

そういうと互いの顔を見合わせて、つい吹き出してしまう。

「ちなみにめぐっぺは、今新入生のなかでは一番の有名人なんだよ」

「……へえ——はい？」

曖昧な返事の後にくる疑問符。わたしが有名人ということはこういう事だろうか。確かに遅刻してしまった分、人より目立ってしまった節はあるけれど。

そんな一年全体に知れ渡るほどではないはずだ。

「ど、ど、どっ……どうして!？」

「ほら、今朝。タマキ先輩に見初められたじゃん」

「……………」

ああ、あれ——あれは見初められたっていうかお爺ちゃんの縁で知っていたってだけで深い意味はない。先輩の感覚も魔女の家系だから礼儀として挨拶しただけに過ぎないだろうし。そんな騒ぎになるようなことじゃないと思うけど。

「違うって顔。でも全校の憧れであるタマキ先輩に話しかけられるってだけでも一大イベントなんだよ」

「普通にからかわれてるだけなのに？」

「直接言葉を交わす人自体が稀なんだよ。先輩はいつも忙殺されてるから話しかける暇なんてないだろうし」

「そうなんだ？」

「聖徒会自体の決定権が強い学校だから、やっぱりなにかと忙しくなるっぽい。そのせいで話しかけることも憚られる空気が蔓延してるんだねー」

薔薇の香りを思い出す。美麗という言葉を体現するような凛々しい先輩。

確かに――あの美しすぎる薔薇は、その存在密度故に他者を拒絶する。

「けど大した話はしてないんだけどなあ。普通の挨拶しただけだし」

「内容はどーでもいいの。ようするに言葉を交わしたという事実があるだけで、めぐっぺは他の生徒の羨望と嫉妬を受ける対象になるってわけ」

「それに――」と付け加えて、

「悠生杏里とも友達になってるっぽいでしょ、めぐっぺ」

わたしの机に両肘をついてまた厭らしくニヤニヤと笑う。

「あ、あう、うん。ちょっと始業式に行くときに出会って……」

「そこ！」

「!？」

ズビシッ、と音がしそうなくらい勢いよくわたしの鼻先に人差し指を突きつけてくるあすみん。

あまりの勢いにパチクリと瞳をまばたきさせてしまいながらあすみんの指を見た。

「次期聖徒会長。聖徒会役員入り確実と言われ、容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群。――エリシオンの園に咲く新しい薔薇のつぼみ“悠生杏里”」

まるで演劇をするように、手を広げてわざとらしく芝居がかった台詞を読み上げる。

「うん、綺麗な人だったけど……」

「でしょっ？ 是非とも今度お近づきになりたいわけ！」

「え……あ、うん……まあ」

今度は机に手をついて乗り出すようにわたしに顔を近づけてわたしの顔を凝視する。……いや、顔近い。

そもそもなんであすみんはそんなに学院内の情報に詳しいんだろう。知ってはいるだろうけどそこまで熱心に情報を追うような人はいないだろう。そう思うと少しだけ焦臭い。

「だからさー、今度逢わせてくれないかな、めぐっぺ」

両手を重ね、頼み込む姿を見つめながらわたしはその理由を推測する。

誰しもが詳しい情報を求めるわけじゃない。求めるとすればそれをウリにするような活動をする人間に限定される。

「――なるほど」

「めぐっぺ？」

「分かった、あすみんなって報道部でしょ」

考えたら簡単なことだ。なんでそんなに情報に詳しいのかなんて、情報を能動的にキャッチしているからに決まっている。

じゃあ何故能動的に情報を得ようとするのか？

最速情報を売りにしているからという結論である。

さっきのパンフレットの中には新聞部はなかったけど報道部があった

“ エリシオン女学院 瓦版 ”

わたしはパンフレットを開いてソコを指さす。あすみんは少しだけ驚いたような顔をしながらすぐにわたしを見る。

「正解。意外だね――めぐっぺでもっと抜けてるように思えたけど存外よく観察してる」

「たまたまだよ。それにあれだけ食いつかれたらなんとなく分かるし。わたしと友達になろうっていうのはパイプが欲しいから？」

「そだね。やっぱり今が旬の悠生さんにアタックできるのは大きいし、上手く行けば今だ未開の聖徒会を明け透けに出来るんだもん」

——聖徒会？

「いやいや、わたしの周辺にいても聖徒会の情報は入ってこないよ？」

「ん？ ああ、もしかして知らないんだ。機敏かと思えば愚鈍。めぐっぺは不思議人間だ」

「——？」

思わず顎に手を当てて考え込む。頭の上には疑問符が乱舞しているかもしれない。

「分からないなら別に良いんじゃない。いずれ分かるだろうし」

なんだか気持ち悪い。またわたしだけ知らないようなことがあるらしい。

「いったいなに？ もしかしてとんでもないような事があるのかな？」

「それはあたしが言うことじゃないなー。まだ噂レベルの話だからトバシを本人に伝えるのはちょっと」

そう言って白けたように視線を背けるあすみん。

問い質そうと思いましたが、どうやらタイムアップらしい。

入り口の戸を元気よすぎる調子で開け放ち、宮本先生が乱入してきた。

どちらにせよ、あすみんもそれ以上のことは話す気が無いみたいだし質すだけ無駄だろう。徒労を重ねるよりその時期が来るのをゆ

るりと待つのがいいのかもしれない。

そう考えを切り替えると、わたしは新任の先生である宮本の話
聞くことに専念することにした。

ふと、窓からの光を眺める、今日も午後から暑くなりそうだ。

七不思議のこと、保健室にて（後書き）

本作品の団体、宗教、主張はすべて架空のもので私個人の創作です。
ですので現実と混同なさないよう留意お願いします。

と、近いことを←に書かれていることをさっき知ったのでした。
誤字脱字など気になる点は指摘して頂けると助かります。

相部屋と小さな獅子

エリシオン女学院が普通の学園より前時代的だと言われているのは全寮制というしきたりのせいでもある。

その中に“欲や未練などを断ち切ることで、より魂を高等に導く”という古い時代のルールなんだけど。

確かに今の世の中は飽食な時代である。なにかが欲しいと思えば大抵のものは直ぐに手に入る。

豊かさは人の心を大らかにしてくれるが、それも過ぎればただの毒でしかない。

今の世界は溢れかえる情報とめざましい進化、夥しい物欲で満たされている。

まるでブロイラーのように密室の中で延々と太らされているような感覚。

——そんな感じで人類は真綿で自己の首をゆっくりと締め続けている状態である。

部活動選択のため、昼下がりからあすみんなに誘われて報道部へ。

これといって目を引くようなものもなかったので直ぐに帰ったけれど、その後も他の部活動を見て回ったりした。

わたしの場合、運動部って柄じゃないし、かといって文化部も不味い。病み上がりの身体には色々と堪える仕様が多すぎるのだ。

一通り部活動を見回ったところにはすっかり夕方になっていた。

ぽかーんとした顔で寮のある桜並木を歩いていく。

流星に今日だけで色々なことがあったので疲労困憊の状態。歩く足取りも心許ないようになっていた。

色々なことがあった、思い出すだけでも、わたしが一生経験する

ことのないような、そんなイベントの数々に満ち溢れていた。

さくらがひらひらと舞う。

ゆら、ゆら、と。

わたしの心中のように、ちいぽけでうすっぺらい。

そんな幻想に、立ち返ってしまいたいそうになる意識を留めつつ、ひたすらに足を進めるとは指定された寮の前まで着いた。

「――つきみ荘」

独白。立札にかかれた名前を読み上げると、ちょうど入り口からでてきた上級生に見られて潜め笑いをされる。

わたしは顔を赤く染めながら、しらん顔をしてやり過ぐすとそのままコソコソと寮内へと入っていく。

入り口を入ると大きめの玄関口、右側に小窓があり、そこをのぞき込むとシスター達がいそいそと働いている。

夕飯の時間帯だからかな？　とか、考えながら靴を脱ぐと左側にドアの無い小さめの部屋があり、そこに靴置き場のげた箱が存在していた。

靴を置くとそのまま出ていく。玄関口の向かい側には大きなテラスホール。ガラスドアの向こうは談話室になっているようだ。皆思い思いに夕食までの自由時間を過ごしている。

「えーっと。わたしの部屋は……」

懐から割り当てられた部屋の鍵を取り出すと、寮内の地図を参照する。

――220号室。

どうやら二階の一番端の部屋らしい。立地的には少し騒いでも大丈夫な場所だとかどうでもいいことを考えながらキョロキョロと周りを逡巡しつつ二階の自室へと向かっていく。

途中、上級生や知らない同級生。シスターなどに遭遇するけどちやんと「ごきげんよう」といって切り抜けたよ。

そんなわけで部屋の前までやってきた。

問題はここにある。

実はこの部屋割りこそが、わたしにとっての最難関であり、これからの生活における全てを決定づけると言っても過言ではない。

なぜなら、このエリシオン女学院の寮は「相部屋」になっているからだ。

ただでさえ他人に対して過敏なわたしが一年間一緒に知らない人と過ごすとなると血反吐を吐くような苦悩が待っていることは難くない。

わたしだけならいいけど相方にも迷惑をかけてしまうのは忍びない。

まずそこが問題。

せめて気の合うまではいかなくとも不干渉を守れる人間ならこっちとしては非常にやりやすい。むしろ好ましいくらいだ。

逆に煩わしいタイプの人物になってしまふとわたしは死ぬ。

ようするにこの学院ライフを満喫するかどうかはこの瞬間にかかっていると言っても過言じゃない。

他人にとってみれば、大したことなくてもわたしにとっては大問題といってもいい。

——願わくば、わたしの相方は穏やかな人であるように。

そんな風に祈りつつドアの前へ。

ドアのとつてに触れる、

……が、土壇場で怖じ気付いてしまふ。

もしこの奥のにいる人間がわたしにとって最悪の人種であつたらどうしようと。

そんなことを考え、懊悩し続ける。

「――だっ!？」

悶々とドア前で悶えている時を終わらせるように扉が開け放たれた。

ハッと気づいたが身体の反応は鈍く、ドアに額を殴打し、そのままよろける。

「イタタ……」

「あら……? 恵さん」

「え……その声は悠生さん?」

部屋の奥から聞こえた声は他ならぬ悠生さんのもの。

――悠生さんが部屋の中にいる、ということは……?

つまりは悠生さんがわたしの部屋の相方ということになる。

悠生さんはわたしに近づいてきて、殴打した額にそっとハンカチを当てた。

「大丈夫ですか? ひどく打ちつけたようですけど」

「だって大丈夫大丈夫。このくらい慣れっこだから」

すこし痛いけど、この程度なら結構ぶつけてるから本当に大丈夫。それより悠生さんの綺麗な顔が間近にあるのがなんだかひどく気恥ずかしい。

わたしってそっちのケがあるんだろうか、やっぱり。

「もうっ……先生が思い切りドアを開けるからですよ」

え？ 先生って……？

ドアから出てくるのは長身の男性。燃えるような赤髪に透き通るような青い目。スータンを身に纏うその人はわたしもあの時見かけた人物だった。

「マキナ先生」

「どうも。いや、申し訳ない恵くん」

そういつて小さく頭を下げる先生。

長く整った眉を困らせるマキナ神父……相変わらず出来上がりすぎ！

その少年のような苦笑にキュンとしちゃいながらふと疑問が沸き上がる。

あら？ なんで先生が悠生さんの部屋に訪れてるんだろう。

「先生には少し相談に乗ってもらっていたんです」

わたしの疑問を氷解させるように額にハンカチを当ててくれたまま、悠生さんがそういった。

「ああ——そうなんだ」

そんなわけない。とか思ってしまうのは下世話だろうか。

これだけの美男美女であれば、領けてしまうし絵にもなる。正直、嫉妬の念すら持つこともできないレベルだ。

ふたりとも容姿が絶世のものすぎて遠くの次元の話に思えてしまう。

「ええ、用事が終わったので早々に退散しようと思ったところに君に出会ってしまったということだ」

骨抜きスマイルをしつつ、もう一度頭を下げる神父。

キリツと長い眉が下がっていて、なんだかとてもキュートだ。

これは許す、許さないやつがいたらそいつを許さない。そういうレベル。

「いえ、傷になってるわけじゃないので大丈夫です」

「ああ、そうか。それならよかった。うら若き天使を傷モノにしてしまったとあらばどう責任をとっていいのかわからないからね。そうなければ主とお許し下さらないかもしれない」

「汝の行いゆるすまじってね」とジョークをいい、困ったようなはにかみを見せる。

——やっぱりキュンとする、うん。

「それではマキナ先生。『あの様』に」

「ああ、わかった。杏里のほうも『気をつけるよう』にね」

額から手を離し、マキナ神父に近づくと少しだけ寄り添い見上げる悠生さん。

鈍いわたしでも気づけるくらい、悠生さんはマキナ神父を信頼しているように思えた。

「そういえば、恵さんはどうして私の部屋にいらしたんですか？」

離れると思い出したようにわたしに訪ねる。

「あ、えとっ……ここ、わたしの部屋……」

「えへへ」と苦笑いをしながらわたしは悠生さんにそう告げる。
悠生さんはキョトンとした顔になるが次の瞬間、両の手を打ち合わせてわたしの手を握りしめる。

「まあ。恵さんが私の相部屋相手なのですね！ 良かった、私それが不安だったんです」

そういつて胸をなで下ろしたように安堵の笑みを浮かべる。

こうやって安堵してくれているということは悠生さんも、どうやらわたしのことを信頼してくれているという証拠だ。

理由や動機なんて分かりもしないけどこうやって喜んでくれているという事実だけでもわたしもうれしくなる。

「うん、わたしも悠生さんが相部屋の相手で良かったかな。実はわたしも不安だったから」

自分の思いも吐露して、悠生さんにつこりと微笑みかける。

「はい、これからよろしくお願いしますね。恵さん」

「……うん」

胸の奥がむずがゆい。

ヒトを拒絶してばかりのわたしにしてみると不思議な感触だ。

不可思議なこの衝動の意味を知るとは今のわたしでは出来そうもない。

けれど少しずつ、
世界は変わり始めていたらしい。

刻々と、

それは良きにせよ、
悪しきにせよ。

色々あった日のお風呂は気持ちいい。
わたしはシャワーでもいいと言ったのだけど、

「どうせなら、湯船にゆっくり浸かるほうが心身ともに安らぎます
よ」

とのことらしい。わたしは基本的にシャワー派だったのであまり
そこらへんを気にしたことはなかったけど。

「はあ……」

とにかく今日だけでも大波乱だった。いろんな人に出会い、話を

した。

引きこもりのわたしには大躍進だったともいえるんじゃないだろうか、うん。

今日は、あの――幻想に、振り回されることもなかった。きっともう大丈夫なんだと思う。

わたしはようやく一歩踏み出していいたい。

倉子にも感謝しなきゃ。彼女がいないと今のわたしは無かったんだから。

湯船に肩まで浸かり天井を見上げる。

ユラユラと、立ち上る蒸気にまかれて黄色灯が揺れる。

幻想にも似た光景、不確かな境界線が余計に曖昧さを助長させていく。

考えもしなかったこと。

悪意とは、そんな隙間に割り込んでくるのだ。

黄色灯の輝きが眼球を突き刺すほど鮮烈に変化するのを感じるとわたしの視界が真闇に暮れる。

しまったと、声を出す暇すらない。

ふいに、わたしは――。

――また幻想に潜ってしまった。



――甘ったるいような日々。

小さな円で世界が収束していた。

――すべてが黄金色に包まれていた世界
拒絶と排斥で覆われた隔絶された園。

――古ぼけたノート。

そこにはとうといすべてが書き連ねられていた。

――わたしたちの共通幻想

ただ夢ばかりを信じていた遠い過去。

――壊れる、ちぎれる、裁断される。

染まる、汚れる、塗り潰される。

――讒言、暴言、詭弁。

その声はとおく、形さえも消えて。

――墜ちる世界、朽ちる夕焼け。

子供じみた願いは赤黒く焼け付いて。

――黄金は腐れ堕ち、地面に投げ出され

蝶が舞う。可憐な――わたしだけの大切な。

――ばしゃ、と地面に飛び散る欠片。

カタチが喪われる、

――あらぬ方向にねじれた手足。

あんなに綺麗であったものすらただひたすらに残酷に。

――水風船みたいに赤い水が飛び散っている。

忘れえぬ最後の彼岸花、

――それをわたしは上から、

わたしは、

ただ――呆然と、見ていた――。



突如、肌感覚が戻ってくる。
全身にまとわりつくねばっこくなま暖かいモノ。

――血液。

赤。赤黒い。血だまり――。

網膜に焼き付いた鮮烈な黒赤。

忘れ得ぬ衝撃。一生拭えぬ魂の外傷^{トラウマ}

安寧の満ち足りた世界で、

黄金色の眩しい日々、

わたしは、

友人を、

――、殺した。

「あ――」

忘れていた感触が手の中に甦る。

再生されてはいけない古傷がミチミチと音を立てて開き、夥しい
内臓^{きおく}を巻き散らす。

蜂蜜色の甘ったるい黄金色は珈琲色の濁りきった赤錆色に変貌する。

湧き上がる畏怖、体中の体温を過去が奪い尽くしていく。
予想だにしなかった恐怖に自己の身体を抱きしめると、身体を丸めて冷気を堪えようとする。

「……………あ、う」

自分の声。これは自分の声だ。自分の感触が思い出せない。

存在意義を見いだせない。

存在密度を感じられない。

存在理由を思い出せない。

自己の希薄さに怯え、竦みあがる。

湯船の熱ではこの身体の震えを止められない。

これは魂の底に眠る凍土の冷気。

けして外部の熱量では暖めたりは出来はしない。

これは罪の凍え、心根に植えつけられし永久凍土トラウマなのだから。
忘れていた罪の重さ。我が身の生き汚さを呪い、恨む。

——忘れてはいけなかったのに、

——無くしてしまっってはならなかったのに。

水面から両手をあげて、その手のひらを呆然と見下ろす。

こんな手……切り落としてしまなきやいけなかったのに。

こんな指、切り刻んでしまわなきゃならなかったのに。

その掌にべっとりと纏わり付いた血を幻視する。

生気の宿らぬ屍のような声でつぶやいた。

「わたしは——小説家に、ならなくちゃ——いけないんだ……」

次の日。

わたしはあの後、どうやってお風呂を出ていったのか思い出せない。

かすかに覚えているのは二、三言だけ悠生さんと会話したくらいだ。

その後はひどく身体がダルくて夜更かしもせずにそのまま寝てしまった、と思う。

起きると『先に登校している』という書き置きがあった。どうやら氣を使わせてしまったらしい。

せっかく良い相方が共同生活の主になってくれたというのにこれじゃ印象は最悪だ。部屋替えを希望されても文句は言えない。

そうして朝ご飯も満足に食わずにフラフラと学校までやってきて授業などを受けていたりする。

二限目が終わる頃、わたしの様子が心配になったのかあすみんなやってきた。

「ごきげんよー。めぐっぺ」

「ごきげんよう、あすみんな」

「なにかあった？」

竹を割ったように直球。片方の眉を吊り上げてキュートに聞いくる。

非常にあすみらしい心配の仕方だろうと思った。ただ、自分が囚われるあのことを話せるはずもない。一般人には大凡理解できない世界の話なのだから。おおよそ

わたしは弱々しくへらっと笑うと首を振る。

「ううん。なんでもないよ、あすみん」

「そうかな。なんだか昨日と違ってめぐっぺ、すっごく疲れて見えるけど」

他人にはそう見えるのか。なんとなくこんな風に他人に見えるくらいに憔悴しているというのは不味いかもしれない。

少し空元氣でも出しておかなきゃ本当に面倒なことになる。

「大丈夫だよ。ちょっと昨日さ、色々あって寝付けなかっただけ」

「ああ、わかるわかる。夢のお嬢様学校に入学したんだもんね。今まとは生活が一変するだろうから変化についていけなかったんだね」

少し大げさな感じで頷くあすみん、ポニーが上下にたわむ。

「あたしはさ、中等部からだったしめぐっぺの気持ちもよく分かるんだよね。だからさ、もしめぐっぺが困ったようなことがあったらなんでも相談してくれていいよ」

「ああうん、なにかあったらあすみんに相談するよ。あすみん報道部だしなにかといろんなこと知ってそうだし」

「そういうこと。だからなんでも聞いてくれていいよ。知ってることなら答えてあげるし知らないことなら調べてあげる」

ニッコリと澁刺な少女が笑う。わたしを元気づけようといつも以上に元気に振る舞ってくれているんだろう。その気持ちがなによりうれしい。

「そろそろ、イイの？」

あすみんの後ろ、やや下あたりから声が聞こえた気がする。
あすみんが振り返ると視線を下に移して両手を合わせる。

「やや、ごめんごめん。ちょおっと友達同士のセッションなんかをね」

「セッションもセッションでもイイケド。後ろに待ち人がいるのを理解してから話なさいよね」

ツンとした口調。よく見ると机からひよこつと顔が見えるくらいの少女が立っていた。

……立っていたと言ってもあすみんの胸元あたりの背丈程度しかない。つまりわたしの座っている位置と目線は同じ。

「……………」

「なんかモンクある？」

「いやいや、別にないです。はい」

呆氣に取られ言葉を失ったわたしに、瞳を尖らせ威嚇する少女。

やや下から発せられる言葉はなんか新鮮。ちょこつとした体軀がまた可愛らしい。もへ。

「カナちゃんカナちゃん」

「そうそう、あたしの名前は白掌はくしょう 奏かなで」

後ろで上から白掌さんの後ろ頭を見ながらあすみんなが呼びかける。それを自然にスルーする白掌さん。

「はい、えっと白掌さん」

「ちよつと」

「はい？」

「同級生に白掌さんって呼ばれるとむずがゆいわ。かなでって呼んでよ。それに名前で呼ぶのが学院こくいの流儀よ」

——初めて知った。だからみんなわたしが名字で呼んでいると訂正するように名前を申告するんだ。

一日経てようやく気がついた事実。それを知らなかったことがあまりに恥ずかしくて、思わず頬を赤らめてしまう。

「——昨日は会長がどうも。恵さん」

「——ああ。えと……」

ちよつと混乱した。いきなり会長である珠希先輩の名前が出てくるなんて思っても無かったから——あの光景が脳裏をよぎって、薺

薔の香りと凛々しい姿が臉裏をかすめた。

「カナちゃんはね、聖徒会の書記なんだよね」

「モンクあんの？」

クリンツと上を見上げてフーツと威嚇するようにあすみんをにらみつける少女。それが逆に可愛い。

背丈も低いがその容姿も相応に幼い。高等部の制服を着用しているので高校生なのだとわかるけど、もし中等部の制服を着てたりしたら気付かないかもしれない。

いや、下手すれば初等部に間違われそうな容姿かもしれない。

茶色に近い金髪……茶金とでも言うのだろうか、地面に付きそうなくらい長い髪を揺らしていた。

大きな眼は強気のように釣り上がり、眉はそれに習うようにキリツと角度をしている。

童のような身体は細くて、けれど無駄な部分ひとつ見当たらない。しぼうその筋の人だったりすると垂涎すいぜんものだったりするかもしれないナ！

「……あん？　ま、その報道部が言うように聖徒会書記を務めるわ」

わたしが頭の中で巡らせていることをまるで判ってるかのように釣り上がりっぱなしの瞳をさらに鋭利にさせながら、まるで義務のように語る。

「……い、いえっ。——それで聖徒会の役員さんがわたしのところになんのようなんですか？」

「あれ、めぐっぺって結局あの噂聞いてないわけ？」

聞くもなにも……わたしはまだ入学したてでその手の情報網はない。むしろ知っているほうがおかしいと思うんだけど。

「聞いてないよ。昨日も部活動巡りで疲れて直ぐに寝落ちしちゃってたし」

「そっか。じゃあ聞いてなくても仕方がないね——実はだね——」

「ストップ！　そこから先はあたしの仕事っ。ハイエナ腐肉喰は黙ってなさい」

ハイエナ呼ばわり。漫画の中だけのことだと思っていたけれど本当に報道部ってハイエナ呼ばわりされるんだ。それともかなでさんが特殊なだけなのかな。

「まず確認」

「——？」

「昨日、部活動を見学したようだけど、まだ決め手はなかったのね」

「うん、結局なにをするかまでは決めてないけど……」

「OK。じゃあ改めて本題よ。よく聞きなさい」

一度咳払いをすると胸を叩いて調子を計るようにする少女。

「鹿島 恵さん。あなたを聖徒会役員、書記に推薦するわ」

「……………」。

え？

「……………なんて、いま」

「耳がふさがってんの？ 聖徒会書記に推薦するって言ってるの」

いや、よくわからないデス。

どうしてわたしが聖徒会役員に推薦されるんだろう。

明らかに珠希先輩の力が働いているじゃない、それって公平じゃない気がするけど……。

「……それ、公正ですか？」

「……なんとなく言いたい事は理解できるわ。本来ならあたしだって反対」

腕組みをしてそれが当然と言うように頷く奏さん。そして横目でわたしを値定めするように上下に見下ろし、

「でも会長の流儀でもあるわけ。“持つ者は持たざる者へ奉仕しなくてはならない”って」

そう言った。

「ノブレス・オブリージュ」

「よくご存じね。貴族の責務。会長は常々わたしたちにその必要性を説いているの。あたし達は持つ者としてそれらを持たざる者を助けていかなければならないって」

——でもそれは持っている者の論だ。わたしは半分以上持たざる者なのだ。いや、持っているに属しているのはほんのつま先程度でしかなく、その過半数は持たざる者の身体なのだから。

「奏さん、ちょっと待って。——会長からわたしの話を聞いているんだったら、わたしがどれだけ半端な存在も聞いているんじゃないの？」

「ええ。——それで？ 半端者と言うのならあたしだって同じよ」

「えっ、どういうこと？」

わたしとかなでさんだけが理解し得る言葉を交わしているため、その中間に立つあすみんはずっと指をくわえてみている。なんの話なのか理解できないのが悔しくて眉が八の字になっていた。

「あたしも使えないから」

「——え？」

自信を持って——そして胸を張り答える少女。その姿は小さくとも凛々しい。

わたしとは大違いだ、わたしは使えないことに劣等感を抱き、そして自己の内側に逃げ込んでふ鬱ぎ込んでいた。

それを考えるとこの少女の自信に満ちあふれた姿は眼に痛かった。

「使えない。それは仕方がないわ、覆せないし。けれどその生き方だけなら選べるでしょ。あたしはあたしらしくその道を歩いているのよ」

——魔法使いが零落し、その地位を剥奪されるわけではない。

誰もが言う。魔法使いは生き方だと——気貴き誇りだと。

鹿島家が当代で無くしてしまったモノをこの小さき少女はその体躯に大事に抱えて、今も守り続けているということ。

その在り方にわたしの心は小さく揺さぶられた。

そしてその小さな軀に宿る獅子を見た気がした。

「あの、そろそろあたしにも分かるようにはなしてほしいなー、なんてっ」

「……………」

「……………」

沈黙。——ひらっと手を挙げたあすみんの顔をふたり見つめる。

「とにかく。どんなに落ちぶれようが心まで堕ちる必要はないわけ。大切なのは自分如何でしょ」

腕組みをしてかなでさんはそう述べた。

魔法使いでなくとも魔法使い以上に魔法使いらしく生きていける。魔法使いが誇りを失い続けている今だからこそ、その理念は輝く。

「地ベタ這いずり回ってる性根に少しは火が付きそう？」

横目でわたしをチラリとみて様子をうかがう。

いつものわたしならその鼓舞にノセられて、そのまま役員入りしていただろう。自分のことだからよく分かる。

けれど——今はダメだ。

机に置かれた自分の手の甲を見る。

錆び付いた歯車。ギシギシと軋みをあげながら律動する幻想機関。

「うん、すつごく嬉しい——んだけど。今回はごめんなさい」

そう、わたしには成さなくてはならない生き方がある。

申し訳なさそうな顔になっているんだろうな、とわたしは思いながら彼女を見つめる。

はあ、と一つ大げさな溜息を漏らした彼女は肩を竦め、

「良かった。これでホイホイと浮かれて付いてくるようなヤツだったらひっぱたいってお断りしてあげようと思ってたところだけど——存外、分別あるみたいね」

余計なお世話、という言葉が喉元まででかかるが、飲み込んでただの苦笑になる。

「こーいうこと言うけど、カナちゃんはすこし難しいだけだから気にしないほうがいいよ。本心はすつごく残念がつてる筈だし」

「黙ってなさい、この下郎！」

ガーツ、とライオンが吠えるようにあすみに噛みつく奏さん。

小さいせいもあってライオンより子犬みたいだ。

だから強い言葉を使っても、それほど恐怖を感じないのが不思議。

「ともかく。中休みも終わるし、はっきり言っておくけど。聖徒会に入れるってことはそれなりに名誉なことなんだから。それを蹴るだけの理由あるんでしょ」

「うん、わたし——あるんだ」

話すわけにはいかない事情。胸の奥に抱えるしこりがざわざわと騒いだ。

昨夜に切開された記憶がズクンと疼く。

わたしの悲痛の表情をみた小さな少女が片眉をあげて、

「——事情がありそうね。ま、いいわ。あまり根を詰めすぎないようにしなさいよ」

と云った。

わたしは苦笑を漏らしたまま一つ小さく頷く。それと同時に三限目のチャイムが鳴った。

「あー……時間か。じゃあまたお昼にでもお話しようね、めぐっぺ。あとカナちゃんも」

「ハア？　なんであたしまで入ってんのよ」

「もうお友達みたいなもんじゃない。どうせ新クラスの中で異質な存在になってるんだから一緒に連もうよー。めぐっぺもそう思うジヤロがい」

「え？　う、うんまあ。」

変な言葉でこっちに振られて驚きはしたけれど。
一呼吸置いて、ゆっくりと話そうと思う。

「うん、かなでさんとも友達になれたら嬉しいかな。こうして出会えたんだし勿体無いもん」

少しだけ驚いたような顔をするかなでさん。
なぜか頬を赤くして、目を逸らしたまま血の巡りが良くなった頬を搔く。

「……………バカみたい」

「あは、そだね」

まったく、とわたしも頷いてしまった。

「かなで——“さん”は堅苦しいから“ちゃん”」

「え？」

「ああもう。堅苦しいのは苦手なんだっての！」

それだけ言って背中を向けてしまった。
どうやら機嫌を損ねてしまったのかも。

「ごめん。えっと……………カナ“ちゃん”？」

「ん。じゃあね、暇があれば、来るカモね——多分」

背中を向けたまま曖昧な言葉を告げてかなでちゃんが去っていく。

「迷惑ね。ったくう……」

「おっほーほー。満更でも無いクセにいつ。カナちゃんたらツンデレさんめ」

「うっさいわ、この死体漁^{ハイエナ}り」

ふたりが席に戻りながら口論している。

もしかしてあのふたり、ああ見えて実はすごく相性がいいのかも
しれない——なんてことを考えながらふたりの背中を見て少しだけ
ぼうつとしていた。

「——」。――」

視線を泳がせているとふと、視線を感じそちらを見る。

「……………」

瞳だ。黄銅色に染まった双眸がわたしの姿を捉えていた。

その瞳——小振りの水晶を思わせるガラス玉めいた瞳がまばたき
もせずにわたしを監視するように見つめている。

不意に視線が重なってドキリとした。

わたしを見逃さないように捉えられた、その瞳に萎縮して、なぜ
か視線をそむけてしまった。

しかし俯いたわたしを見ても微動一つしない。

今だ視線の元はわたしを捕捉し続けていた。

感情の籠もらぬ瞳が射貫く。

まるでわたしを監視しているように。

やがて先生がやってくると彼女はくると正面に向きなおり、そのまま授業を受け始めた。

どうしてわたしを監視しているんだろ……。

彼女の目は明らかにわたしを凝視していた、と思う。

自分が思い出すかぎりでは面識などない。話をしたこともない。けれど彼女はわたしを見つめている。

いったい、どういうこと？

グルグルと、自分の考えなければならぬことが廻り初めて、考えがまるで纏まらない。

それから昼までの授業はもう散々だった。

相部屋と小さな獅子（後書き）

本作品の団体、宗教、主張はすべて架空のもので私個人の創作です。
です。で現実と混同なさないよう留意お願いします。
誤字脱字など気になる点は指摘して頂けると助かります。

窒息していく安寧

お昼休みになると皆、それぞれにフィーリングの合う人間と食事しようと互いの席をくつつけたり、他人の席を借りたりなどして自由な昼食タイムを満喫するものだ。

学生という身分ならば勉学に励むのは当然となるが、やはりそれだけでは息が詰まってしまう。

そんな中、ほんの小さな日常というものは何よりの慰謝になるのも事実だったりする。

わたしはというとシスターアナスタシアより用意された弁当を開いて箸をつけていた。

例によってあすみんはわたしの前の席、そこに腰掛けて自作の弁当を開いて食べている。

窓際に位置するわたしの席は春も盛りの日差しを満喫するのには丁度いい。

暖かな陽光でばかばかと心地よさを味わいつつ——とりあえず気になってしまっていることをあすみに相談してみた。

当然だけどあの少女のこと。

「——ああ、なつめちゃんか。あんまり気にしないでいいと思うけど」

「なつめさん？」

「こそ、葛木^{かつらぎ} なつめ。元々ああいう子なんだよ。自分の領域^{テリトリー}に知らない人間がいると気にするタイプ」

エビフライを摘んで口に入れるあすみんを見ながら「ほえ」と間拔けな声をあげた。

「ほら、ね。あの娘——猫っぽいじゃん」

「ああ——猫っぽい」

外見とかじゃなくて雰囲気的なものだけど。無口で喋らない雰囲気。カナちゃんほどじゃないけれど身体も小振りだから余計にそういう印象を受ける気がする。

「中等部の時、あたしも同じような経験あるからさ、あんまり気にしないでいいよ。向こうが慣れちゃったらそんな反応も無くなる筈だから」

ふたりで廊下側の最前列にいる彼女を見つめる。

当の本人はまるで気にする様子もなくひとり、食事もせずに黙々と読書をしていた。

「ほらね」とあすみんが言ってこの話は収束しようとする。

おそらくあすみんの云うことが正しいんだろうと思う。

けどあの時、わたしを見ている瞳はそんなタイプの瞳ではなかった。

わたしを逃がさないように見張る看守の目。

そんな印象を持ったのだ。

けれど、あすみんが云うようにわたしの被害妄想の可能性もある。昨日の夜——幻想に引きずり込まれたせいかな、自意識が過敏になっているのかも。

「かーもね、うん」

忘れたほうがいいのかなど。そう断じて、この話に見切りをつける。

弁当のミートボールを摘んで口に運ぶと一口かじる。柔らかくおいしい肉の触感が口に広がり、それだけで幸せを感じる。

なによりそれをもたらしてくれたシスターアナスタシアに感謝などをしつつ。

——そういえば包帯を代えに行かなきゃいけないなあ……

保健室で代えてもらった包帯のことを思い出した。

本当はこのくらいの擦り傷、なんともないんだけどそのままにしておくとか膿してしまう恐れもある。

だから清潔に保っておかなきゃいけないわけだけど。

包帯——保健室で連想される言語。

それで思い出したのが「七不思議」だった。

考えてみると、目の前に学院内では1、2を争う情報通がいるじゃないか。

どうせなら聞いておいても損ではないはず。なのでお米を口に運ぶあすみんなに問いかけてみた。

「そういえば、あすみんな。あすみんな七不思議の話なにか聞いている?」

「んー? ……えええと。ああ、もしかして例の失踪事件のヤツ?」

「うん、あれって本当なのかな」

「ええとね、実際に失踪した生徒がいるのはいるよ。たしか今月に入って3人かな」

「今月？」

「先月が2人」

驚いた。そんな風に毎月事件に巻き込まれてるんだ。

「――そんなに頻繁に事件が起こってるの？」

「うん、そういうわけじゃないけどさ。今回の件って云いにくいんだよねー」

「？」

咄え箸のまま腕組みを少し悩むような素振りをするあすみん、わたしはどういうことかわからず首を傾げる。

「なんとなく聞いていると思うけど……生徒が一定期間失踪し、家に帰宅するっていうじゃない」

「うんうん」

「その後また失踪するって」

「そういう話だったよね」

「ようするに事件性が薄いつてことを云いたいわけでしょ、そのブン屋は」

背後から、いや背後少し下からの声。

振り返ると両手を腰に当ててに直立しているカナちゃん。

「はい、どいて。あたしも座るんだから」

わたしとあすみんの横に位置するところに席を置くと座布団を敷いてその上に座る。

さすがに一個の机に三人が弁当を広げると狭い……。

「いやまあ、カナちゃんの云うとおりかな」

「けどさ、また失踪しているわけじゃない。なんで事件性が薄いのか？」

「失踪が虚言だってことじゃない？」

「はいっ？」

「だから、虚言。失踪じたいが作りもの。エリシオンでの生活が耐えられなくなったから逃げてきて、もう戻りたくないから失踪扱いにしてるってこと」

そうなのだろうか？ でもそれなら失踪などせずに退学でいいはず、失踪なんてまどろっこしい真似をするんだろう。

「腑に落ちないって顔ね」

「そりゃ……そうだよ。だってそんなことする自体、面倒じゃない。社会的に抹消されちゃうってことでしょ、面倒を通り越して異常じゃないかな」

「そこについてはあたしも感じてたんだ。んで調べてみたんだけど

……」

「はむっ……むぐむぐ……ブン屋もあたしたち聖徒会ローゼスも同じ結論にたどり着いたわ」

メロンパンを頬張って食べながらキリツと決め顔をするカナちゃん。

締まらない、頬にパン屑付いてる、ていうかかわええ。

「――親たちから失踪届出てないんだよね」

「……は？　なんで？」

「実際に家に行って訪ねてみたのよ」

『――はあ……どこの娘さんが失踪されたのでしょうか？』

「てね」

「うむ」

真似るようにいうあすみん、それに腕組みして相づちをするカナちゃん。

「警察にも届け出がないっていう話だし、あたし達は狂言回しに付き合わされたってわけ」

そんな話あるんだろうか、同時期に生徒達がホームシックに陥り、同時期に失踪の虚言を吹張する。

――そんなことって偶然でも出来すぎてる。

けれどその感覚こそがわたしがまだ外部の人間足る所以なのかもしれない。内部の人間ならそれも起こりうると感じてしまうものなんだろうか。

「中には娘さんはいたの？　それが肝心なんじゃ」

「うーん、そこなんだよねー……調査してみたけどどうも気配がない」

「本当に、娘なんていなかったように暮らしてるみたいなのよ」

「ふたりともよく調べてるんだね」

「まあ、情報の出所は同じなんだけどね」

「畑刑事はおしゃべりだから——余計なことをブン屋に吹いてくれるのよ」

話を聞くと畑刑事とは女性警官らしい。主に女学校であるエリシオン関係の事件を取り仕切っているみたいだ。

「こっちだって身を切ってるってのー」

わたしは「はあ」とふたりの口論を聞きながらご飯に手をつける。

「あむっ……まあ、現状それ以上は調べられないから結構、捜査が難航しているみたい」

最後のメロンパンの欠片を小さな口の中に放り込むとコーヒー牛乳で流し込む。両手をあわせて主に祈ると食事を終える。

「ともかく、その件は調べても無駄よ。エリシオンの外で起こつてることだからあたし達は触れないし」

「そうだねー……残念ながらあたし達には厳しいなあ」

塀の内側からでは外側の様子は伺えない。たとえなにか大変なことが起きていても塀の内側はいつも通りなのだ。

逆を云えば内側でなにか起ころうが外側は関せずということでもある。

「考えるだけ無駄。ということで話はおしまい。モンクある？」

ツンとした態度のカナちゃんの言葉に首を振るふたり。

それを見ると一つ頷いて、「ごきげんよう」と挨拶をして去っていった。

その小さな後ろ姿を見つめながら、ふと疑問を口にした。

「ねえ、あすみん」

「なんだい、めぐっぺ」

「自然に——友達みたいに食べてたね」

「——ありゃ？」

なんだかあすみんの声が間抜けに聞こえたのはここだけの秘密。

というわけで保健室にやってきたわけだが。

わたしが訪れると真白先生が大きくあくびをしている瞬間を目にした。

「校長には内緒にしてくれよ？」ともう一度欠伸したのには呆れたけど。

本当に教師なんだか。

それはさておき先生に指示されるまま、椅子に座ると昨日擦りむいたところの包帯を解いていく。

どうも沈黙があるのが耐えられないのでお昼に話題になったことを話してみることにした。

「そういえば、先生——七不思議の失踪事件のことなんですけど」

「アア？　もしかして、あれ聞いちゃったクチ？」

「は、はいっ……聞いちゃいました」

「口の軽いヤツがいるなあ……ブン屋のあすみか？」

「は、はい……まあ」

またブン屋云われてる。あすみんは多方面から敵視されてるんだなあ。

「――ったあく。聞いたとおりさ。大体の失踪は虚言ってことらしい」

「でも不自然な点が散見されていませんか？ 聞いた限りだと失踪で片づけるにはあまりに不合理すぎる気がします」

包帯を解き終えて薬を持った手がピタッと止まる。そして少し間を開けた後、

「ふうん……云ってみなよ」

わたしを見てニヤリと笑うと言った。

「は、はいっ……えと……まず失踪事件のおかしい点。学内で一度失踪した後に必ず家へ帰ること」

「ふむ。全寮特有のホームシックじゃないのかね」

「それで、全部説明が付くとは思えません。この時期に偶然3、4人もホームシックを同時に発症するでしょうか？」

「まったくあり得ない話じゃアないな。500人近くいるんだぞ？ 無いとはい切り切れないだろ」

「う……それは……」

絶対に無い、とはい切り切れない。

確率として低いかもしれないけれど、無いというワケじゃない。現実として普通に起こりうることなんだから。

言葉を濁すわたしを見ながらクク、と先生は笑う。

「調べが甘いんだよ。上がってる生徒は皆、精神衰弱症の疑いがあった——つまり自己保身のために多少、強引でも学区を飛び出すのも不合理ではないってこった」

うう……そうなんだ……。

「で、でもでも……失踪扱いにする意味がわからないじゃないですか。社会的に面倒なことになるのに……」

「そもそも失踪事件なんてものは無いんだよ、恵。事実、生徒は自宅に帰っていることは確認されてるんだ。その後、消えたなんて話もでっち上げだ。現に警察に届け出は出ていない」

火をつけていないたばこを加えたまま、わたしを挑発的な上目遣いで見上げる。

「要するに生徒が帰宅した後が、っていうのが引つかかるわけだろ」

「う、……はい」

「たぶん、失踪していない。要するに名門エリシオンから脱落者が出たってことが広まるのがまずいというのとそれを受け入れる施設に変な輩がこないための配慮というやつだな」

「——あ」

そういうこともあるのか……。

たしかにエリシオンが厳しいのは知っていたけどそれで脱落者が続出したら教育方針に疑問をもたれるかもしれない。

それに彼女らもなにかマスコミ的なものに集られる可能性もある。それら社会的摩擦を最小限に押さえるために「失踪」という言葉を選んでいる、ということ？

「……………」

「大人も大変だ。んでまあ子供も大変だよな。周囲に不安を与えるのは忍びないがこういう手段じゃなきゃ最小限に押さえられないってことだなア」

先生はわたしの足の傷口に消毒を塗り終わると包帯を巻きはじめ、

「お前の疑問はよくわかるよ。なんだかこの事件はどこか歪だ。だが社会はその歪さも受け入れ飲み込むように出来ている——気にしているとお前も病むぞ」

と、言って包帯を留めるとパンつとやっぱり叩いた。

「よし完了。もう傷口は塞がっていたし大丈夫だと思う」

そういうと立ち上がって、ふとわたしの指先を見て、

「恵、アンタの指きれいだねえ」

吸い込まれるみたいにわたしの手を取って見つめる先生。

「……は、はい？　そうでしょうか、綺麗さで言うなら悠生さんや会長とか」

「いや、あれは違う。——なんていうか完成されすぎているんだよ、けれどアンタの指は違う……それらの非凡なものではなく、苦勞も

苦痛も受け入れた凡百の指先じゃないか」

それ、誉められてる？

「それだけじゃないさア。その辛苦にまみれて喉を掻き切りそうなの精神が如実に指先に現れている」

どくん。

うつとりと見つめるその真白の姿に、
だれかの姿が重なる。

お姫様が王子様に手を取られた時のように手を触れられ、それを
嘗めるように見つめられている。

「――ナア、鹿島。お前は聖人の腕を見たことがある？」

「い、いえ……ない、です」

「そ。聖人の手はね。腐らないの」

「それは死体防腐処理による加工のせいじゃないんですか」

エンバーミング処置により遺体は防腐処理をされる。

日本では馴染みがないけれど、米国などでは結構一般的なことだ
とか聞いたことがある。

「違う違う。そういうんじゃないねエ。エンバーミングだと死蝟に
なっちまうでしょう。たしかにそういうのはごまんとあるけれど――
本物はそういうんじゃないんだ」

「――はあ」

「本物はねエ、それ個体で生きているんだ」

個体で生きている。死んだ人間の部位が切り落とされて生きているなんてあまりに矛盾に満ちている。

「死んでいるのに生きているんですか？」

「ちよつと違うねエ。死んでいるのは確かさ。けれど死んだ瞬間で聖人の体は止まっているんだ、それこそ――」

わたしの指先を先生の指がすうっとなぞった。

「いつでも復活できるように」

そんなことってあり得るんだろうか。まったく腐らない。加工されたわけではなく、死後直後の瑞々しさを保った部位。

――奇跡と言わずしてなんと云うべきか。

「つまり復活を待っている。聖人はいつでも復活出来るんだよ。ただその時が来るのを待っているだけなんだ」

「その時って」

「ん？ そりゃ約束の日だろオ」

指先を撫でるように触れながらほお、と恍惚の吐息を漏らす、真白先生。妖艶だ。

「けれど解釈によってはこうも考えられるんじゃないか」

「——はい……」

「その謎を解明すれば、死人を蘇らせることも出来るんじゃないかってねエ」

その言葉を聞いた瞬間、

視界が暗転した。劇的な天恵というのだろうか。

自分がすべきとこと、自分が進む道が折り重なる瞬間をみた気がしたからだ。

」

／

「それは……騙されてますよ、恵さん」

自室。ふたりの相部屋。真ん中を境界線にして互いのベッドに座り、わたし達は会話をしている。

まだ越してきたばかりで部屋の模様は質素だ、もう数週間すれば互いの性格が部屋の中を彩るようになるんだろうと思う。

あれから、どこことなく落ち着かずもやもやとした胡乱な気持ちのまま帰宅したわたしは杏里さんにその相談を試みた。

あ、杏里さんって呼んでるのは彼女の希望だから。
わたしも恵と呼んでってことで互いを名前で呼び合うことになったのだ。

「……やっぱり騙されてるのかなあ、でも……ほら、もしかしたらって」

「ようするに先生は死と魂のメカニズムを解明すれば死人を呼び戻す術を見つけられるのではないかってことですよね？」

「うん……そう、なるかな」

「そこで疑問があると思いますけど、それって遺体がある前提で話が進んでませんか？」

——あ。

「そうだ……うん」

「お気づきになったと思いますけど、日本の葬儀は火葬です。よって外来の死人帰しでは要素が欠けてしまうわけです」

ああ、そんな簡単なことに気づかなかったんだ。

あほだ……わたし。

日本の風土は例外なく火葬だった。燃えてしまえば肉体は消失してしまう。帰るところがなければ魂の定着は有り得ない。

「そっかー……そうだよね」

簡単な結論を失念するほど、わたしはその言葉に揺さぶられてい

たということ。

そして魅入られてしまっていたという証拠だった。

誰にもわかるような結果を指摘され、わたしの心が消沈する。わたし自身が驚くほどの言葉は自分の中に染みこんでいたらしい。

顔を伏せ、落胆の吐息を漏らした。

そんなわたしを杏里さんは腕組みをしてじい見つめる。

「――恵さん」

「なああに？」

「――誰かを生き返らせたいと思っているんですか？」

慟哭。わたしの内側の暗黒部を抉るような言葉。

「べっべつに、そんなんっ……」

「恵さん、死人を蘇らせたいんですか」

「ち、ちが、――」

彼女の目に真理が宿る。わたしの内側の管を通し、清涼なモノでわたしの内側に眠る黒いモノを洗い流そうとするように。

彼女の言葉はわたしに重圧としてのし掛かる。

ちがう、ちがう、ちがう――わたしは――

「答えてください、恵さん。あなたは誰かの再生を望んでいるんですか？」

思わず罪深さに忸怩の思いに塗り潰される。

羞恥に視界が赤く染まって両手で顔を覆ってしまった。

「恵さん、答えて……死者蘇生、それをおこなって・恵さんはどうになりたいのですか？」

頭を伏せて、彼女の言葉を拒絶する。そうしなくては自分が壊れてしまう。

この歪みを保てない。

何故なら歪みはわたしそのものだから。

だからこそ脆弱な自分を守り抜くために弱々しく首を振って彼女の追求を振り払う。

「わ、わたしっ、わたしは……取り戻したいだけなの」

死霊のような言葉。カサカサに乾ききった唇から異物を吐き出すように漏らした必死の呪言。

懺悔。後悔。

「――恵、さん……」

気不味い空気が場を支配する。

沈黙が部屋内に横たわり、穏やかさを圧殺する。

どちらも言葉はない。

同情の言葉も、非難の言葉も、

幾多の言語はこの場では意味がないと知っているのだ。

けどわたしはそんな空気に堪えられなくなってしまふ。

ゆっくりと身体を起こして、杏里さんに弱々しく笑った。

「ごめんね、杏里さん。変なこと言っちゃって。わたしすこし出かけて頭冷やしてくるから……」

「あ、あの――」

珍しい彼女の躊躇いの言。云い淀み、視線を二度、三度彷徨わせて、

「私は否定しませんよ。人には須く望む権利はあるのですから――想うこと、願うこと。それらに貴賤はありません」

そういつて「恵さんがすべきことなら否定しません」と付け加えてか細く笑った。

対応に窮したその笑顔、懐かしい傷を掘り起こした。

――なんて身勝手な。

昨日から彼女には心配掛け通しだということを思い出してしまふと、さらに死にたくなつた。

「……うん、じゃあ……」

そのまま曖昧な言葉を残してわたしは自室、ふたりきりの相部屋を出ていった。

窒息していく安寧（後書き）

誤字や脱字などを指摘していただけると助かります。

尚、鬱々とした話はしばらく続きます。

解決のための助走だと思いお付き合いいただければ幸いです。

礼拝堂の悪魔

いたたまれない気持ちを抱えたままわたしは早足でつきみ荘を飛び出した。

どこへ行くでもない、当たり前のことだけど行き先なんて決まっていない。

ただ一人になりたくて杏里さんの前から逃げ出した弱虫だ。

勢いだけで飛び出した動力なんて高^{たか}が知れている。

方向性を持たぬまま進んだ足は、やがて衝動という燃料を失って歩みを止めてしまう。

駆け足がただの歩行へとゆるやかに変化し、そしてついに立ち止まってしまう。

胸腔を叩く鼓動が少し痛い。生きてるであろう実感が今は辛いだけだった。

僅かに浮かんだ額の汗を拭うと天を仰ぐ。

既に夕日沈み、空には夜の帳が降りていた。

満天の星空の下で、わたし一人が世界に取り残されたみたいだ。

ほう、と白い息が溢れた。

春の夜はまだ少しだけ肌寒くて、頬や手をシンシンと冷やしている。

わたしはどこにもいけない感情のまま、ふらふらと外を彷徨い歩いていた。

「こんな時間だと購買にもいけないなあ」

ポツリと呟く。かと言って校内を歩き回っているとシスター達に

ドヤされてしまう可能性がある。
選択肢を潰していくと夜道を散歩するしかないという結果。

「あゝあ……」

後悔。別にわたしが悪いわけでもない。かといって彼女が悪いというわけでもない。

ただ人に話すような会話じゃなかったというだけ。

死人を黄泉還らせるなんて生命の冒涇に他ならない。他者からみればわたしの思考回路は異常と取られて当然だ。

喪ったものを還そうという行為はことわりの外にあるものだ。

人はそれを外道と呼び蔑む。

けれど、なぜ人が人を生き返らせてはいけないのだろうか？

わたしの中の倫理感が禁忌を訴えかけてはいない。

出来るなら――行っちゃっていいはずだ。

望むなら、手を伸ばすなら――それを掴み取る権利があると思う。

星空を見上げる。人の数ほど瞬く星達。煌めいては消えていくはかなき星達。

ここからじゃ届かない。以前も望んだことがある。

瞬く星を掴みとろうと手を伸ばしたこと――

「あら、恵じゃない」

「ひゃわっっ」

あからさまに変な声を漏らしてしまう。星空に手を伸ばしている姿をはつきりと見られてしまっていた。

これが漫画ならわたしはピョーンっと効果音と共に飛び上がっていただろう。

「珠希先輩……？」

「ごきげんよう。星がとても綺麗な夜ね、恵」

振り返ると珠希先輩が立っていた。濡れたように艶めく長い蒼髪が春風に攫われて音もなく揺れる。

先輩は手で頬にかかる髪を押さえながら、出会った時のまま優雅な声で挨拶をした。

「ごきげん、よう。珠希先輩——あの、どうしたんですか、こんな時間に」

「それは私の台詞でしょう。恵こそどうしたの。こんな時間に——春先とはいえまだまだ夜風は冷たいんだからこんなことをしていたら風邪を曳いてしまうわよ」

わたしに近付くと先輩は羽織っていたストールを脱いでわたしの肩にかけてくれた。

「あ、ありがとうございます。珠希先輩」

「別に大したことじゃないでしょう。私が少しだけ暖かい格好をしているから、ほんの少しだけ貴女にそれを分け与えただけだもの」

当然というように先輩は毅然と言ったのける。

——わたしなら、無理だ。

自信があるという言い方もおかしいかもしれないけれど、わたしは手をさしのべないだろう。わたしはそんな人間だから。

「それでどうしたの。こんな時間に外に居るなんて。もしかして相

部屋主と折り合いが付かないの？　なんだったら私から話をしてあげてもいいけれど」

「い、いえっ。だ、大丈夫ですっ」

両手を振って結構ですと主張すると先輩はわたしの肩に両手を置いたまま見つめて、

「じゃあどうしたの」

「――その、少しだけ頭を冷やしたいって思ってた……それでちょっと歩き回ろうかなって」

「そう、じゃあ一緒に図書館へいらっしやい。このまま外を歩いていても体を壊してしまうだけになるだろうし」

「図書館……？」

「そうよ。少し時間は遅いけれど図書館は生徒のために遅くまで開放してくれてるの」

それは珍しいシステム、と思ったがよくよく考えたら昼間は通常の授業を受けているんだから、魔法学科は夜にしか出来ないのは当然かも。じゃあ先輩は魔法学科を受けに行ってるのかな。

「不正解。今日はただの予習をしようと思って図書館を借りるの。自室だとすこし集中し辛いから」

そういいながら胸に本を抱えて歩き出す先輩。わたしはその姿をぼうと眺めていると、

「どうしたの？ ほら、行きましよう」と声をかけてくれた。

別段、することがあるわけでもないわたしはその誘いに乗ることにして先輩と一緒に図書館へと向かった。

透明色の吐息、わたしと先輩の吐き出すそれはまるで変わらないというのに。

この慈愛の深さは月よりの高い隔たりがある。

たとえばわたしが三年生になったとき、目の前の先輩のように振る舞えるだろうか。

誰かの力に、なれるのだろうか。

考えれば考えるほど、遠く霞む。

今は遠いせなかを見つめた、すこし早足でその姿を追いかけていった。



図書館の中はもう日はすっかり落ちていているというのにそれなりの人がいた。

流石はお嬢様学校だ。あまり自覚は無かったケド、淑やかな場の空気を感じ取ると嫌が奥でもそんな場所だって思わされる。

そっと音も立てずに立ち上がって、本を上品な仕草で仕舞う。

眼の前で行われる動作、一つ一つが自分より高等だと理解出来るような作法に思わず驚いた。

「恵、こっち」

入り口で呆然と立ち竦むわたしに小さく手招きをする先輩。

慌てて、けれど音を立てないようにわたしは先輩の元へと歩く。皆、静粛に椅子に座って本を読んでいる。

大きなテーブルが入り口からズラリと7、8台並べられて、その奥の大きな空間に処狭しと本棚が整頓され並べられている。それこそ隙間無くみっしりと。

「うわー……すごい蔵書」

「それはそうよ。うちの学院は日本でも有数の蔵書だもの。調べものをするのには適しているのよ」

そういつて入り口のカウンターにいた、シスターに本を手渡す。

二、三言の言葉を交わして再びわたしの前までやってくるとウインクをしてわたしの肩をぽんと叩いた。

「それじゃ、行きましようか、恵」

そう言つて適当な席に案内されてその隣に座る。

周りを見渡してみると、みな黙々と本を読んでいる。

粛々とした空気の中で会話なんて出来るんだろうか。

そんなことを考えているうちに隣の席に先輩が座った。

いつの間にか手にしていた本をテーブルに置くと一冊だけ開く。

「さて、それじゃ——恵、なんでもいいから話をしましょう」

「え？」

「話したくないこともあるでしょう。それは話さなくてもいいの。」

でも吐き出さないと悶々とすることもあるから——恵が話したいことを話せばいいのよ」

すでに先輩は本を読んでいる。ぺらっ、と楚々とした仕草で捲る。人間とは知性の生き物である。言葉を介して他人に己の意志を伝えることが出来る。

言語とは人類が生み出した最も万能の術である。

会話をすることで自己の鬱積したものを吐き出してしまえることもあるって云ってくれてるんだと想う。

力になれるか分からないけれど私に話して多少なりともストレスを解消しなさい、ということ。

コトツ、と硬いものが置かれた音が聞こえて、視線を向ける。珠希先輩が用意していた紅茶だった。

「紅茶、ミルクティは好き？　と言ってもこれしか無いんだけどね」

ゆらっ、と沸き上がる湯気。冷えた軀に浸透しそうだ。先輩の足下に置いた水筒を見る、おそらく持参したものをわたしにくれたんだろう。

「冷めないうちにね。冷えた紅茶なんて美味しくないんだから」

もう一つ用意していた紙コップ。おそらくシスターに貰ったものかな。半分近くコップに満たした紅茶を両手で包み込むように触れながら、わたしに可愛らしいウインクを送ってくれる。

「ありがとうございます、珠希先輩……」

湯気が顔に当たって鼻先が湿る。

それがなにより暖かい。

わたしは意を決して、閉ざそうとしていた想いを先輩にぶつけることにした。

緊張から渴いた口腔を湿らせるため、その液体をゆっくりと口付け流し込む。

渴いた土塊に染みこんでいく心地、ミルクティの甘さで肩の硬直が少しだけ解けたような気がした。

「珠希、先輩——」

「ん、なあに恵」

先輩は顔を上げない。こちらを見ずに相槌を返す。

「なにかをやり直せるとしたら……珠希先輩はやり直したいって思いますか？　そしてやり直しますか？」

なぜか、なぜだか知らないけれど珠希先輩ならわたしの言葉を笑わない、無碍にしないと思えてしまった。

何故かなんてことはわからない、ただこの先輩の持つ密度がわたしをそうさせるのかもしれない。

ぺらっ、と乾いた洋紙の音。「そうねえ」と一言、先輩が呟くとペンを持った手を顎に当てる。

「やり直したいと思うでしょうね。そしてそのためになにかしようとする」

そこまでいうと困ったような喉になにかがつつかえたような表情になって「でも——」と付け加えた。

「きっと、寸前になってやっぱり考え直すと思うわ。やっぱり振り返ってはいけないんだって」

小心者だから——と言って眉を困らせたまま不器用にはにかむ先輩。

「じゃあ——先輩はやり直しはいけないことだって思っているってことですか」

「ううん、そういうわけじゃないわ。やり直せるんだったらやり直したいこともあるけれど……やり直してしまったら今の私ってどうなるんだろうって思うと怖くなるの——たとえば今が不幸だと感じていたとして、やり直した先が幸福だなんて限らないでしょう」

——それは理屈だ。

——わたしはそうは思わない。

「もしかしたらそっちの未来の私はすごく厭な人間かもしれない。そう思うと今がいいって思うんじゃないかなって」

「それは可能性の問題じゃないですか。人はよりよい未来を選ぶ権利があったっていいと思うんです——そのためにもう一度違う道を選ぶ権限だってあっていいじゃないですか」

クスッ、と先輩が子供をあやすような優しい視線でわたしを見る。先ほどもわたしののように紙コップを持ち上げて、液体で喉を潤す。離れるか否かの所で「恵は強いね」と呟いた。

心象を曝かれた気がしてザワザワと胸が締め付けられる。

「私は捨て切れないもの。私自身も大切だけれど他の人達も大好き

だから」

「他の人達の話は今、関係無いじゃないですか」

「いいえ。じゃあ未来を選んだとして選ばれなかった『今』は虐殺されてしまうのよ。それはどう思う？」

思わずその言葉に絶句する。

考えても見なかった認識だった。

そう。違う未来を選ぶということは異なる未来を殺すということ。そして先輩が虐殺という言葉を選んだのは『他の人間の未来』も巻き込んでしまうからということ他ない。

——無意識による殺害行為。未来を変質させるという行為は自然災害で、無自覚の災厄のようなものだ。

言葉を無くしてしまったわたしの表情は珠希先輩にどう見えたのか。

先輩はフツ、と相好を崩して手元のミルクティを見つめた。

「でもね。それでもそんな未来を必要としてるのなら仕方がないんじゃないかな、って私は考えているの」

やさしい手つきで先輩は自分の右手を触れる。今まで気づいていなかったけど右手には手袋を填めている。

その手を慈しむようにゆっくりと触れている。

「絶望の淵にいる人間に、なんて言葉を掛けていいのか——私には分からないもの。人の出来ることなんて、手を握って、抱き合って、愛を交わすことしか出来ないでしょう？」

美しき薔薇が右手を奏でるように触れる。

憂いを滲ませる表情はなにかを悼んでいるように見えた。

それはきつと自分では救えないモノがいるという苦悩。力を持つ故の苦痛なのだろうか。

「――」。――」

そう、深淵では言葉も届かない。行為すら感じられない――光なき牢獄だ。

そしてそこに落ちた人はもう人ではない、人の皮を被った形容しがたい存在なのだから。

「だから徒に否定はしないわ。^{いたすら}ただ肯定もするつもりはないけれどね」

ふう、と色っぽい唇から吐息が漏れる。両手を顎に乗せて目を閉じてそう宣告した。

「先輩のほうがきつと強いです。わたしはそうは考えられない」

わたしはきつと、選ぶ。

その時が訪れようとするならわたしは迷わず行くだろう。ヒト為らぬ領域まで。

だから自分が怖くなる。自分に怯える。

わたしは――闇を見つめている。

「強くないわよ、強がってるだけ。ほんとうの私は誰よりも幼くて弱いんだから」

そうだろうか。わたしにしてみれば珠希先輩は眩しい。闇を見つ

めるものにはこの輝きはとても息苦しく感じてしまうのだ。

触れがたい薔薇、棘に喉を引き裂かれ絶命する姿を幻視した。

「んん」

「……………」

咳払いと沈黙。

一呼吸の後、会話が止まる。なんだかすぐ気まずい空気が充満してわたしは息継ぎも出来ないくらいの重圧に喉をごろごろと鳴らす。

「あ、あのお」

「なに？」

「先輩、右手」

「ああ、これね」

先輩は右手の手袋を撫でるように触れると、その手にペンを持たせた。

「あ……」

まるで掴むことを忘れたようにペンが床に吸い込まれた。

「ご覧の通り。右手は木偶の坊ね。手としての本来の機能は失われているの」

もう一度、落としたペンを握ろうとするが、まるで力が籠もるような様子が無い。小さな震えだけが珠希先輩の必死さを物語っている。

「先輩って、本来は『右利き』……ですか」

「ええ。生まれ付き『右利き』よ」

ふう、と息を吐いて右手を目の前にかざす。

「でもほとんど機能していないわ、感覚だけは切り離さないように処置したけど、生活をする上では右手は棒みたいなものね」

「それって……」

言葉を失う。それは言うまでも無い。

「お察しの通り。多重の魔法手術アナクロにおける後遺症ね」

知っている。日々消えていく魔法の粹を後世に残すため魔法使い達は人体改造にも似た処置を身体中に施すのだと。

それは地獄すら及ばない。いや、地獄すら生温いと吐き捨てるほどの苦難だと聞いた。

身体中に靈針を通し、細胞単位から身体を書き換えるのだ。

魔力を、魔力の通る器官へ——魔術器官コーデックに改造する。

常人ならば狂うであろう所業。人為らざる外法師達は百年にも及ぶ時間を血統強化に務めてきたのだ。

血脈を捨てたわたしが及ぶべくも無い。

「ああ、気にしないで。こう見えて動かないなりの動作とかもちや

んと弁えているのよ」

わたしの痛ましい視線に気がついたのか、珠希先輩は少しだけ声音を弾ませて苦笑を漏らす。

わたしの瞳に写ってる掌はなんの変哲もないように見えた、けれどそこには剣束家を選び得た求道。

——その血統が宿っているのだ。

「辛くなったりしませんか」

「辛かったり苦しかったりは仕方がないじゃない。私たちは生きているんだもの。私は剣束の家に生を受けたのだからその運命を受け入れてるわ」

それはとても悲しい声。憂いと躊躇い——その感情が内混じりになった言葉。

「なによりね。この右手は私にとっての“救い”であり“理由”でもあるから」

「救い、と理由……？」

その手に宿る歴史をわたしは知らない。けれど珠希先輩にとってその右手は命よりも大事なもののだろう。

「大事、なんですね」

わたしは先輩に囁くように言った。
先輩もおだやかに、

「そうね。私にとってこの右手は“絆”だから」

——そして自虐的に笑う珠希先輩。

この時のわたしには先輩の肩に取り憑いていた呪いもその重さも知らなかった。

そしてそのことをわたしが知るのはかなり後のことである。

自らを異貌へ変質させながらも人としての側面を宿し続けるその在り様、そんな生き様。

右手をさも大事そうに抱く珠希先輩の姿はただ、とても儂く、そして美しいと思った。

／

先輩と話した後、私は一足先に帰ることした。

あの静寂の空間に居続けるのがいたたまれなくなってしまうたというのは秘密だ。

とにかく先輩も色々大変なんだ。あの年齢であんな風な表情を作れるということはそれだけの苦悩があったということ。

けしてわたしだけではない、誰もが苦悩し、窒息しそうな世界の中で明日を夢見て生きているのだ。

見上げると煌々と月が輝いている。雲一つ無い綺麗な夜空。

世界はこんなにも壊れかかっているのに、この世界はなぜ美しいのだろうか。

誰かがスイッチを押すだけで忽ち世界は死に絶える。そんな世界だというのに、わたしの前の景色はいつでも綺麗だった。

「バカみたい」

ぽつりと、つぶやく。

だれかの何気ない一言に翻弄されて、右往左往にかけずり回って――多くの人に迷惑を掛けて……。

立ち直ったつもりだと思ってたけど、全然ダメだ。

わたしはなにも変わっていない、あの日のまま。

暗澹あんたんとした気持ちで桜並木通りを歩く。

あの月明かりがわたしの胸中を照らしてくれたらと縋るような気持ちを抱いてみた。

けれど掌は空を切るだけで、その願いは水泡と化していく。

部屋に帰るにしてもまだまだ時間は早い、重苦しい気持ちのままでは杏里さんには逢えない。

いや、もう誰にも逢いたくなかった。

こんな馬鹿げたことを考えてしまうわたしを、

こんなにも愚鈍な自分自身を消し去りたくなってしまふから。

方向性を喪った心と行き先を見いだせない身体。

まるで死霊の徘徊のようにわたしは目的地を示すでもなく夜の学区を歩き続けた。

月明かりだけがわたしの道筋を照らし、遙か先、茫洋と浮かぶカタチへ誘う。

気がつけばわたしは昼間迷い込んだ礼拝堂の近くに立っていた。

「ここは、礼拝堂？」

誰もいないのかやや遠くに見える礼拝堂の窓から光は漏れていない。

誰もいない教会は外から見ただけでもなんだか異質な感じがする。昼間は人の気配、熱を感じるせいもあって、それほど忌避しないが無人の聖堂は人を寄せ付けぬナニカがあるように思えた。

「――？」

なにかが、動いた。

月明かりの届かぬ入り口のためその陰がなんなのか見えない。もぞもぞと正体不明のなにかが蠢いている。

異様。

――それは、人の動きとは思えない。

カサカサと乾いた音、

がしやがしやと硬質な響き、

わたしはのどを鳴らして、それを呆然と眺めている。

その黒陰は忍び込むように礼拝堂の中へぬるり、と入っていく。
おおまがとき

大禍時は当に終わっているというのに、そこには魔が刻に彩られるべき存在がのっぺりとした闇に潜んでいた。

ただ魅入られた。魅入った。

異形、異型――ヒト、では、ナイもの。

わたしはその存在がなんであるか知りたくなってしまっている。

それは忌避すべき感情。普通であれば、得体の知れない怪異に遭遇した者の執る正しき行動は逃避、逃走以外に無い。

けれどわたしは今、恐ろしいほどに魅了されている。

その存在がなんであるかを確かめたいと、願っている。

取り憑かれたように、礼拝堂の前まで歩いていくと遠目にその堂舎の輪郭を双眸で射貫いた。

近づけば余計に礼拝堂内が閑寂かんじやくの空気に包まれていることを肌を感じる。けれど確かにアレは居て――ここへと入っていったのだ。

それだけは確かだ、確定でもないというのにわたしはそれを正し

いと意識的に理解している。

ドクン、ドクン。

心拍数が振り切れそうなくらい跳ね上がって五月蠅い。呼吸を置いてきたように脈拍だけが回転して息が詰まりそうだ。

ともすれば胸腔を突き破ってしまいそうな心臓を掌で制すように握りしめながら一步、また一步と未知の扉へと歩み寄る。

ナニカが居た、

不明のナニカがわたしの前にいたのだ。

瞳孔に焼き付いた黒い影はわたしの沈み込んだ深淵に一滴のしずくとなって染み渡る。

この世界より外れた異形がそこに存在する。

目の前に正気を破る狂気がある。

ドクン、ドクン。

はっはっ、と犬みたいに吐き出す息が生暖かい。

シンとした寒さが脳髓までも侵入してわたしの感覚を鈍らせているのではないかとも錯覚した。

なにより、この世為らざる異臭。

その目の前にいるかもしれない自分に異常な高揚感が包み込んでいた。

——ふと濃厚な血の匂いがした、気がする。

わたしはノブに手を掛け、意を決したように禁忌の扉を開け放つ

——！

「恵さん？」

「ひゃわっ」

冷たいドアノブに触れたや刹那、背後からわたしの肩に手がそつと置かれた。

その声と繊細な指先に飛び上がりそうなくらい驚いて乙女とは思えぬような声をあげると、思わず振り返りながら一步跳び退いた。

「……杏里さ、ん……?」

そこにはパチクリ、と目をまん丸くして不思議な生物を観察するような杏里さんの顔があった。

姿勢はわたしの肩に触れたままの状態で硬直している。少し驚いたのだろう、たらっ、と冷や汗が頬を伝っている。

「はぁ……あまりに恵さんが遅いので迎えにと。なんだか驚かせてしまったみたいでごめんなさい」

「うっ、ううん！　だ、大丈夫っぜんっぜん、びっくりしてなんか
ないからっ」

両手を大げさに振って驚いていないことを全面に押し出すが、それが逆効果になるということをわたしは理解していない。

「そう、ですか、ならいいんですけど」

それだけ言うと杏里さんは固まった姿勢を正し、わたしの方に真面目な顔を向けた。

「恵さん。さっきは言い過ぎました。それを謝りたくて恵さんを探していたんです」

「ああ——うん、悪いのはわたし、常識的に考えれば杏里さんの考えは間違っていないもん。ただ正しすぎたから悔しかったただけなんだと思う」

そう、常識に適した考えを持っていたならきつとそんな不健全な考えなど持ちようがない。

逸脱した思考をするモノはやはり逸脱した者のみなのだ。

「——疲れてるんですよ、恵さん。新生活だってこともありますし、少しだけナイーブになっているだけだと思います。心配しなくとも時間が解決してくれますから」

こんな時でも杏里さんはわたしに優しい。わたしにとってそれはとても苦しい——まるで臓腑を素手で握りつぶされているようにキリキリと痛む。

「——うん」

押し殺した声で答える。

そうじゃない。わたしは——ヒトデナシなんだ。

そう叫ぶ言葉を飲み込んで一つだけわたしは頷いた。

「なんか今日は杏里さんに迷惑をかけてばっかだね。本当にごめんね。——わたし……」

「恵さんっ」

「は、はい？」

「――迷惑かどうかは当人の裁量です」

「……？」

「勝手に私の気持ちを奪わないで欲しいの」

わたしの瞳を注視したまま杏里さんが真摯な声を漏らした。

その言葉にわたしは疑問の表情を顕にした。

それを見ると杏里さんは一つ髪を揺らして静かに紡ぎ始める。

「たとえば、ある善人が善行を行ったとして、それは誰しもにとって善意になるわけじゃないですよね」

「え、善意は善意じゃないのかな……？」

「それは一面でしかありません。たとえその人の行動悉くが善行であったとしても誰かとして見れば悪行である可能性はあります。このように感情とは必ず大きく分類するなら二面の顔を持っているわけです」

「善意に類する悪意、悪意に類する善意ってコト？」

「善人が気まぐれに行った悪意こそ、とある人間にとって善意とすることだってあります。――だから人の心は鏡じゃありません。光と陰がある透明な硝子のようなものなんです」

生まれついた悪人が気まぐれに齎す善行がある。

神の申し子のごとき善人が図らず起こす悪行がある。
では——この世界の正しさってなんだろう？

「だからこそ、他人の気持ちを勝手に計ることは間違いだと思うんです」

「つまり……人の感情を勝手に推し量るなってこと？」

「はい、私の感情は飽くまで私だけのものです。いくら見知った人間であろうとも私の感情を付度する権利はありません」

自分の気持ちは飽くまで自分だけのもの、他人に解せるものではないと彼女は言った。

「——なんとなく……わかるけど、けどどうしてそんな話をするわけ？」

「ですから、」

はあ、と一つため息。わたしの巡りの鈍さに漏れる嘆息なんだろう。

「恵さんを疎ましいなんて感じたことなんて一度たりともありません。私は恵さんのことを気に入っていますし——それ以上にもっとあなたのことを知りたいと思っています」

そこまで言って、腰に手を当てると、

「だからそんな寂しいこと二度と言わないでください。じゃなきゃ次は本当に怒りますから」

と、わたしに言い聞かせるように言った。

「――」。」

「いいですね、恵さん」

もう一度、当惑するわたしに対して決然とそう言い切った。

「う、うんっありがとう、杏里さん。あのその……色々迷惑かけて」

「恵さん」

「あ、あはははっ、ごめ――じゃなかった。うんっ」

ダメだしの言葉にあわてて言葉を選ぶ。だけど上手な言葉が浮かんでこなくて誤魔化すように頷くだけ。それでも杏里さんは優しく笑ってくれた。

氷解する。心のしこりがそんな言葉で解けていくのを感じた。
何気ない、本当に何気ないことだっていうのにそれがなにより嬉しい。

ああ、小難しいことじゃないんだ、わたしが欲しがってた言葉は……。

ちよっただけ溢れ出そうな涙を堪えながら笑ってる杏里さんに笑顔を返した。

ほんの少しだけでもその気持ちに沿えるように、優しさの欠片でも返せたらと願うように。

閑寂の礼拝堂に陽気な笑い声が響いた。

それはきつと。

「おや、こんな時間に生徒が出歩いているとは……どういふことでしょうか」

ゾゾ、と背筋を這い巡るような低温な声音。振り返ると大きな影。いや、影じゃない。これは人。のそりと細長い瘦軀は一度あったことがある。そう――

『あなたの、こころに巢食う闇を救ってあげよう、鹿島恵くん』

奥底に保管されていた言葉が黄泉還る^{フラッシュ}《バック》。

「ごきげんよう、シャザール先生。勉学の熱を発散しようと夜風を楽しんでいますわ」

わたしが振り向くより早く杏里さんが、そののっそりとした影に向かつて答えた。

「ご、ごきげんよ……シャザール先生」

わたしもそれに習い、怖ず怖ずと振り返ってその瘦軀に挨拶を返した。

「ごきげんよう、天使たち。話は了解したのだが――主の御座す^{おわ}教会の前で涼むというのは関心せぬな」

「失礼しました。わたくしが恵さんに無理を言ってここに来たいと

云ったのです」

「それは何故なにゆえかね。このような辺鄙へんぴな場所に訪れる用など無きよう
思えるが」

「此処に在らされる『聖体』を確かめに」

ザワツ……と急に空気が濃密に染まる。

なにが起こったのかわたしには理解できない。

まるでその言葉自体に強力な力でも籠もっているかのように空気の質が変化した。

息すら吐けないほど重圧。肌がヒリヒリと痛んで張り裂けてしま
いそのような感触が全身を満たす。

「……………ああ、悠生くんともあろうものが、あのような妄言を信
じているとは。哄笑の的になってしまうではないかね」

「私は自己の目で噂が虚言か事実まじこかを確かめようと来たんですよ。
そして結果ではなく過程にこそ意味があるというのが私の持論です」

鼻で笑うような態度の先生に毅然とした態度で言葉を返す杏里さ
ん。

「なるほど。行動にこそ本質がある、と。だが世界は結果こそが真
理ではないかな？ その過程が如何に素晴らしかろうがそれらは唾
棄すべき滓であると」

「結果だけがすべてだとおっしゃるでしたら——今日までの主の
御心はすべて虚栄のものであったということになります」

きっぱりと、神の足下で許されざる言葉は吐き捨てた。

「杏里さん……」

月光の悪戯か。月陰りに阻まれシャザール先生の表情は覗えない。ただ強張るような声音で絞り出されるように言葉をこぼす。

「悠生くん……その発言は此所^{このば}で在ることを意図してのことかね」

重く、胃の内容物を吐き出すかのようにシャザール先生は杏里さんに言った。

その低く響く声は殊更に夜気を浴びて低く通る。
まるで怒気を孕んでいるように。

「結果だけで捉えるのでしたら、主は利権と時代に遺棄された愚者でしかありません。——主を大いなる子にせしめているのはその行程ではないでしょうか」

心の中でなにかがカチリ、と音を立てたような気がする。そうだ、わたしの違和感はそれなのだ。

わたしが、かの主とやらを敬えないのは、その結果を知っているから……。

否定され、冒瀆され、裏切られ、それでもなお神を啓じた彼だからこそ信仰されているのではないか。

その美しさこそ、信仰——そもそも信仰に結果はない。

あるのは永遠に続く信心の祈り、敬うという過程のみしかない。
だからわたしは『無いもの』に祈りを捧げることができないんだ。
先生は一度喉を鳴らす。

「……先の発言は不問としよう」

と、発言の意図も意味も問わずに切り捨てた。

「悠生くん。そもそも神に疑問を抱くことこそナンセンスです。リ
ユウなど己の内で作ればよい」

そこまでいって胸に手を当てると、

「疑念、疑惑こそ悪魔の甘言。一切を捨てることで無心の祈りに辿
り着くのだ」

そこで言葉を切ると「それこそが我ら信徒の至高である」と付け
加えた。

杏里さんかというと、その発言を気にした様子もなく、腰に手を
当てたまま聞いているのか聞いていないかのように先生を注視して
いた。

「――ただ、事実のみを述べるのであれば此処にその『聖体』とや
らはない」

杏里さんの発言がないことで、肯定と捉えたのか続けざまに先ほ
どの噂話とやらを否定する。

「無いものは無い。こればかりは悠生嬢とて過程がどうとも言えぬ
だろう。0という数値には過程などという言葉すら意味がない」

「本当はない、んですか……?」

忘れられそうなたしが間に割って入るよう言った。そもそもそ
の『聖体』とやらがなんなのかすらわたしは知らないんだけど。

「うむ、安置するのであればここではなく大聖堂のほうだろう。ここに安置する意味はない」

頷く先生。それを見つめていた杏里さんも暫し沈黙を守って、やがてひとつ頷く。

「そうですね。ここの管理をなされているシャザール先生が無いと仰るのですからきつと無いのでしょうか」

「ええ、悠木くん。察しが良くて助かる。それにキミたちの本分は勉強だ。そのような浮ついた話にフラフラとしてるのは良く無いな」

そういうと片手に携えていた、厚めの書籍を胸の前にあげて開く。

「もし迷いがあるのならば聖書を読みなさい。答えは聖書の中にある」

そう言っただけと乾いた音を立て本を畳む。そのまま杏里さんに手渡して、

「真理はすべてこの中に――」と言った。

「ありがとうございます、シャザール先生」

杏里さんは聖書を両手で受け取るとニッコリとほほえみを漏らした。

「時に運命とは残酷を強いる。だがそのような時こそ己が信仰が試される場だ。キミたちは悩み、大いに邁進するがいい――若いということはそういうものだ」

「とても為になるお言葉だと思います。流石はシャザール先生ですね、私も恵さんもいたく感銘を受けました」

白々《しらじら》しいとは思いますが、この場で指摘する人間はいない。

この場の視線は金髪の美少女に独占している。

「私もシャザール先生のように強い信仰を以て、真理の意志を手に入れられるように邁進したいと思います」

それだけ言うと、彼女は深々と頭を下げた。
それを見てわたしも習い、慌てて頭を下げる。

「今宵も冷えてきました。私と恵さんはこれにて失礼します。」

そこでシャザール先生に「ごきげんよう」と別れの挨拶をすると可憐な様子で背を向ける。

暫し、その所作に見蕩れてしまいつつ、

「い、ごごっごきげんようっ」

ハッと正気にかえると纏れるように挨拶をしてとその場を後にした。

ただ、あの時の影が頭の片隅にこびり付いてる。
あれはなんだったのか。

人間為らざる異形。

無念なことに、今日も熟睡ぐっすりとはいかないらしい。
わたしの前途は波乱含みと決められているのだろうか。

そんな悪態などが思い浮かぶだけ心は浮かんでいるのだろう、そんな風に自身を持ち上げて杏里さんの後ろ姿を追いかけたのだった。

礼拝堂の悪魔（後書き）

作品で登場する個人、団体は創作です。

主義、主張、宗教、設定等は現実に則さないものがあることを留意
お願いします。

誤字脱字などあれば報告していただけると助かります。

黄金の聖者と黒き聖母

「やほーごきげんようめぐっぺ」

「ごきげんよう、あすみん」

次の日、いつものように登校して学校へ。

今日もあの影のことばかりが脳裏に焼き付いていて起床が遅れてしまった。

当然のことだけど杏里さんは先に登校してしまっている。

規則正しい生活をしているのだろう、わたしとはつくづく正反對の人間なんだなーなんて思ってみたりしつつ、いつも通り教室に入って自分の席に付いた途端、もう恒例のようにあすみんの挨拶だ。わたしは元気な挨拶に應えるとそのまま「ふわ〜」っと乙女力の足りない大あくびをしてしまった。

「おやや、なんだか眠そうだねえ」

「お、うん……ちよつと寝付きが悪くってね」

「ふむ、不眠症かい。いけないねえ。いい薬ありますぜ、おぜうさん」

「間に合ってま〜す。ふわわあ〜」

目を擦りつつ、ぼそぼそとそう言う。

あの後、どうも影ばかりが過ぎり眠れなかった。

あのまま眠ってしまうとあの光景が夢にでてくるんじゃないかと気が気がなかったくらい。

まるで恋に恋する乙女みたい。

けどその対象はこの世為らざるものという偏狂ぶりですが。

あの瞬間、たしかにわたしは普通ではなかった。

平常の判断力を失っていた。普段ならあんな場所へ踏み込もうなんて考えもしないはずなのにどうしてあんな場所に惹かれたのだろう。

机に前のめりになって「うゝゝゝ」っとうなってみる。

「グロッキー状態じゃん、めぐっぺ。一学期始まったばっかなのに大丈夫？　めぐっぺが失踪するとかマジ勘弁だよ」

失踪……その言葉が耳に刺さってなにかが頭の中でざわめく。

「……失踪？」

「一昨日話してたじゃん。生徒が次々に失踪してるゝって」

「ああ」

そう言われてみればそんな話をしたような気がする。

七不思議のひとつ、生徒が消えてしまう怪。そんな話だったはず。ここ最近の事態があまりに濃密でちよつと前の出来事でも随分前の話に感じてしまうのはなんだか歳を取ったみたいだなあ。

机に突っ伏したまま、昨日の焼き付いた記憶が蘇り、失踪事件という符号が重なる。

——もしかして……？

「文屋はまだそんなデタラメ話を吹聴してるわけ？」

声のするほうを見る。

その少し下に視線を移す。

「ゴラ。今、目線を変えなかった？」

『気のせいです』

ふたりでタイミングばっちりでハモリながらカナちゃんのほうを見る。

「あ、そう。ごきげんよう、ふたりとも。それとデタラメ話をまき散らさないでくれる。聖徒会が迷惑するから」

ふんすつ、と息荒く胸を張って言う。

「カナちゃん。聖徒会も迷惑してるの？」

「トーゼンよ。生徒たちが不安がってるから声明を出さなきゃいけないし。これも全部有ること無いこと書き散らす壊れたスピーカーもどきのせいね」

「はっはっはっ、褒めるなよ、生徒が見てる」

「誉めてねえ！」

もう熟練した夫婦漫才のごとくふたりの息はぴったりだ。やっぱ

りこのふたり、すごく仲がいい。

「でもねー、事実かどうかなんてものはあたしが判断することじゃないんだよカナちゃん。それを選定するのは飽くまで大衆なんだもん」

「まー言いたいことはわかってるわよ、受け取る側のリテラシーってことでしょうが。だからって有象無象の情報を垂れ流している権利はどうなの」

腕組みをするとあすみんは口を猫のようにして笑う。

「あたしに問われるのは読み物としての価値だけだもん。読み物としてゴミクズであれば誰も見向きしないでしょ」

「あっ……そっかー。それだけ見てる人が多いってことか」

「だからこそ、情報を流す側がモラルを持ちなさいって話をしてるんでしょう。ペンは剣より強し——タガの外れた情報は如何なる凶器よりも危険だって留意しなさいよ」

「はいはい、分かってるってば。んもう相変わらずうっさいなー、カナちゃんは」

幾度と無く交わされているやりとりなんだろう。

これは偏りかける意識をニュートラルに戻すための修正作業のよなもの——カナちゃんからあすみんに対する敬意の現れなんだろう。

「——」。――

けれどふたりの話を余所にわたしの意識は違う方ばかりを見ていた。

すこしばかり、興奮している。

もしわたしの推理が正しいのならあの礼拝堂と事件になんらかの接点があるということ。

いつものわたしならば考えもしない決断。

あの礼拝堂にまた訪れてみようという決意。

正常な判断ではないと思いつながら高揚した意識はそれらの要素を遮断する。

あとにして思えば、

——わたしは愚か者だった。

／

昨日と同じ時間まで図書館で時間を潰す。

自室に帰ると杏里さんが外に出させてくれない畏れもある。

そもそも連日夜間外出になるとシスターアナスタシアの逆鱗に触れそうだというのもあるからだ。

どちらにしても激怒されるのならやるだけのことしてから怒られようという覚悟の元、わたしは図書館で時間を費やした。

この行動力、もっとほかのことに費やせばとも言われそうだけ

ど、この時のわたしはなにか不思議な力に後押しされるように真実らしきモノへ向かって邁進していた。

それこそ暴走機関車のように、歯車の軋みに耳をふさいだまま――。

周りを見渡すと知らない生徒ばかり、胸元のリボンを見るかぎり一年から三年の生徒が満遍なく利用しているみたい。

ただテーブルに座ってるだけっていうのも暇だし、かといってなんだか難しい洋書がズラリと並んでる本棚を見ると気後れしてしまう。

こんなのをいつも珠希先輩は読んでるのかあ。

告白しよう。わたしは読書が好きではないです。

なので人を殴り殺せそうなほど厚くて重い書物などを見ると、それだけで眠気が襲ってくる。

悩みぬいた末、『ハイペリオン』という本を手にとって机に戻るとそれを読む――努力はした。

結果としては言うまでもないだろう、せめて翻訳くらいはしてくれてもいいよねっ。

――小休止。

結局図書館にやってきたものの大した時間潰しにならず、元々眠かった圧してそのまま机で眠ってしまった。

司書さんに肩を叩かれて起きたのはすっかり夜も更けた時間。

頬にしっかりと書物の形を刻み込んだ間抜け面は知り合いに見られたら向こう一年はネタにされただろう、なんてことを思う。

ボサボサの髪をトイレで整えるだけの時間を待ってもらうと、閉館前に滑りこむように飛び出した。

外に出ると春先の微妙な寒気が、寝起きの低体温にシンと沁みて身体を抱きしめて小さく震えた。

思ったより寒くないな、と考えてるとどうも自分の容姿がいつも

と違うことに気がつく。

肩に春先物の純白ガウンが掛けられていたのだ。

——誰が掛けてくれたのかわからないけど、なんだかとても暖かい。

そう思いつつ、図書館前を後にしたわたしはその足で先日の礼拝堂へ向かった。

別に誰に隠れるわけではないけど、こういう静寂の空間に包まれると音を立てるのが憚られるのはなんでだろう。

月明かりだけ差し込む礼拝堂は昨日とまったく変わらない。まるで時が止まったかのようにそこに在り続ける。

月の光は礼拝堂の陰影を色濃く写し、より異質な空間であることをわたしに見せつけている。

ひとまず周囲を見渡してみるが、昨日のような気配も影もない。ぽつんと、礼拝堂と相対して立つわたしだけが月から見下ろされている形になる。

今更だけど草影にとか潜んで様子を伺っていたほうが良かったんじゃないだろうかと考える。だけどその弱気を打ち消すように大げさに首を振った。

もし異形のもものが居たとしたら、わたしの隠遁なんて容易に看破するだろう。

小細工するだけ時間の無駄なのだ。

「——よし！」

恐怖を胸の内で握りつぶすように一喝すると、一步踏み出して——また躊躇いながらまた一步踏み出す。

ある程度まで歩いていく。緊張と焦れに意識が奪われて、躊躇が足を重く鈍らせる。

そんな吹っ切るように、わたしは一気にの走り抜けると巨大な扉

の前で立ち止まった。

「はあっはあっ、はあっ……ふう」

ドクン、ドクン。

運動ともいえぬような距離だと言うのにまるで百メートルを全力疾走したような疲労感。

恐らく居る訳がないと理解していながら、もし見つかったらどうなるのか——という思考が脳の芯で危険を訴えかけ、わたしの動作を鈍化させているのかもしれない。

ドクン、ドクン。

昨日は開けなかった重い扉、それが今また目の前にあった。

わたしの感が正しいのなら、この扉の先に真実がある。

ここを開けばすべてが解る、はず。

なぜかわたしはそう確信している。

誰よりも闇の匂いを感じ取ってしまう、生まれ付きの本能のなせる業だろうか。

息が荒い。

もし、

向こう側に化物がいるなら、

わたしの息吹を既に感じ取っているはず。

生者の息吹を、その生命の鼓動を認知しているはずだ。

手をかけたドアノブがまるで氷を握ったように冷たくて、指先が一瞬で冷え込む。

「はあ、はあはあ……」

開けば、ハネる。

わたしの認識の外にある世界が、
今ある現実を食い尽くす。

開け、

開け、

開け、

声がした。

脳の裏側で囁くような声を聞いた。

不思議と心地よい、

わたしはノブをゆっくりと回す。

カチリ、と留め金がハネる音がする。

一度だけ空を見上げた。

赤く、紅い月が燦々と輝いて、星の瞬きすら奪いさつていく。

寄り添うものは無く、月光は血のように紅で地を染める。くれない

月は限りなく、孤高だ――。

そんな感傷に浸りながらわたしは目の前の扉に手を掛けて思い切り開い――

「――え？」

スウ、と

違和感が走る。

突如、背後の月が消失した。

月が陰る、喪われる。

否、それは間違いだ。

わたしが背負う月明かりは何者かによって遮られたのだ。

それは――、

くも、

「あ……」

ぷつん、と糸が切れるみたいにわたしの思考も断線する。

消え往く意識の淵、僅かに浮かんだ風景はあまりにも曖昧だ。

——くもの仕業……。

そう、心が断じた時。

わたしの最後の光景はそのまま闇の淵へと沈んでいった。

／

この世界にも息吹があるんだよ、めぐみ

安らぐような優しいコエ。

その声を聞いているだけでわたしの心に平穏が訪れた。

頬にかかる髪を彼女が払う、ほのかに香る甘い香りがわたしの胸をくすぐった。

薄桃色の唇から、彼女の物語を聞いてわたしは母に抱かれた。

その川のせせらぎのような言葉ひとつひとつにわたしの魂は魅了された。

夕焼け——

本を開いて、彼女のこえに耳をかたむける日々。

彼女の語る物語はわたしを異世界へと誘った。
彼女の記す物語はわたしを未知へと導いた。

幾度も、
幾重も、

数百の夜を越えた、ふたりだけで過ごしたあの優しい世界。

なにもいらなかった、

あそこにわたしの総てがあったから。

傷つけるだけの世界、傷を嘗めあうだけの世界。 欺瞞や猜疑で

この世界はゆるやかに窒息していたのに、

彼女といればそれも忘れられた。

生きるという自傷活動ですら彼女との時間で忘却の淵へ廃棄された。

わたしにとって彼女は神聖で清廉で、ほんとうに救世主のような存在だったのだ。

忘れえぬ幻想の日々、

彼女と供に過ごし、

彼女と供に語り、

彼女と供に生きた。

キラキラとまばゆい世界。

——それはユメのような、毎日——

。。
。
。
。
。

「かすみ、ちゃん……」

唇が沸き上がる記憶をたどり、自分があの日々の中で一番口に上らせていた名前を再現する。

それは無意識に、無自覚に——刻みつけられた魂が発露した言葉だった。

はらり、とわたしの頬を涙が伝う。

それは漆黒の地に墜ちて、はかなく霧散した。

「ん、う……………」

前後不覚。這い上がってきた意識、それに呼応するように冬の空気を残す寒気が冷え切った身体を苛んだ。

身体の芯を抜けるような寒さに、ぶるつと身体が瘡おこりを煩ったように震える。

まず頭に過ぎる意識は凍え。

春も盛りに差し掛かろうとする中、いまだに寒さを残した大気はわたしの身体を氷のように凍て付かせている。

すっかりと冷え切った身体は所々感覚が鈍い。

指を動かすだけでも、血の巡りの悪い五指は出来の悪いロボットみたいに痺れて満足に動作しない。

ここに来て、ようやく意識の水位が状況把握の域まで浮上する。

しかし自分が今までなにをしていたのか思い出せない。

身体の状態から察するに、少なくともベッドの中ではないことは確かだ。

もしかしたら勉強をしてたまま、うつらうつらと眠ってしまったのかな。

いや、違う――

自分の脳裏にはない記憶故にその判断を打ち消す。　そもそも――わたしはなにをしていたのだろう？

たしか……なにかを確かめようとして……。

そう、図書館で時間を潰して――礼拝堂の影を――。

「目覚めたかね」

「――えっ……ヒイツ！」

うつすらと浮かび上がり始めた意識に冷水をぶっかけられるように低い声。

目を開くとそこには痩躯の男の顔が眼前にあった。

「シャ、シャザール……せんせ……い」

「鹿島くん、君の心は穏やかだろうか」

ぐるう、と喉を鳴らすような低温の声音。暗闇の中でその響きだけが静謐の空間を満たしていく。

「な、なんの話、ですか！　――えっ……？」

身体をよじって逃げようとするが身体が動かない。

その時点で、ようやく自分の置かれている状況に気が付いた。

——張り付けにされている!?

張り付け。まるでかの救世主のように十字架に身体を括りつけられている。

手足を見るがロープやそういった類のものではない。だがどんなに力を加えようと、けして千切れも解けもしない。

しっかりとわたしの身体を括りつけて尚、けして解けぬ強度を持つ糸。

「せ、せんせっ……これど、どういふことなんですか!」

足掻く、足を手を必死に動かし、腕を揺らし藻掻く——が、一寸も緩む気配がない。

むしろよりきつく食い込んでしまい、手足を締め付けて痛みを発する。

「安心したまえ。私は君に危害は加えるつもりはない」

必死に藻掻いて糸を千切ろうと奮闘するわたしを嘲笑うかのよう
にシャザール先生は微笑みをこぼす。

そして「いや、むしろ——」と言うと、

「鹿島くん……私は君を救いにきたのだよ」

この状況にあまりにも適さない言葉、それをわたしに刻みつける
ように発する。

「す、救うって、なんの話ですか……」

その言葉に反論するように、つい先生のほうを凝視してしまった。

そう、そもそも背丈の高いシャザール先生といえども、張り付けにされているわたしと同じ立ち位置にいるのはおかしい。暗雲に隠された月が解け、その輪郭を浮かび上がらせる。

その姿は、異形。――人成らざる造形を持った異型の生物。

身体、下半身は巨大な蜘蛛。斑の色をして月明かりの反射から硬質な肌を光らせている。

ゾクウ、と全身が泡立ち、思考が恐怖に裏返る。

カシャカシャと甲殻の渴いた音が響いて、この世界に在らざるものがわたしの目前在ることを見せ示している。

「――ヒィィ……あ、あ……あっ……」

叫び声をあげようとしたが声すら漏れぬほど恐怖が全身を麻痺させる。そう本当の恐怖に遭遇した人間ならば叫び声すらあげることができない。

人である限り、闇の狂気には抗うことは出来ないのだ。

脳から足先、声門ですら形と化した恐怖で動作することを拒否してしまう。

けして真闇には抗えない。

「あ、が……は、あ、はっ……」

心臓すら恐怖で停止しかけると、呼吸すらも危うい。

言葉も浮かんでこず、目の前の恐怖の対象から逃れられない。

「――落ち着くのだ。鹿島くん。この姿は不自然なものではない」

「あ、は……ふ、ど、こが……です、か……」

言葉をなんとか浮かび上がらせて、弱々しく反論を捻り出す。そ

の言葉に先生は歪むように笑みを浮かべる。

「むしろこのほうが自然なのだよ。人類はサガを断ち切りすぎた。いいかね、鹿島くん。人は獣だ」

「け、……も……の？」

「そう、間違っただけじゃない。いくら火を手にいれ、叡智を獲得し、情念を培い、己のサガを薙ぎ払おうとも——」

——人は元来、獣なのだ。と男はわたしに甘く囁いた。

「それが本質。愛や文明、文化などで己のサガを覆い隠そうともその本質は隠しきれぬ——一度、皮剥いでやれば人はその本性に立ち戻るのだよ」

「人の本性……」

ぞわっと、全身の恐怖が弛緩していく。

恐怖ではなく、まるで逆返るような法悦が足先から這いあがり背筋を甘く甘く濡らしていく。

「そう。人とは獣。故に私の姿は人があるべき姿と言ってもいいのだ」

三日月のような笑み、ギリッと鋭い歯列が軋む音が耳に届く。

わたしはただ先生の漆黒の瞳に魅了されている。

「この下らぬ世界においての真実、唯一の真理——それを手にすれば君も心穏やかになれるのだ」

「……穏や、か？」

「そう、安寧だ。鹿島くん、君にとってこの世界は——どう写っているのかな」

「そ、それは——」

強者が弱者の肝を喰らう地獄のような世界。

与えられる優しさすら欺瞞と猜疑に満ち満ちている塵芥のような現世。

憎悪で世界は満たされ、余命幾ばくもない溺死しそうな魔界。
アナザーワールド

「——じご、く……」

「然様——この世界は地獄に等しい。謀略と暴力の蔓延、規律の崩壊、ともすれば近しい隣人として明日は敵かもしれぬ邪悪な世界」

カシャ、と甲殻の足が床を這う。その異音すらわたしの耳には遠い残響でしかない。

「私たちに与えられた衣こそが我らを苦痛たらしめる刃——故に」
囁きは続く。わたしの心をはぎ取る、剥奪する。人の意識を削り奪う

「——脱ぎ捨てねばならぬ。我らは原初に立ち返り、起源となる姿へと先祖帰りする。衣を捨て去り一匹の獣へとなるのだ」

目蓋が重い——わたしの唇が震える。なにかを吐き出そうと。
——それはとても甘美で、

「さあ、鹿島恵——己^{ひと}足る鎧^{こころう}を捨て、己^{おの}が原初^{ただしき}の姿^{かいい}を取り戻すのだ」
波紋^{こだま}す声は遠く、そして遙かに高く——
わたしの意識はもう此所^{こゝ}には無い、
あるのは本能と闘争心、
いっぴきのケモノ、

わたしという個体は今宵、崩壊^{しはたつ}し、一個の新生 《さいせい》を
果たす。

トワヘクオンへ、エイゴウへ——
わたしの1つは全に加わる。

「わたしを……神父——わたしを………」

「そう、謳^{うた}いたまえ。死狂う賛美歌を——」

神父の両手が振り上げられる。それはこの淫らな劇場の大団円。
わたしという魔物の生誕を祝う終止符。

「わた、しは………」

わたしが墮落の言葉を喉元から溢そうとした時、
なにかが空を切る音が、音も無い礼拝堂に響いた。

それは認識するよりも早く、シャザール先生に迫り、その身ゴト
の顔面に追突した。

スパンッ、と乾いた音がその衝撃の強さを物語ってた。

「——ッ。」

間隙を縫うような痛みにはんの一瞬だがシャザール先生の顔が醜く歪む。

払う間も無く、激突により慣性を失ったそれはゆっくりと地面に落ちた。

落ちたそれは静寂の空間に渴いた音を残して二度、三度跳ねて、運動を終える。

わたしはそれを見たことがある……あれは昨日の夜……他でもないシャザール先生より手渡された聖書。

そう、エリシオン女学院の名を刻んだ聖書だ。もちろんこんなものがこんな化け物に傷を与えるわけもなく、ほんの僅か躊躇いを生んだだけだった。

「ク——何者か」

月明かりだけの空間は暗闇に支配されている。投げた方向から察するように先生が懺悔室のほうを振り返ってそう言った。

——月が傾く。

「流石はシャザール先生ですね。確かに答えは此処にありました」

コツ……コツ……。

時が止まったような礼拝堂チャペルを満たすような足音アレクロ。

リン、と聖鐘キャロルが響くような声音ソプラノに魅入られる。

颯爽と、この静謐の支配者が暗闇から姿を現す。

そう、わたしはその涼やかな声を知っている。

「悠生——杏里——」

わたしがその名前を呼ぶより早く、先生がその名前を呻くような呟いた。

「ごきげんよう、シャザール先生。随分と様子が変わられていますがお加減は如何でしょうか？」

ステンドグラスに照らされたその姿は可憐にして、妖艶。

恭しくスカートの裾を摘むと淑女らしい態度で先生に頭を垂れた。

「……悠生杏里。何故、キミがここにいいのかね。いやーそもそも、貴様は《・》誰だ《・》」

探るように、シャザール先生——いや獣が睨め付ける。

杏里さんは歩みを止めることもなく、優雅にわたしと獣の前まで近づいてくる。

「あら、真理を知られるシャザール先生が異なることを仰いますね。私は飽くまで私です。その当人を前にして——誰とは」

一步、歩み寄る。

目を閉じて、金絹のような長い髪を手のひらですくい上げて跳ねた。

キラキラと光の粒子が舞い、その美しさを誇張する。

「——間抜けか、テメエは」

は——？

腕組みをして、わたしたちの存在など完全に無視したように横切ると祭壇の机にトンっと座る。

背後にいるわたしなんてお構い無しのように座り込んで、わたし達の間割り込んだ。

月の光が差し込む。少女の表情をくつきりとその正体を暴きだした。

——笑ってる。

ただ笑ってるんじゃない。いつもわたしが見ていた天使のような可憐な微笑みではない。もっと傲慢不遜、相手を見下すような視線。まるで人を人と思わぬような蔑みの瞳。

その双眸がシャザール先生である獣を射貫くように見つめている。

「ハッ……先生さんよ。いくらなんでもバレバレだろ。結界を張っているとはいえ、好き放題やらかしすぎだ。——思春期のクソガキだってもうちつとマシな場所に隠すぜ」

組んだ足の膝に肘を置き、頬杖をつくと呆れた言わんばかりの大きな溜息を吐く。

ひらりと手を片手をあげて小馬鹿にしたように振るった。

「まっ、組まれた術式は高度なもんだが、それを扱うヤツが低脳だとなんの意味もないっていう典型」

ザワ、と空気が凍てつく。

それは怒り——杏里さん？の挑発にこのバケモノの感情が火と燃えた。

「アンタは自由やらかし過ぎた。足が付いたんだよ。派手にやらかすってのは悪い趣向じゃねエが——アンタは行き過ぎたんだよ」

口端を大胆に歪める。

挑発的で、そしてなにより邪悪な笑い方。

「聖徒会の奴らだって気付いてたんだ。もうアンタもお終い」

小馬鹿にするように肩を竦める。

「――破滅だ」

「ククク……可笑しなジョークだ。小娘、たしかにこの術式を看破したことは褒めてやる。が、あまり図に乗るものではない。自分の置かれてる状況をよく把握しろ。貴様の脳漿を蹴散らされたくなくばな」

その言葉に「はっ」――とまた芝居じみた嘆息。

「――囀るなよ、ド低脳」

礼拝堂に響きわたる低い声。まるで死刑宣告を告げる審判者のように冷徹な言葉でバケモノをなじった。

「こんな狭苦しい場所で自分の好きやって、万能感に洗脳されてる輩が言うことか。勘違いするなよ、小悪党。オレが追い詰められてるんじゃないエ。――追い詰められてるのはテメエだ」

わたしが知る杏里さんの口からは溢れ無いような悪意。圧倒的な罵詈雑言の挑発で獣を威嚇する。

「よく云ったものだ。矮小な人間が我らを愚弄するか、片腹痛いぞ悠生杏里。貴様は生かしたまま血袋にしてやる手筈だったが――気が変わった」

——ここで死ね、と獣が剥き出しの殺意を露わにする。

「殺りたきやさっさと殺れよ」

まるでこの切迫した状況を楽しんでいるように、構えることもなく彼女は悪魔のように微笑んだ。

その時だ、そんな有り得ない瞬間、わたしが知っている彼女の微笑みと今の杏里かのじょがぶれること無く重なった。

なぜだかわからない。まったく異なる笑みだというのにわたしの脳裏でそれが正しく一致した。

まるで理解出来ない事。事実、わたし自身もこの事態に着いていけないのだ。

「但ただしだ。予言してやる。——オマエはオレに指一本触れることなく、地面に額を擦りつけることになる」

ニヤリ、と挑発する笑み。

——けして天使なんかではない、偽りなき悪魔の様相。

スウ……とバケモノの表情から感情が消える。

怒りを越えた感情の発露、——圧倒的な殺意の念。

刃物のような冷たい殺意が杏里さんの小さな体軀に叩き付けられている。

「ヒト如きがよく吠える——ならば手足を引き千切り、犯し殺してやる。玩具のように内蔵はらわたを晒して死ぬがいい」

膨れ上がる殺意を合図にするように、バケモノがその巨大な足を鎌のように地面に振り下ろす。

跳躍——！

ビロードの絨毯を蹴散らして、巨軀が有り得ない速度にて肉薄す

る。

それは瞬きのような瞬間のこと。

地面が弾ける音を聞いたその刹那には、獣は杏里さんの足下まで迫っていた。

丁寧に並び付けられた長椅子を、薙ぎ倒し進む姿は鉄の砲弾それだ。

暗黒の塊が風抵抗を突き破って杏里さんに迫る。

だというのに彼女は、立ち上がるどころかなんの防衛動作すらしていない。

あれだけの巨軀にあれだけスピードだ、見てからの回避ではとても間に合うわけが無い。

あれを躲すのならば、解き放たれるよりも早く反応せねばならなかった。

もう遅い。

黒い暴風が三分の一にも満たない体軀の少女を跳ね飛ばすだろう。刹那に決した勝負。

そもそもあれは人が抗うべき存在ではなかったのだ。

わたしは——声すら無く、ただその瞬間を呆然と見つめるしかない。

縛り付けられたわたしは木偶も同じだ。

まるでコマ送りの世界のように杏里さんを飲み込もうとする竜巻じみた巨体。

塵一つ残さず彼女の身体はこの世から消え去るだろう刹那、

「あ——」わずかに出た嗚咽は凶暴な殺意の中で霧散する。

——間に合わない、

絶望的な死が香り立つ、

その友人の今際の時、目を背けようとするわたしの頭上になにかが煌めいた。

茫洋としたほのかな光。

——流星……？

そんな思考が這いあがってくるの同時に、まるで圧力をかけられたように天窓がひしゃげ弾けた。

舞い散るガラス片、きらきらと輝いて月のかげら。

その中にひとつの黒い影がある。

月のかげらを携え、漆黒の影が数度旋回を重ねる。

その間、一秒にも満たない。

わたしが瞼を閉じて開けるようなわずかな時間、

ガラス片を縫うように飛び交う散弾。

一発じゃない、それは束。銃弾の嵐。

まるで雨が降り注ぐが如く、降り注ぐ銃弾はわたしを拘束する強固な糸を挟り、引きちぎる。

自由を手に入れたわたしはそのまま落下して地面へ激突してしまう。

「あぎゃ——」っと女子力ゼロの悲鳴を上げながら地面を転がると、身体を捻り即座に立ち上がって、

「——杏里さん！！」

拘束が解けたことで精神的な束縛も緩まったのか、死の今際に直面していた友人の名を叫び振りかえった。

見つけた。

その背中、小さな体躯と流れるように長い金髪。

その細い身体はいまだ健在。

あの凶暴じみた突撃に曝されることもなく、そこに在った。

否——折れそうな腰を抱くようにあの飛来してきた影が抱き抱えている。

杏里さんを蹴散らそうとしたその巨軀は――、

「え？」

わたしは驚きの声をあげる、なぜならあの暴風のような一撃を現れた影が受け止めていたのだ。

「――き、さま……」

ゆつくりと、

「――この地上に貴様達、“不浄なる混沌”の住まう地はない、疾とく消えろ」

現れた一点の黒が獣に向かって答える。

冷徹な声――氷河を感じさせるような声でそう告げると受け止めていた手で巨軀を払いのけ――、

一蹴。

ただそれだけ。

裂帛も術式もそこに存在しない。

あの両者の身体は明らかに獣のほうが大きいというのに、たった一発の蹴りでその巨軀を吹っ飛ばしたのだ。

強力な慣性を叩きつけられたバケモノはその勢いのままで長椅子を薙ぎ倒して壁に激突する。

破散する長椅子と土壁。朦朧と木片が舞い上がりパラパラと、天井の埃が散ってその衝撃の深さを見せつけた。

「オイ、低脳。どうした？　オレを殺すんじゃないのかよ。寝

っ転がってどうしたよ、エエ？ それじゃオレを殺すとか夢のまた夢だぜ」

ひしゃげた天窓から差し込む柔らかい光に包まれるように影に抱かれた杏里さんは妖艶だ。わたしの知る美しさの類ではない。なにか危険なものを孕んだ魔的美貌。

「――ぐ、う……殺す……」

地の底から響くような怨差の声。それそのものが呪詛である。

やがて月明かりの角度が杏里さんを抱いた影、その姿を暴きだす。それは黒衣を纏う長身の青年。頬から鼻筋にかけて肌を削り取るようにしてついた傷跡。赤銅色に染まった短い髪が風に揺れる。

この姿の面影をわたしはよく知っている。

優しい面影の好青年――マキナ神父。

「マキナ――ベルフラムツッ」

バケモノの裂帛がビリビリと礼拝堂を揺らした。

だがそれに晒されたマキナ神父は微動だにしない。

まるで精巧に凝らされた人形のように、彼女を守るべく抱いたまま事態だけを見つめている。

「イイだろ？ ――オレの物だぜ^{モン}」

その憂いを帯びる横顔を杏里さんの両手が包み込むように撫で労る。

その指先は淫美にして繊細、頬を撫でる手は首に回され抱き締めるように。

神父もそれに応えるように腰に回した腕で杏里さんをきつく抱き

締めた。

――神の膝元で抱き合う姿は神々しい。

一瞬だけわたしは我を忘れてその光景に酔いしれる。

地の底から響く声と、それを知らぬ天の星。

この世界の有りようがそこにあつた。

「R U A A A A A A A A A A A A | ツ ツ ! !」

静寂を引き裂くようにその巨体が地を這うように跳ね飛ぶ。

その加速は先程の比ではない。巨軀が飛び出す衝撃は長椅子の残骸をはね飛ばし、凶暴さを見せ示す。

「――王の御前だ、獣。黙して額付け」

腰から拳銃のようなものを流れるような動作で引き抜くと即座に放たれる銃弾。

それは高速で飛来する獣を正確無比に撃ち貫いた。

飛び出した慣性を挫かれた巨軀はそのまま前のめりに倒れ込み地面に額を擦りつけてしまう。

それは神父が唱えた如く、額を押し付けて赦しを乞うような姿勢になっていた。

あの鋼鉄めいた皮膚……いや、あの肌は装甲のような硬度を持っているのは間違いない。

だというのに――神父の持ったあの拳銃はその装甲を紙屑と同じと云わんばかりに貫いた。

神父はその長身の赤い拳銃を手にしたまま、冷めた視線でバケモノを凝視している。

禍々しい赤——バケモノという暴力に拮抗するために作られた柎外れの暴力装置。

そう銃とは本来、己の力では太刀打ちできぬものを打倒するために作られた破格の殺戮概念である。

あの銃はその概念に長じている、そういう風に設計されているのだ。

「ガアアアア……」

「オイオイ、どうしたんだよ。さっきまでの威勢はどこに行っただ、シャザール先生よオ」

悶え苦しむバケモノ、それを見て嬲るような言葉と嘲笑。

あの並外れたような容姿から溢れ湧き出すのは圧倒的悪意。

それはこのバケモノと相違ない。いや、それを上回るほどの悪意の質。

「さてま、っと……種明かしといきましょうかねェ」

スッ、と神父の懷から離れると苦痛で動けないバケモノに近づく。

「種、明かし……だと……?」

「おう。ここに行方不明になっている生徒がいるってことだよ」

——え?

「あ、杏里さん……それどういう」

「あ? だから行方不明の生徒はここに居んだよ。高度な結界に誤魔化されちまってたけど、どう考えてもここしか無エもんな、そうだろ、先生」

前のめりに倒れているその顔の前まで近づくと、見下すように笑う。

「まずだ、人払いの結界については内側に入っちゃえばなんてことねエ——意識を殺して侵入すればお終いだ」

いや、それ口でいうほど楽じゃないと思うけど……そう考えてるとギロツとこつちを睨んできて思わずびくつと跳ね上がる。

「——方向感覚の欠落したアホには効果ねエよな。地理もクソも無エし、現在位置が不明で常に不安定な人間に心理的圧力があるわけも無エ——つか」

そこまで淡々と話したのち、なにかを思い出したようにマキナ神父に振り返る。

「——そういやマキナッ、テメー見張ってろって言ってたのになんでコイツを通してんだ」

「俺が命じられたのは＜危険因子の排除＞だ。鹿島恵はそれに該当しない」

怒鳴りつけるような言葉を気にした様子もなく、マキナ神父は答える。

「つたく……仕事しろよな。ま、いいや。話を戻すが——あとはこっちの結界については正直オレもわからなかった。見過ごしちゃうレベルの高技術結界だと言っていいな——けどな」

再びわたしの顔を見るとニタアととても嫌らしい笑みを浮かべ、

「この異分子のおかげで自分の見過ごしている違和感に気がついたんだよ。ようするに共通認識だ——ふたり同時に見見過ごしている事実こそが結界の暗示ってことだろ」

と言い切った。

「やめろ……」

喘ぐように言葉を吐き出すバケモノ。

それを見た、杏里さんの表情が輝く。

哄笑。礼拝堂を引き裂くような笑い声。

「いいねェ。オレはそいつが見たかったんだよ、シャザールせんせッ。その絶望の表情だ。最ッ高だよ」

吐き気を催すような悪意。

天使のような少女から殴りつけるような悪意の束が浴びせられる。一頻り笑った後、ひとつ大きなため息を付く。小さく囁くような声。

「だ」

「え？」

「やめろ！……」

わたしの疑問をかき消すようなバケモノの制止。

ククッ、と低く笑みをコボすと杏里さんは息を吸い込む。

吐き出される、その言葉――。

「それは、赦されぬ！ それはあの方の夢――壊す権利など貴様には――」

心臓を掴み出してしまおうような、夥しい血をまき散らし立ち上がるバケモノ。

壮絶。

立ち上がる力など有りようもないはずだというのに蜘蛛のバケモノは立ち上がり――。

「王の前だと言った。額衝け、下郎」

唯一、その力を支えていた二本の足を引きちぎるように打ち抜かれ無様に地に這い蹲った。

わずか一寸、早撃ちというにも程がある。

杏里さんの余裕はその絶対の信頼の元なのだろう。

「誰の夢だか知らねエよ――こっちにしてみりゃ悪夢なんだぜ。こんなモン、必要ねエ。だから壊すんだ」

大きく息を飲む。

「意識を殺すな、ゆっくりと見上げろ。真実はソコにある」

杏里さんがゆっくりと表を上げ天井を仰いだ。
ピシッ

まるでガラスにヒビが入るように濁った音。

そして耐久性を失い、割れるような激しい音と共に今までなぜか見上げることをしなかった頭上が視界に飛び込んできた。

目に焼き付く光景、

そうだ、あのとき見た蜘蛛の糸は——糸ではなく、

ロザリオ……生徒の持っていたロザリオ……。

「ヒィッ——!？」

天井に張り付けられた娘、娘、娘娘娘娘——どれもどこかしらに欠損部がある。

人形なんかじゃない、生身の人間——その部位が蜘蛛の糸で巻き上げられ天井中にみっしりと張り付けられていた。

「——いい趣味なこつて。まだ……生存者もいるようだ」

ケッ、と胸が悪そうに言い捨てると、杏里さんはバケモノに向き直る。

「有象無象がどうなろうがオレの知るところじゃねエ、だがオレの庭を荒らしたツケはきっちり支払ってもらうぜ」

そういいをバケモノにらみつけると、血を流す前足を踏みつけた。

「グアアアアアアッ!?!？」

響く悲痛の絶叫。

激痛に喘ぐその表情はわたしたちとなんら変わらない。

「おうおう、色っぽい声出せるじゃねエか。ソソっちまうぜ」

苦しみ悶える姿を見てなにがおかしいのか、叫声に呼応するような哄笑をまき散らす。

まるであべこべ。

これではどちらがバケモノか分かったものじゃない。

胸焼けになり、この場で嘔吐してしまいそうな感覚。

それほどなまでに悠生杏里の行為は異質だ。

「も——」

耐えきれない、

正気を保てない。

狂ってる、

歯車が軋む。

「もう——やめて!!」

「……………」

わたしの制止の声に悠生杏里の哄笑が止まり、こちらを見据える。

「こんな行為、狂ってる……こんな行動間違ってる……!」

「……………あ?」

浮かされた熱が急激に冷めていくのか、先ほどまでの悪鬼のような表情はない。

かわりにわたしを見つめて心底から呆れたような表情になる。

「なにが狂ってるんだ、恵。オレはコイツのした行為の半分も満たねエ行為しかやってないんだぜ。オレが狂ってるならコイツはなんなんだ」

「――それは――」

「上辺だけで思考を満たすな。質で考えろ。死に購うのは死しかね
エ」

「だけど！　――こんな惨たらしい方法なんて！」

「惨いも、酷いもねエ。――死は死だろ。この世界に不条理な死な
んて存在しねエんだよ」

ヒラツとわたしを小馬鹿にするように手で扇ぐ。

「死はなにも生み出さねエし、死人に罪過は問えねエ。死はいつで
も無価値なんだぜ。つまり罪過とはソイツの有限を摺り潰す行いの
ことだ。だからコイツから擦り切れるまで罰を搾り取る――当然の
権利だつろ、と！」

話をする間に足を上げ、それを振り下ろす。

踏みつけられた前足がミリ、と軋んでバケモノが喘ぐ。

「ちよつと！　だからってあなたに誰かを罰する権利なんてないで
しょ」

「じゃあ誰ならあるってんだ。誰だったらコイツをブチ殺してい
んだ？」

「そつ、それは……」

答えられる筈がない。誰が殺していいかなんて答えは持ちあわせ
ていようもない。

「……だったらいいだろ、誰も出来ねえってんならオレがやってやる」

——はあ？

突拍子の無い発言に思わずわたしの思考が寸断される。

なにを言い出しているんだ、この人は……。

あまりに思考が吹っ飛びすぎて、それに追隨するだけでも頭がおかしくなりそうだ。

どうしてこんな人、と頭の中がぐるぐると巡って優しくしてくれた杏里さんの表情が浮かび上がる。

訳がわからない、目の前の悪魔と記憶の中の天使がどろどろと瞼の裏に重なりあつて像を結ぶ。

「それに——オレを杏里さんって呼ぶなよ。百歩譲っても……オレは杏里くんだ」

なにかが——その時音をたてて壊れた。

「うそ……」

「嘘なんていうかよ。オレはれっきとした男だ」

「じゃっじゃあ、その声」

「声変わりがきてねえんだよ」

「その容姿！」

「美人だろ？」

「その格好!!」

「趣味だ」

「……………」

言葉にならない。言葉にしようがない。

とにかくこらえようのない感情が沸き上がり、わたしの胸元をグジグジとかき回す。

「——ここはオレの庭だ。好き勝手に荒らされたら困んだよ。だからコイツには相応の苦痛を与えてやらねェと収まらないってことだ」

「————。」

わたしの横をすり抜けようとする杏里くん。通りすがり際に、

「オマエ、オレに見惚れていただろ？　なんなら抱いてやってもいいんだぜ」

その言葉に——視界がカア、赤く染まった。

甲高く響く音、

乾いた破裂音のような振動。

気がつけばわたしの手は杏里くんの頬を平手で叩いていた。

「あなた……最ッ低……」

涙が流れそうになっているのを堪え、網膜に涙を湛えたまま呻く

ように言った。

叩かれた当人は、平静のままゆっくりと頬を撫でる。

「ハッ……上等だ」

ニヤリと心底まで邪悪そうな笑みを浮かべてわたしを見つめた。

「は、はっ——GRRRRRRRRRRッッ!!」

突如、沈黙を守っていたバケモノが起きあがり、わたしに向けてその巨大な前足を振るってくる。

「——え!？」

当然わたしは反応が出来るわけもない。一般人が急な危機に瀕した時の行動は停止である。

当然のことながらわたしはその凶悪な爪が眼下に振り下ろされようとしているのに身動きひとつ出来ない。

「ちいッ……!」

杏里くんの舌打ち。わたしを押し倒すように腰あたりにタックルをするとそのままわたしを突き飛ばして、地面を転がる。

間一髪のところである。その刺槍の前足はわたしに突き刺さることもなく地面を大きく穿ち、石床に穴をあけた。

「ちやつかり自己修復してやがったのか! ——マキナ!」

わたしを押し倒したままの姿勢で振り返り、マキナ神父の名前を叫ぶ。

だがその命令よりも早く神父はバケモノに肉薄し、先ほどの如く右足を唸らせる。

今度は機敏に6本の足を器用に動かして、神父の攻撃をかわすと二本の前足で神父を貫くように動かす。

「――ッ」

蹴りをかわされた直後の体勢では、回避は困難。だが神父は神業めいた動きで、前足の一本目を頭を 左右に動かすスウエーだけで回避しきる。

だがもう一本の攻撃を回避する手段がない。胸を穿つ角度にえぐり込むように迫る爪。

直撃――だれもがそれを予想しただろう。

だが、その前足を銃身でかろうじて受け止める。

あれだけの質量がのしかかる攻撃だ、神父の身体が沈んで地面に亀裂がはしる。

「――なぶって楽しんでいる場合ではなかったな、人間。形勢逆転というヤツだ」

さらにねじ込むように神父に体重をかけるバケモノ。押し込まれて神父の額に爪が押しつけられる。

数秒先の未来は死。額をかち割られ脳漿をまき散らし絶命する姿。爪先がマキナ神父の額に食い込んだ時、

「阿呆め――膂力の有無が戦力を決めると思ったか」

そうつぶやくと、神父の魔力が瞬間的に膨れ上がった。

刹那、神父の額を貫こうとしていた前足が大きく宙を舞いわたしの近くに滑るように転がって止まった。

グアアアアア!!!?

その絶叫に向き直ると前足を失い、悶えるバケモノといまだ健在の神父。神父のその手には――

――光の剣……?

銃身から光状の剣が突き出している。見た目としては銃剣、突撃兵などが扱うそれである。

その銃剣を、光が形を成し剣の代換をしている。

「光^{シエルソード}霊剣だ」

杏里くんがつぶやいた。

魔法を唱える――というように、魔法を行使するには必ず予備動作を必要とする。

呪文を唱える、一定の動作をする。魔法という秘業を行使するということとはそれ相応の代価を支払わなければならないのだ。

「ありゃ、厳密には魔法じゃない。魔力を集約させて束にして形成してる刃だからな。原理は光と同じだ」

光も収斂させ、指向性を持たせることで殺傷能力を獲得するように、魔力を集約させて刃と成した。

それがあの剣。

「あっ」と口にして思い出す。

わたしはこの人（杏里）にムカついているんだった。

慌ててしかめっ面をするわたしを横目に笑う杏里くん。

神父のほうに向き直ると既に攻防が入れ替わっていた。

腕を切り落とし、苦痛に喘ぐバケモノの懷に一気に肉薄すると光剣を振るって前足だけでなく四方の足を同時に切り落としていく。

神業的。あまりの早さにわたしの目には捉えきれない。

それゆえに現実性が薄く、まるで弟が遊んでいたモンスターをやっつけるゲームを見てるような錯覚すら覚える。

それほどの手練れ、どこを破壊すれば敵を倒せるか理解しきった妙技。

バケモノの一瞬、やられたことに気づかず呆然と立ち尽くし、体バランスが崩れることでようやく自分が切られた事実気がついた。再び、沈む巨体。地面に突っ伏して額を擦りつける。

「これでは再生も叶わんだろう。投了だ」

額にゴリツ、と赤い銃口を突きつけて言い放つ。

苦痛と苦渋にゆがむ、シャザール先生だったものの顔。

今にも飛びついてその、端正な顔をかみ砕こうとしているようだ。

「ご苦労だぜ、マキナ。そのまま生かしておくとまた面倒やらかしそうだな。王の判決を下してやる——ここで朽ちろバケモノ」

ニヤツ、とまた嫌らしい笑み。首をかつきるような仕草の後に親指をあげてそれを裏返す。

明確な殺人許可——

「ちよっ……まっ！」

わたしが制止の声をあげようとした瞬間、

ふわりと、丸い珠のようなモノが潜り込んでくる。

なんだろう、と考えたその時、

——風が爆ぜる。

いや、風が爆ぜたわけではない。

強烈な爆発だ。

圧縮された空気が炸裂して、まるで竜巻のようにあらゆるものを薙ぎ払う。

その強烈な風を真っ正面から受け止めてしまった わたしは撥ね飛ばされて教会の壁に叩きつけられ――

「……あれ？」

――てない？

気がつくのと力強い腕の中にいる。

その顔を見上げると凜々しい好青年。冷たい光を宿した瞳がわたしを見下ろしている。

わたしはマキナ神父の腕の中でお姫様だっこされていたのだ。

「あわわ、あわわわわっ……！」

「怪我は」

「なっないですっ……」

「ならいい」

どうやら暴風は一瞬だけだったらしい。

ただその炸裂弾のような暴風で見回せば礼拝堂は半壊になっている。

天窓は割れて、見事なステンドグラスもただの空気穴に、主の像はへし折れて、もちろん長椅子もビロードの絨毯も云うまでもない。

「っ痛……どういうことだ、こりゃ。おい、マキナ！ 新手がいるなんて訊いてねェぞ」

ガラッ、と原型を留めていない木の長椅子の残骸を押し退けて現れる杏里くん。綺麗な金髪が暴風で乱れていた。

「さあな、俺も知らなかったことだ。そもそも複数犯だったということも今知った事実だ」

わたしをお姫様のように抱えたまま、激昂する杏里くんとは対照的に淡々と答えるマキナ神父。

「そもそも調べるのはお前の仕事だろう。俺の仕事はハジくだけだ」

初めて異性に抱かれることでときどきと乙女全開状態のわたしの心境など知るまでもなく、神父はわたしの身体をゆっくりと下ろし、夢の時間は終わってしまう。

「分かってるっての、クソ。で——逃げられたのか？」

「あの死に体にどれほどの力があつたのか知らんが、どうやら逃げられたようだ」

「チッ」と舌打ちをして足下の木椅子の残骸を蹴りあげる杏里くん。

「いつまでもこうしてても仕方がねェな。おい恵っ、帰るぞ」

「待ってよっ、上のみんなはどうするのよっ」

「あ？ それはオレたちの仕事じゃねェよ。あとは聖徒会がやってくれる。——早く逃げないと見つかったちまうぞ」

杏里くんがそういうや否や、わたしの手を掴む――

今までの杏里さんと今の杏里さんの乖離に戸惑いを隠せず

わたしは先ほどの嫌悪感が沸き上がると「イヤっ」と言ってその手を振り払う。

「……………」

「……………ごっ……………ごめ」

嫌悪感に勝る自己嫌悪が胸中を這いあがる。慌てて謝ろうとするわたしの声にかぶせるように、

「チツ…………じゃあひとりで帰れよ。せっかく迎えにきてやったのによォ」

そう言って悪態をつく杏里くん、背中を向けると乱れた髪を二度、三度と撫でた。

どことなく寂しそうな様子で、二度、三度と足場を蹴飛ばすとそのままクルリと踵を返す。

「じゃあな、部屋替えなら―――なにも言わねェから」

わたしの行動を拒絶と取ったのか、背中を向けたまま杏里くんがそう言って歩きだす。

それに沿うように神父もその後ろ姿を守るように歩きだし、不意に立ち止まるとわたしを見つめた。

「―――どんな判断をしようと彼奴は気にしない。そういう奴だ、だからお前も気にしないことだ」

そういうと主に仕える騎士のようにその背中についていく。

ひとり取り残され、全快したステンドグラスの窓穴から春先の冷たい風が吹きすさぶ。

熱が冷めたように、不意に冷静になって。

「――帰らなきゃ、いけないよね……」

悪夢のような時間は終わった。

わたしが失踪してしまうかもしれない、事件。

一度、天井を見上げて――。

いまだに張り付けにされている生徒たちを見る。

両手を合わせて、心の中で謝ると後ろ髪引かれる思いでその場を後にしたのだった。

事件は終わった。

その時、わたしは勝手にそう思っていた。

けれど――事態は今も流動を続けていてとんでもないことに発展するなんてこの時は思ってもみなかった。

要するに、

つくづくわたしは愚か者だったという事実だった。

黄金の聖者と黒き聖母（後書き）

これにて物語における序章を終えました。

今回部分は元々、私が荒れていた時に書いてた部分もあって荒摺りです。

納得いつてない部分ですので細かく修正をするかもしれません。

もしよろしければお付き合い頂けたら嬉しいです。

尚、誤字脱字など報告いただけると幸いです。

作品内における設定、宗教、主張は現実に沿うものではないことを留意していただけると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2273ba/>

魔王と輪舞曲を

2012年1月13日17時46分発行